

續國譯漢文大成

文學部

八十三

309

65

後入



始



續國譯漢文大成

吉田待郎氏

寄贈本

文學部第八十三册(第二十一帙の三)

高青邱詩集三の三



高青邱集 卷十二

五言律詩

草堂夜集

山家具雞黍。夜與故人期。
暫喜逢歡會。都忘在亂離。
火寒移坐密。燭盡得詩遲。
莫聽高城角。明朝別又悲。

草堂夜集

山家、雞黍を具へ、夜、故人と期す。
暫く歡會に逢ふを喜び、すべて亂離に在るを忘る。
火寒くして坐を移すこと密、燭盡きて詩を得ること遅し。
聽くなかれ高城の角、明朝別又悲し。

【字解】(一) 雞黍 雞を殺し黍を炊いで、御馳走をする。(二) 移坐密 坐を移して互に接近する。

【題義】 草堂は、青邱の寓居。ある夜、そこに詩會を催し、その席上に於て作つたのである。

【詩意】 折角、この夜、詩會を催すのであるが、山家の事として、格別珍らしいものなく、雞を殺し、黍を炊ぎ、やつと用意が整うて、人人は、追追參集した。しばしの間なりとも、ここに、樂しき會合を爲すことは、まことに喜ばしく、今しも、亂離の世に在ることも、すつかり忘れた位。やがて、火が

灰がちに成つて、消えかけると、期せずして、皆の者が坐を移して、くつき合ひ、燭盡きむとする頃、やつと詩が出来て、どうやら、責任を果したといふ様な工合。程なく蘇州城の高い處で、角聲寒を警めて吹くだらうが、明朝の別れの悲しきを思へば、むしろ、之を聞かぬ方が宜しい。

【餘論】至極なだらかに出来て居て、應酬の作としては、先づ存するに足るべく、殊に前聯十字は、その時世に極めて適切である——以下、毎首に評語を書くことは、いたづらに紙数を増すのみならず、千篇一律になつて面白くないから、御免を蒙ることとし、その佳なるもの限りて、幾許の閉言語を弄することにする。

過胡博士郊居

胡博士の郊居を過ぐ

頭白蘭陵客。幽居共一村。

頭は白し蘭陵の客、幽居共に一村。

老來吟力退。貧去告身存。

老來、吟力退き、貧去、告身存す。

夕吹鳴梨葉。秋泉注稻根。

夕吹、梨葉を鳴らし、秋泉、稻根に注ぐ。

時因來問筮。獨叩樹間門。

時に來つて筮を問ふに因つて、獨り叩く樹間の門。

【字解】【一】蘭陵 一統志に「常州武進縣、晉、南蘭陵郡を置く、梁、改めて蘭陵縣となす」とある。元來、蘭陵は、戰國の末、荀卿が晩年居つた處、胡博士は其地の人であつたらうが、併せて荀卿に比擬する意も籠つて居る。【二】共一村 青邱と同じ處に寓

居したものと見える。【三】告身 唐書に「文武官、皆告身を給す、符を以て其上に印す、これを告身といふ」とあつて、即ち今の辭令書。【四】夕吹 夕風。【五】問筮 題下の原注に「胡は筮を善くす」とある。

【題義】この詩は、同村に居る胡博士の寓居を訪問して作つたのである。博士、名は翰、後に卷十三に答三胡博士留別の詩があつて、多分、その人と思はれるから、略傳は、その處で述べることにする。

【詩意】君は、蘭陵の出身で、學問もあるが、世に用ひられずして、頭も白くなり、われと同じく、この村内に幽居を定めて居る。老來、詩を作る力も次第に退き、貧乏になつても、むかし貰つた辭令書だけは、残つて居て、もとは、御歴歷である。君の居宅のあたりは、今しも秋の末、夕風は、さわさわと梨の葉を鳴らし、秋の泉は、刈つた跡の稻の根に注いで居る。予は、卜筮を遣つて貰ふ爲に、ひとり來つて、樹間の門を叩き、ここに君を訪うたのである。

送茅侯

茅侯を送る

欲知難別意。孤棹去還停。

別れ難きの意を知らしめむと欲す、孤棹去つて還た停まる。

候吏分遙邇。離人雜醉醒。

候吏、遙邇を分ち、離人、醉醒を雜ふ。

城臨秋水渡。樹帶夕陽亭。

城は秋水の渡に臨み、樹は夕陽の亭を帶ぶ。

後夜看吟燭。憐君宿郡廳。後夜、吟燭を看る、憐む、君が郡廳に宿するを。

【字解】(一) 欲知、知らむと欲すではなく、知らしめむと欲すと讀みたい。漢文では、自動、他動の區別は、はつきりしないし、且つ、これは詩であるから、かういふ用法も、許されることと思ふ。(二) 候吏、送迎の役人。(三) 遠近、遠近に同じ。(四) 雁人、客子といふに同じ。(五) 後夜、他夜に同じ。(六) 郡廳、郡の官舎。

【題義】 茅侯の侯は君に同じ、つまり茅君、その人、名字不詳。又何の爲、何處に往くか、ともに分

からぬが、さう遠くもない處に赴任するものらしい。
【詩意】 君は、別れ難き意に惱んで居ることを知らしめむが爲に、一葉の舟に棹して、客程に上つたものの、一たび去つては、又止まり、しきりに、踟躕して居られる。送迎の吏員どもは、遠近の各處に分かれて出張つて居るし、従行者の中には、酔つて居るのも、醒めて居るのも交つて居る。州城は、秋水の漲れる渡頭に臨み、樹は、夕日うつらふ驛亭を籠め、ここが即ち君に別れた處である。それから、他夜、われ獨り微吟しつづ、燈火に對する時は、君が伴もなくて、郡の官舎に居られることを思ふであらう。

【餘論】 後聯十字は、明堂にして、遠行神に入るの妙がある。

孤雁

孤雁

衡陽初失伴。歸路遠飛單。衡陽、はじめて伴を失ひ、歸路、遠く飛んで單なり。

度隴將書怯。排空作陣難。隴を度つて書を將て怯、空を排して、陣を作すこと難し。

呼羣雲外急。弔影月中殘。羣を呼んで雲外に急、影を弔うて月中に殘す。

不共亮鷺宿。兼葭夜夜寒。亮鷺と共に宿せず、兼葭、夜夜寒し。

【字解】(一) 衡陽、衡山の南、前に卷十一、題三廬用衡所藏山水圖の詩中にも引いたが、一統志に「回雁峰は、衡州府城の南に在り、雁、衡陽に至つて過ぎず、春に遇うて回る、故に名づく」とあり、王勃の滕王閣序に雁陣驚寒、聲斷衡陽之浦とあつて、雁は回雁峰より南へは飛んで行かないといふことに成つて居る。(二) 度隴、隴は隴山ではなく、田隴の義であらう。(三) 將書怯、手紙を言づかつて居る爲に氣配る。漢書蘇武傳に「常惠、使者に教へて言はしむ、天子、上林中に射て、雁を得たり、足に帛書を繫ぐあり、言ふ、武は某の渾中に在り」といふのが、雁信の出處になつて居るが、蘇武の書は捏造したことで、實際有つたことではない。(四) 作陣、雁の羣が行列をなすこと。(五) 亮鷺、鴨とあひる。

【題義】 孤雁を詠じたので、即ち詠物の體である。

【詩意】 雁は、初め羣をなして、南飛して來たが、衡山の南に於て、同伴にはぐれ、歸る時には、唯だ一羽、遠い天空の上を飛んで居る。大地に下つて、田隴の上を度らうとすると、手紙を言づかつて居るので、萬一の變があつてはならぬといふ心配があるし、最早、大空を推し開くばかりに、陣勢を爲して勢よく飛ぶことも出來ぬ。そこで、たまたま、同伴が來さうなものだといふので、急に雲外に

叫ぶこともあるし、おのが影の淋しきを弔ひつつ、やがて月中に見えなくなつて仕舞ふ。鳴やあひると一處に宿すれば、のん氣で善かりさうだが、兼葭枯れ盡して、夜夜寒く、とても假り寝の夢を結ぶことが出来ないから、下に降りもせず、せつせと飛んで行くので、まことに、憐な身の上である。

曉步園池

曉に園池を歩す

髮隨秋葉落。心共曉雲舒。

髮は秋葉に隨つて落ち、心は曉雲と共に舒ぶ。

稍改新題句。渾忘舊讀書。

稍や新題の句を改め、すべて舊讀の書を忘る。

林爭移樹鳥。池響食萍魚。

林には、樹に移るの鳥を争はしめ、池には、萍を食ふの

無限悠然意。涼天獨步餘。

無限悠然の意、涼天獨歩の餘。

魚を響かしむ。

【字解】(一) 新題句。新に得たる詩句。(二) 舊讀書。むかし讀んだ書。(三) 食萍。萍は浮草。

【題義】步園池とは、無論、園中なる池の周圍を散步すること。

【詩意】わが髮は、秋の枯葉とともに脱落し、年の寄つたのは、流石に悲しいが、散歩する時の心持は、曉の雲と同じく、舒びやかで開く様な氣がする。その間、新に得た詩句を頻りに直して見たりしたが、むかし讀んだ書物をすっかり忘れて仕舞つて、おもふ様な好い字面の見つかからないのは、残念

である。林中には、羣鳥、樹に移らむとして、互に相争ひ、池心には、魚が浮草を食つて、ばくばくと響を爲して居る。涼天の下に獨り散歩すると、悠然として無限の興味の存するを覺え、まことに、のん氣で面白い。

【餘論】後聯十字は、稍や刻劃に過ぎて居るが、西崑體に近き佳句である。

次韻過建平縣

次韻、建平縣を過ぐ

縣雖三戶小。地僻罷兵防。

縣は、三戸小なりと雖も、地は僻にして、兵防を罷む。

茶市逢山客。楓祠祭石郎。

茶市、山客に逢ひ、楓祠、石郎を祭る。

雲埋鳴澗斧。沙膠度溪航。

雲は埋む澗に鳴るの斧、沙は膠す溪を渡るの航。

應愛青山好。經過駐旅裝。

應に愛すべし、青山の好きを、經過して旅裝を駐む。

【字解】(一) 三戸小。史記項羽本紀に「楚の南公曰く、楚は三戸と雖も、秦を亡ぼすは必ず楚ならむ」とあつて、その注に「三戸とは、楚の三大姓、昭景景なり」とある。出處は、無論、これであらうが、意味は、人家唯だ三軒といつて、戸數の極めて少きを云つたのである。(二) 兵防。兵を以て防禦する。(三) 茶市。茶の市場。(四) 楓祠。楓樹に倚り添ふ小祠。(五) 石郎。一統志に「宋の石公弼、廣德縣に知たり、政績あり」と見ゆ。(六) 鳴澗斧。樵夫の斧聲が澗中に鳴る。(七) 度溪航。航は小舟。

【題義】建平は、廣德州に屬した山縣、ある人が其地を經過した詩を見せたから、次韻したといふの

で、青邱自身、そこに旅行をしたのではないらしい。

【詩意】建平縣は、戸數も碌碌無い位であるが、地の僻遠なる爲め、寇盜の來襲するものなく、刻下騷亂の世でも、郷兵を以て、防守する必要はない。時たま、茶の市場が開かれると、山中に住むものが、商品を賣り出しに来るし、楓樹の下なる小祠には、石公弼を祀つて、長しへに、その政績を記念して居る。樵夫の斧聲は、洞中に響いて居るが、白雲に埋められて、何處とも分ならず、溪を度る小舟は、沙に膠著した儘、棄てツボかしてある。青山の景色、殊に宜しくして、愛するに堪へたる程であるから、經過するものは、旅装を駐めて、しばしば留賞して時を移すとのことである。

【餘論】この詩の後聯は、いささか面白く、溪山幽僻の景を盡して居る。

鵲軒

鵲軒

金華朱少府、生時^有鵲集於庭後樹、每歲生日、輒一來、其母將死、鵲悲鳴、久之而去、因以名軒、識其思母之意云、

【訓讀】金華の朱少府、生まるる時、鵲あつて、庭後の樹に集まる。毎歲生日、輒ち一たび來る。その母、將に死せむとするや、鵲、悲鳴し、これに久しうして去る。因つて、以て軒に名づけ、その母を思ふの意を識すと云ふ。

神鵲曉鳴枝、飛來自有期。

神鵲、曉に枝に鳴き、飛び來る、自ら期あり。

門前懸矢日、堂上捧樽時。

門前、矢を懸くるの日、堂上、樽を捧ぐるの時。

詎信填河事、寧歌繞樹詩。

詎ぞ信せむ、河を填むるの事、寧ろ歌はむや、樹を繞る

只憐君望斷、風木助餘悲。

只だ憐む、君望み斷え、風木、餘悲を助くるを。の詩。

【字解】(一) 門前懸矢、前に卷十一、張仙畫像の詩中にも引いたが、禮記内則に「子生まる、男子ならば、氣を門左に設く」とある。(二) 堂上捧樽、高堂の上に酒樽を捧げて生辰を祝す。(三) 填河事、淮南子に「烏鵲、河を填めて織女を渡す」とある。

【題義】小序の意味は——金華の朱少府は、生まれる時に、鵲が庭後の木に止まつたことがあり、それから、毎年誕生日には、必ず一たび來た。そして、母の將に死せむとする時にも、來て悲鳴し、これに久しうして、飛び去つた。そこで、朱君は、その居るところを鵲軒と號し、母を思ふ誠意を識したとのことで、仍つて、その軒に寄題したのである。なほ少府は、縣令の尊稱。朱少府その人、名字等不詳。

【詩意】 曉早く、神鶴が枝上に啼くが、その飛び來るは、必ず期あつて愆たす、門前に弧を懸けて、朱君が生まれた時を始めとし、堂上に酒樽を捧げて、御祝をする誕生日には、屹度飛んで來た。鶴は、銀河を填めて織女を渡すといふが、そんな事は、信するに足らず、又樹を繞る三匝、何の枝か依るべきといつて、流浪の生涯に喩へられたこともあるが、そんな詩は歌ふにも及ばない。唯だ憐むべきは、朱君が戀しさの餘りに、之を望めども跡方だに見えず、母を喪うて、風木の嘆に堪へざる時、特に飛び來つて、餘悲を助けたことで、朱君が、これを以て軒に名づけたのは、もとより偶然ではない。

寄杜二進士

杜二進士に寄す

花開寄別離。花落正相思。花、開いて別離を寄せ、花、落ちて正に相思ふ。

交誼多年見。郷愁近日知。交誼、多年見はれ、郷愁、近日知る。

我方淹上國。君豈老明時。われ方に上國に淹し、君、豈に明時に老いむや。

試問江干閣。同登復共誰。試みに問ふ江干の閣、同登、復た誰と共にかせむ。

【字解】 【一】寄別離、別離の思を寄せる。 【二】郷愁、故郷を思ふ心。 【三】上國、帝都一帯の地を云ふ。 【四】明時、聖明の御代。 【五】江干閣、江邊の樓閣。

【題義】 杜二の二は排行、よくは分からぬが多分、名を彦正といつた人であらう。

【詩意】 花の開く時は、別離の思を詠出して遠く君に寄せ、花の落ちた時は、相思の情に堪へず、到底、君を忘れることはない。それも其苦、君との交誼は、すでに年久しく、真情愈々顯はれ、その上、われは故郷を思ふ心が近日愈々切なるが故である。今しも、われは、帝都に淹留して居るが、君の才、決して、この聖明の御世に空しく老い朽ちるものではなく、立身も遠からぬことであらう。今しも、江邊の樓閣に、君は誰と共に登臨されるか、予の居ないにつけて、定めて、相思うて居て呉れるであらう。

雨篷

雨篷

楚雨滿汀洲。瀟瀟灑客舟。楚雨、汀洲に滿ち、瀟瀟として客舟に灑ぐ。

夢驚孤枕夜。愁掩一篷秋。夢は驚く孤枕の夜、愁は掩ふ一篷の秋。

葦葉寒相戰。灘聲暗共流。葦葉、寒、相戦ぎ、灘聲、暗、共に流る。

此時湘浦上。同聽只沙鷗。この時、湘浦の上、同じく聽くは只だ沙鷗。

【字解】 【一】楚雨、楚は江南一帯の地を汎稱す。 【二】湘浦、湘水の入り江。

【題義】雨篷の篷はとま、舟の上に掩ひかけるもの。この詩は、雨に濡れた篷を詠じたので、雨中の舟といふのと、略ぼ同じである。

【詩意】楚天の雨は、江上の汀洲に滿ち、瀟瀟として客舟に灑ぎかかつて居る。その雨聲の爲に、孤枕の夜夢は、忽ち驚かされて醒め、蓬は秋の冷かさを掩うて居るが、愁は到底禁せられない。岸上の草の葉は、寒氣を帯びて戦ぎ、江心の灘聲は、暗中に在つて、共に流れて居る。この時、湘水の入り江に宿すると、一しほ物さびしく、唯だ岸邊の鷗が同じく此聲を聞いて居るのみである。

【餘論】前聯は第二句より出で、後聯は第二句を承け、そして、相戦といひ、共流といひ、皆楚雨と併せて云つたので、頗る細心の工夫である。結二句、やや振はぬのは遺憾であるが、夢驚の十字は、新警高婉を以て許すべきものである。

聽秋軒爲僧賦

聽秋軒、僧の爲に賦す

西澗秋聲起、涼風助振號。

西澗、秋聲起り、涼風助けて振號。

數禽翻樹裏、萬葉下亭臯。

數禽、樹裏に翻り、萬葉、亭臯を下る。

初訝來山雨、還疑捲浪濤。

初めは山雨來るかと思ひ、還た浪濤を捲くかと思ふ。

老僧方入定、終夜任蕭騷。

老僧、方に定に入り、終夜、蕭騷に任かす。

【字解】【一】西澗、西の谷間。秋は方位でいへば西に當るから、西澗といふのが殊に通切である。【二】亭臯、驛亭附近の澤地。

【三】蕭騷、秋聲の寂しげに鳴り響く聲をいふ。

【題義】この詩は、ある僧の依頼に應じて、その菴室なる聽秋軒に寄題したのである。

【詩意】西なる谷間から、秋聲が颯然として吹き起ると、涼風が之を助けて、夥しく振動呼號する。數羽の棲禽は驚いて、木の間から翻り落ち、萬葉の落葉は、驛亭附近の澤地に散り布いて居る。その初めて起るときは、山雨の來るかと思つたが、翻つて又、波濤を捲き起す如き様である。軒の名にしおふ秋聲は、此の如くであるが、菴主の老僧は、流石に修養を積んだ人であるから、定に入りし後、少しも心を亂さず、夜もすがら、その聲の騒がしきに任かせて、一向平氣である。

杏花飛燕圖

杏花飛燕の圖

雙飛如鬪捷、終日幾西東。

雙飛して捷を鬪はすが如く、終日幾たびか西東。

尾拂花梢露、身翻柳絮風。

尾は拂ふ花梢の露、身は翻る柳絮の風。

入簾時趁蝶、歸壘每銜蟲。

簾に入つて時に蝶を趁ひ、壘に歸つて毎に蟲を銜む。

何處長相見。佳人院落中。 何の處か、長しへに相見る、佳人院落の中。

【字解】(一) 圓捷 捷は敏捷、素早きこと。(二) 歸壘 壘は燕の巢。(三) 院落 落は區別の義。

【題義】 説明に及ばぬ。

【詩意】 二羽の燕は、竝び飛んで、互に敏捷を争ふが如く、終日幾たびか、西に往つたり、東に往つたりして居る。その間、尾は花の梢の露を拂ひ落し、身は柳の綿を飛ばす輕風の中に翻つて居る。簾内に飛び込んで、時に蝶の跡を趁ひ、巢に歸つた時は、いつでも、蟲を口にくはへて、雛に哺む積りである。この雙燕は、何處で、いつでも見かけるかといへば、佳人の住む深院の一構の中が第一で、さすがに、情思あるものと見える。

扇

扇

皎皎復團團。何人剪素紈。 皎皎復た團團、何人か素紈を剪る。

驅蠅臨几席。撲蝶近闌干。 蠅を驅つて几席に臨み、蝶を撲つて闌干に近し。

似月驚朝見。生風變夏寒。 月に似て、朝に見るに驚き、風を生じて、夏の寒きに變ず。

時移當自棄。莫怨繪乘鸞。 時移つて當に自ら棄てらるべし、乘鸞を繪くを怨む莫れ。

【字解】(一) 皎皎 光明の貌。(二) 團團 丸い貌、婁婕妤の戀歌行に新製齊紈素、皎潔若霜雪、裁爲合歡扇、團團似明月とあるに本づく。(三) 剪素紈 素紈は白色の練り絹。上に引ける戀歌行の新製齊紈素と同義。又瓊娘記に「沈休文、雨夜、書中に獨坐す。風、竹扉を開く、一女子わり、綺羅具を攜へ、門に入つて便ち坐す。風、細雨を飄して、絲の如し。女、風に隨つて引替すれば、綺羅断えず、眞絲の若し。沈に爾つて曰く、これを氷絲といふ、君に贈り、造つて以て氷紈と爲さしめむ」と。沈、後、續つて執と成し、扇を製す、夏日に當つて、甫めて攜へて手に在れば、極かすして自ら涼し」とある。(四) 似月 上に引ける戀歌行の團圓似明月と同じ。(五) 時移當自棄 戀歌行の終に常恐秋節至、涼風奪我熱、棄捐箜篌中、恩情中道絶とある。(六) 繪乘鸞 江淹が婁婕妤に擬した詩に執扇如團月、出自機中素、畫作秦王女、乘鸞向煙霧とある。

【題義】 ここに謂ふ扇は、日本でいふ「あふぎ」ではなく、團扇、即ちうちではである。元來、扇の本義は團扇、丸いものと決まつて居る。それから、例の疊める扇は、宋元の頃、はじめて、日本から支那に輸入したので、當時これを珍重したことが、諸名家の詩中に散見し、もとは摺疊扇といひ、その後、支那でも製造する様になつたのである。

【詩意】 團扇は、皎皎として奇麗であるし、又團團として形は丸く、も何人が白絹を剪つて造つたのであるか。ある時は、蠅を追つて、御馳走の竝べる宴席に臨むべく、ある時は、蝶を撲つて、花咲き匂ふ欄干に近づくことがある。その形の丸い處は、月に似て居るが、夜を待たず、朝でも見えるのは、不思議ともいふべく、風を生じては、夏を變じて寒からしめる。しかし、時移つて、秋の涼しきに遇へば、自然棄てらるべきものであつて、表の繪には、秦の弄玉が鸞に乗じて、その夫の蕭史と共に

に、昇天する處が畫いてあつても、その様に長しへに追隨することが出来ぬから、こんな繪は、癩の種だといつて、怨んだ處で仕方がない。

【餘論】これより以下、詠物の詩が十首ばかり、竝んで居るが、いづれも、拙劣甚しく、殊に、この扇の詩の兩聯に至つては、卑俗庸劣、とても御話に成らず、これでも、青邱の詩かと言ひたくなる位である。

新荷

新荷

如蓋復如鈿。初生雨後天。蓋の如く、復た鈿の如し、初めて生ず雨後の天。

葉低浮水上。莖弱裊風前。葉は低くして水上に浮び、莖は弱くして風前に裊たり。

乍覆游魚戲。難藏宿鷺眠。乍ち游魚の戯るるを覆ふも、宿鷺の眠を藏し難し。

佳人休便折。留蔭採蓮船。佳人、便ち折るを休めよ、留めて蔭せよ採蓮の船。

【字解】(一) 如蓋。蓋は車蓋、蓮の葉の圓く大きくなつたものを云ふ。(二) 如鈿。鈿は弁の類、また葉の十分に開かないのを云ふ。(三) 鳥。たをやか、しなしなして居る鷺。

【題義】爾雅に「荷は芙葉なり、その莖は茹、その葉は荷、その花は菡萏、その實は蓮、その根は藕、

その中は荷」とある。すると、新荷は、新に展び開いた蓮の葉である。

【詩意】蓮の葉は、雨後初めて長成し、その大なるものは、車蓋の如く、その小なるものは、笄の如く、そして、葉は低く水面に浮び、中には、水上に出たのもあるが、その莖は弱弱しくして、たをやかに風前に立つて居る。葉は、ヤツと廣がつたばかりで、游魚の戯るるを覆ふことは出来るが、鷺の宿して眠れるを匿すことは出来ない。佳人よ、わけもなく折り去ることなく、これを留めて、その茂るに任かせたならば、他日、蓮の花を採る時、船を其蔭に寄せることが出来るやうに成らう。

鷺

鷺

雪羽獨修修。閒情戀遠洲。雪羽、ひとり修修、閒情、遠洲を戀ふ。

聲沈煙浦晚。影度月灘秋。聲は沈む煙浦の晩、影は度る月灘の秋。

避棹驚時起。窺魚立未休。棹を避けて驚いて時に起ち、魚を窺うて立つて未だ休まず。

兼葭同夜宿。應只許沙鷗。兼葭、夜宿を同じうす、應に只だ沙鷗に許すべし。

【字解】(一) 雪羽。純白なること雪の如き羽毛。(二) 修修。長き貌。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】 鶯は、雪白の羽毛、修修として長く、その性情、亦た頗る開放にして、人の居ない様な遠洲を暮はしく思つて居る。日暮、煙こめたる浦口に其聲沈む時、秋夜、月冴えたる奔流を其影の度る折からなど、殊に風情がある。或は棹を避けて、驚きつつ時に飛び上り、或は魚を窺うて、立ちどほして居る。夜、兼葭の陰に同じく宿することは、沙鷗にだけ許すので、元來 鷗とは極めて相似たものである。

【餘論】 前聯十字は、簡切取るべきものである。

馬

馬

名駒産渥注。牽出萬人誇。名駒、渥注に産し、牽き出でて萬人に誇る。
 逸足輕千里。高鬣散五花。逸足、千里を輕んじ、高鬣、五花を散す。
 城南游紫陌。塞上踏黄沙。城南、紫陌に遊び、塞上、黄沙を踏む。
 不受蠻奴策。驕嘶向日斜。蠻奴の策を受けず、驕嘶して日の斜なるに向ふ。

【字解】 〔一〕 渥注 杜甫の時に興臨西極馬、來自三渥注池とあつて、西域の地名。〔二〕 逸足 世にすぐれたる駿足。〔三〕 高鬣 鬣はたてがみ。〔四〕 五花 杜甫の高都驪馬行に五花散作雲滿身、萬里方看汗流血とあり、畫斷に「唐人、剪鬣馬を尙ぶ、三

鬣の者を五花といひ、五鬣の者を五花といふ」とある。すると、五花とは、鬣を五段に剪り揃へたものであらう。〔五〕 蠻奴 蠻は南蠻人で、奴隷となつて居るもの、策は鞭。

【題義】 説明に及ばぬ。

【詩意】 渥注に産する名馬を牽き出して、自慢らしく萬人に見せて居るが、なる程、その優れたる駿足は、千里の遠きを物の數ともせず、長い鬣は、五花と稱して、五段に剪り揃へてある。それから城南に出かけては、都大路を游行し、塞上に出でては、滿目の黄沙を踏み、どこに往つても、勢が善い。されば、蠻奴に鞭たれることもなく、夕日の中に於て、誇らしげに高く嘶いて居る。

梧桐

梧桐

井邊雙玉樹。高翠自生涼。井邊の雙玉樹、高翠自ら涼を生ず。
 影散秋雲薄。聲喧夜雨長。影は散じて秋雲薄く、聲は喧しくして夜雨長し。
 疏英飄碧簾。亂葉響銀牀。疏英、碧簾に飄り、亂葉、銀牀に響く。
 綠綺誰能斲。持將奏鳳凰。綠綺、誰か能く斲らむ、持し將て鳳凰を奏す。

【字解】 〔一〕 疏英 まばらに咲く花。〔二〕 碧簾 碧色の竹むしる。〔三〕 亂葉 亂れて落つる葉。〔四〕 銀牀 李白の詩に梧

桐落三金井、一葉飛三銀牀」とある。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】井戸の邊に、二本の見事な桐の樹があつて、見あぐるばかりの翠色は、自然涼しげである。その影の散せし時は、秋雲の薄くなつて晴れしを知るべく、聲の喧しきは、夜もすがら、雨が降り注ぐからである。まばらなる花が散つて碧簾に飄る時、さわさわと亂るる葉が響をなして銀牀に飄る折からなど、ともに風情がある。誰か之を斲つて、絳綺の琴となし、それを持ち出して、鳳凰子飛の一曲を奏するか。桐は、材となつても、殊に貴いものである。

圍碁

圍碁

偶與銷閒客。圍碁向竹林。

偶ま銷閒の客と、碁を圍んで竹林に向ふ。

聲敲驚鶴夢。局罷轉桐陰。

聲は敲いて鶴夢を驚かし、局は罷んで桐陰を轉す。

對坐忘言久。相攻運意深。

對坐、言を忘るること久しく、相攻めて、意を運らすこと

此間元有樂。何用橋中尋。

この間、元と樂あり、何ぞ橋中に尋ぬるを用ひむ。深し。

【字解】【一】聲敲、石を下して碁盤を敲くこと。【二】局罷、ひと勝負終りしこと。【三】橋中樂、前に卷八、書夢の詩中にも

引いたが、幽冥錄に「巴邱の人、一大橋を割く、中に二叟あり、相對して象戲す」とある。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】偶ま銷閒の客と共に、竹林の近くに坐して碁を打つた。その石を下す聲は、鶴の夢を驚かすべく、ひと勝負済むと、桐の木影が移つて行つて、大分時を経過したことが分かつた。兩人對坐せる間は、久しく物いふことを忘れ、互に攻め合ふ爲には、随分深く考へた。かくする間に、一種の妙味が樂となるのであつて、何も古しへの仙人の如く、橋實の中で遣るにも及ばない。

池上晚酌

池上晚酌

夕陽初雨後。團扇送涼過。

夕陽初めて雨後、團扇、涼を送つて過ぐ。

竹裏方歸鳥。沙邊尙浴鵝。

竹裏、方に歸鳥、沙邊、尙ほ鵝を浴す。

脫巾懸峭壁。流罽逐回波。

巾を脱して峭壁に懸け、罽を流して回波を逐ふ。

六逸當年樂。何如此處多。

六逸、當年の樂、この處の多きに何如。

【字解】【一】流罽、罽は玉罽、即ち玉の罽。【二】六逸、唐史に「李白・孔巢父・韓準・裴政・張叔明・陶沔、徂徠山に居り、竹溪六逸と號す」とある。

【題義】 説明に及ばぬ。

【詩意】 雨後に、やつと夕日が出たから、團扇を揮つて、涼を送りつつ出かけて行つた。竹藪の中で、丁度、鳥が塹を争つて歸つて来たが、岸邊に近い處では、未だ鵝鳥が泳いで居る。そこで、頭巾を脱いで、峭壁に掛け、杯を流して、波を追ひかける。むかし、六逸は竹溪に會飲したといふが、現在、この樂多きに比して、その優劣、果して如何であつたらう。

簾

簾

蠻簾巧織成。乍展覺涼生。

蠻簾、巧に織り成す、乍ち展べて、涼生ずるを覺ゆ。

紋蹙寒波細。光搖夜月明。

紋、蹙まつて寒波細、光、搖いて夜月明かなり。

坐令葵扇棄。眠稱石牀平。

坐せば、葵扇をして棄てしめ、眠れば、石牀の平かなるに

須信南軒下。炎天夢亦清。

須らく信すべし、南軒の下、炎天、夢も亦た清きを。

【字解】 (一) 蠻簾、南方に産する簾。(二) 葵扇、詳しくは蒲葵扇、蒲葵の葉で造つた團扇、晉書謝安傳に「婦人に中宿縣を罷むるものあり、還つて、安に謝る。安、その歸資を問ふ。答へて曰く、蒲葵扇五萬あり」と。安、乃ち其中なるものを取つて之を捉る。京師の士庶、競うて市ひ、價、數倍を増す」とある。(三) 石牀平、王維の詩に「雨花塵共石牀平」とある。

【題義】 簾は、邦訓竹むしろ、竹を削いで造つたのもあるが、こののは、簾で編んだものである。

【詩意】 この竹むしろは、蠻地に産する簾を以て手際よく織り成したので、これを廣げると、涼氣の自ら生ずるを覺える位。その上に浮いて見える斑紋は、縮まつて、さながら寒波の細細として打寄する如く、その光澤は、月影を搖かすと、一層はつきりして見える。この上に坐せば、蒲葵の扇も不用であるし、寢心地の善いことは、さながら、石牀の平かなるに匹敵する。無論、これを南軒の下に持ち出すと、どんな炎天でも、夢清くして、まことに善い心持であらう。

射柳

射柳

風煖畫旗張。將軍集射場。

風煖かにして畫旗張り、將軍、射場に集まる。

馬驕嫌轡急。人勇喜弓強。

馬驕つて、轡の急なるを嫌ひ、人勇んで、弓の強きを喜ぶ。

但見青條折。那知白羽翔。

但だ見る、青條の折るるを、那ぞ知らむ、白羽の翔けるを。

三軍歡笑處。巧中勝穿楊。

三軍歡笑の處、巧に中つるは、穿楊に勝れり。

【字解】 (一) 白羽、白羽の矢、國語に「吳王、士卒萬人を陳し、以て方陣となす、皆白常・白旂・素甲・白羽の槍、これを望めば茶の如し」とあつて、その注に「槍は矢の名、白羽を以て楯となす」とある。(二) 穿楊、楊は柳の葉、姜由基が弓の名人で、百步離

れて柳の葉に射中てたといふことは、前にも引いて置いた。

【題義】 演繁露に「射柳は、古しへの籬柳に本づき、柳を折つて毬場に環挿し、軍士、馬を馳せて之を射る。その鏃、甚だ濶く、これを射れば即ち斷ゆ」とあつて、弓術の一演技である。

【詩意】 風は暖かにして、まことに好い日和、射場の周圍には、畫旗を建て、將軍も出席された。馬は、意氣頗る驕つて、手綱で厳しく締められることを嫌ひ、人は、勇み立つて、弓の強きを挽くことが、自慢である。やがて、物の見事に、柳の枝の射飛ばされるのが見えたが、白羽の矢の飛んで來るのは、分からなかつた位。すると、三軍の士は、やんやと喝采し、その巧に射中てたことは、古しへ百歩を隔てて其技の精を誇つた養由基にも勝つて居た。

流螢

流螢

熠燿復青燐。流光不自停。

熠燿、復た青燐、流光自ら停まらず。

「むと欲す。」

暗飛如避月。遠墮欲隨星。

暗に飛んで、月を避くるが如く、遠く墮ちて、星に隨はし。

穿樹臨幽檻。綠莎集小庭。

樹を穿つて、幽檻に臨み、莎に緣つて、小庭に集まる。

莫將羅扇撲。囊取照遺經。

羅扇を以て撲つ莫れ、囊取して遺經を照らさむ。

【字解】 一、熠燿、螢の別名でもあるが、ここでは、矢張り、光るといふ義に見た方が善からう。二、幽檻、檻は欄干。三、綠莎、莎は溼地の草。四、集小庭、集はとまる、ここでは來まるといふ意ではない。五、羅扇撲、杜牧の宮詞に輕羅小扇撲流螢とある。六、囊取、捕へて囊に入れる。晉書車胤傳に「胤、博學多通、家貧にして常に油を得ず。夏月は練囊に數十の螢火を盛り、以て書を照らし、夜、以て日に繼ぐ」とある。七、遺經、聖人の書き残した經書。

【題義】 流螢は、何處からとも分からず飛んで過ぎ行く螢である。

【詩意】 螢の光るは、無論の事だが、よく見ると、青く燐いて居て、中にも流螢は、自ら停まらず、すうと通つて仕舞ふ。その暗い處を目がけて飛ぶは、さながら、月を避くるが如く、遠くで地に墮ちた處は、流星に隨つて往つたかと思はれる。やがて、木の深い處を穿ち入つて、欄干の近くまで來ることもあるし、溼草に繞つて、小庭に止まつて居ることもある。これは、輕羅の小扇を以て撲つことなく、捕へて囊に入れ、聖人の遺經を照らさせ、勉學の人の益になる様にしたら善からう。

水殿圖

水殿の圖

波影繞闌干。清虛似廣寒。

波影、闌干を繞り、清虛、廣寒に似たり。

荷香臨檻挹。月色捲簾看。

荷香、檻に臨みて挹し、月色、簾を捲いて看る。

夜靜聞清吹。涼多却素紈。
宴酣思薦鱠。銀縷簇金盤。

夜は靜にして清吹を聞き、涼多くして素紈を却く。
宴、酣にして鱠を薦めむことを思ふ、銀縷、金盤に簇る。

【字解】(一) 廣寒 月宮を云ふ。龍城錄に「上皇、申天師、道士、鴻都の客と、八月望日の夜、三人同じく雲上に在り、月中に游んで、一大宮を見る、榜して、廣寒清虛の府といふ」とある。この上皇は、唐の玄宗。(二) 荷香 蓮の花の匂ひ、庾信の詩に荷香滿水殿とある。(三) 素紈 紈扇をいふ、班婕妤の新製素紈の句に本づく。(四) 薦鱠 鱠はなます、刺身の類、吳越春秋に「子胥、吳に歸る。吳王、將に至らむとするを聞き、魚を治して鱠となす。時を過ぎて至らず、魚に臭あり。須臾にして、子胥至る。闔閭、鱠を出して食ふ、その臭を知らず。吳人鱠を作るもの、闔閭の造るよりするなり」とある。(五) 銀縷 銀絲に同じ、細くして、その色、銀の如きをいふ。前に卷五、游寶積山の詩中にも引いたが、歐陽原功の詩に吳王宮中宴未終、銀縷斫鱠飛龍鱗とある。

【題義】水殿の圖は、いづれ、水上殿閣の模様を畫いたもので、何處とも分からぬが、詩で見ると、どうも、吳宮らしい。越絶書に「吳王、姑蘇臺を起し、春宵宮を立て、長夜の飲を爲し、天池を作り、池中に青龍舟を作り、日に西施と水嬉を爲す」とあり、李白の詩に風動荷花水殿香、姑蘇臺上宴吳王とある。なほ水殿の圖といふ題は、水殿の圖その物を詠じたのではなく、水殿の圖に題したので、すべて、何何圖とあるは、皆さうである。

【詩意】波影縹緲として、欄干を繞り、清虛たる其様は、廣寒の名にしおふ月宮に似て居る。蓮花の香は、檻に臨んで観ぐことが出来るし、月色は、簾を捲き上げさへすれば、十分に見える。夜の更けて靜かなる儘に、笛を吹く音が聞こえ、涼味多きに因つて、白絹の團扇も不用である。やがて、宴酣なる時、魚の膾が欲しいといへば、銀絲の如く細かに刻んだのを金盤に一ぱい入れて差し出した。

【餘論】この詩中、清の字が復して居る。

新蟬

新蟬

翩翩乍離脫。咽咽試初鳴。
隔葉棲身穩。移柯忽意驚。
亂催窓日墮。微喚浦風生。
何待當秋聽。今朝已感情。

翩翩として乍ち離脱し、咽咽として初鳴を試む。
葉を隔てて身を棲ますこと穩、柯に移つて忽ち意驚く。
亂れて窓日を催して墮さしめ、微に浦風を喚んで生ず。
何ぞ秋に當つて聽くを待たむ、今朝すでに情を感ず。

【字解】(一) 翩翩 身の軽い貌。(二) 離脫 殼から脱け出る。(三) 移柯 柯は枝。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】さも身も輕げに、殼から脱け出たのが、即ち新蟬であつて、咽びながら、試みに初めて鳴き出した。葉を隔てて身を棲ませば、一寸見つからぬから、まことに安穩であるが、枝に移らうとする

と、まだ慣れぬこととて、心に驚く様である。その高い聲で亂鳴するに當つては、窓にさす夕日を落さしめ、細い聲で微吟する時は、浦上の風を生せしむる様である。何も秋に當つてから聞くことを待たず、今朝、これを聞いてだに、すでに、わが情に感じたので、蟬の聲は、まことに哀れなものである。

林間避暑

林間に暑を避く

自愛蠻簾滑。閒舒臥石苔。

自ら愛す、蠻簾の滑かなるを、閒に舒べて石苔に臥す。

松風催暑去。竹月送涼來。

松風、暑を催して去らしめ、竹月、涼を送つて來る。

石氣生琴薦。泉香入茗杯。

石氣、琴薦に生じ、泉香、茗杯に入る。

却憐行路子。愁喝向黃埃。

却つて憐む行路の子、喝を愁へて黃埃に向ふ。

【字解】

【一】蠻簾 竹むしろ、前の簾を誅する時にも蠻簾巧織成とあつた。【二】催暑去 暑氣に向つて催促して去らしめる。

【三】琴薦

琴を入れる囊、皮日休の詩に息絲度日樂琴薦とある。【四】行路子 旅客。【五】愁喝 喝は熱に中ること、日射病に罹る。【六】黃埃 沙ほこり。

【題義】 説明に及ばぬ。

【詩意】 簾で造つた竹むしろのすべすべしたのが、氣に入つたので、これを展べて、石苔の上に横臥した。颯颯たる松上の風は、暑氣を追ひ除けて去らしめ、娟娟たる竹間の月は、涼を送つて來て、まことに心もちが善い。石氣は、濃濃として、琴の囊に生じて之を溼し、泉の味は、椀中の茶に入つて、それと知らるるばかり。氣の毒なのは、旅行する人で、この炎天に際し、暑氣に中てられむことを氣遣ひつつ、沙ほこりの中を歩いて居る。

【餘論】 松風竹月の十字は、名聯を推すべきも、篇中、石の字が複して居るのは、一寸目ざはりである。

送劉省郎出佐邊郡

劉省郎の出でて邊郡に佐たるを送る

符券前軍重。衣冠上客才。

符券、前軍重く、衣冠、上客の才。

地圖連異壤。星次出中台。

地圖、異壤に連り、星次、中台に出づ。

暮雨車投峽。秋風扇却埃。

暮雨、車、峽に投じ、秋風、扇、埃を却く。

省中梧樹在。鳴鳳會重來。

省中、梧樹在り、鳴鳳、會重ねて來らむ。

【字解】

【一】符券 唐書百官志に「門下侍郎二人、侍中の職を掌弒し、侍中闕くれば、没んで、符券を封じ、傳驛を給す」とある。

る。【三】上客 諸侯の賓客。【四】中台 晉書天文志に「三台六星、上中下、兩兩相居り、文昌に起り、列して太微に抵る。一に曰く、天柱、三公の位なり。人在りては、三公といひ、天に在つては三台といふ」とあり、蘇頌の附註に彭州權別駕の詩に「砥道歌謠迎半刺、徒聞禮數揖中台」とある。【五】省中 省は門下省。【六】梧樹 杜甫の詩に「波垣竹埤拾十尋」とある。

【題義】この詩は、門下侍郎の職に居た劉某が、何處か知らぬが、重要な邊郡の佐、即ち太守副貳となつて、新に赴任するのを送つたのである。

【詩意】君は、今まで門下侍郎の職に居て、時には符券を封することを掌り、軍隊の人に重んぜられて居たが、もと諸侯の上客たるべき才あるにより、今回は、邊郡の佐となり、衣冠堂堂として赴任される。その場處は、地圖で見ると、異域に連つて居る邊要の大郡であつて、これまで、天上の星の順序からいふと、中台であつた其清要なる職から轉任されたのも、いかさま、尤もな事である。途すがら、暮雨に逢うては、車を峽中に寄せて、民家に泊まることもあらうし、秋風の吹くにつけては、團扇を手にして、沙ほこりを拂はなければなるまい。門下省には、桐の木があつて、鳳凰は其上に止まつて、朝陽に鳴くものと決まつて居るから、君は、遠からず、召し遣されて、舊省に入るべく、暫時の事であるにつけても、精勵して、その職務に盡して貰ひたい。

溢浦琵琶圖

溢浦琵琶の圖

秋夜相逢處、閨愁雜宦情。

秋夜相逢ふの處、閨愁、宦情に雜はる。

四絃風共拂、兩棹月同明。

四絃、風、ともに拂ひ、兩棹、月、同じく明かなり。

司馬青衫溼、佳人白髮生。

司馬、青衫溼ひ、佳人、白髮生ず。

至今溢浦上、楓葉尙哀聲。

今に至つて、溢浦の上、楓葉、尙ほ哀聲。

【字解】【一】閨愁 閨下に獨處する愁。【二】宦情 薄官邊謫の情。【三】四絃 琵琶を云ふ。【四】兩棹 二艘の舟。【五】司馬青衫溼 白居易の琵琶行に座中泣下誰最多、江州司馬青衫溼とある。【六】楓葉 同じく琵琶行に「楓葉荻花秋瑟瑟」とある。

【題義】溢浦は、一統志に「九江府城西に在り。又琵琶亭は、城西大江の濱に在り。唐の司馬白居易、客を溢浦口に送り、夜、鄰舟琵琶の聲を聞いて、これを問へば、長安の倡女、商人に嫁す、爲に琵琶行を作る、後人、因つて以て亭に名づく」とある。それから、白居易の琵琶行には、序があつて「元和十年、予、九江郡司馬に左遷せらる。明年秋、客を溢浦江に送り、舟中、夜、琵琶を弾するものを聞く。その音を聴くに、鏗鏘然として、京都の聲あり。その人を問へば、本と長安の倡女、かつて琵琶を穆曹兩善才に學ぶ、年長じ、色衰へ、身を委して賈人の婦となる。遂に酒を命じ、數曲を快弾せしむ。曲罷んで惘然、自ら少小時、歡樂の事を敘し、今漂淪憔悴、江湖の間に轉徙す。予出官二年、恬然自ら安んず。この人の言に感じ、この夕、はじめて遷謫の意あり。因つて、長句を爲り、

歌うて以て之に贈る、凡そ六百一十二言、命けて琵琶行といふとある。湓浦に琵琶を弾するといへば、即ち琵琶行のことで、この詩は、取りも直さず、琵琶行の畫に題したのである。

【詩意】秋夜、白樂天が商婦に逢ひし時、聞愁は宦情と雜はり、まことに、感愴に堪へず。やがて、四絃、風と共に極き鳴らせば、兩方の舟に月が同じく明かであつた。江州司馬は、涙の爲に青衫を溼し、孤舟の佳人は、白髮の生せしを嘆息したのであらう。今に至るも、湓浦の邊では、楓葉が哀れなる聲をなし、當日の恨は、依然として、なほ盡きない。

金人馬圖

金人馬の圖

名王愛游獵。初試射鵬弓。

名王、游獵を愛す、初めて試む、鵬を射るの弓。

白草秋原曠。黃沙晚塞空。

白草、秋原曠く、黃沙、晚塞空し。

琵琶應漢女。腰裏是胡驄。

琵琶は、當に漢女なるべし、腰裏は、是れ胡驄。

歸醉葡萄綠。穹廬在月中。

歸つて醉ふ葡萄の綠、穹廬、月中に在り。

【字解】【一】名王、匈奴の大臣輩を云ふ。【二】射鵬、鵬はくまだが。【三】腰裏、古の良馬の名。【四】穹廬、テント。

【題義】金人馬の金は國名、もと滿洲の北方から起り、遼を滅し、支那に侵入して南宋と對立して居た。この詩は、金時代の人馬の有様を畫いた圖に題したのである。

【詩意】金國の大臣輩は、游獵を好み、ここに、弓矢を攜へて、鵬を射落さうとして居るが、見わたすかぎり、白草茫茫として秋原曠く、その先は、黃沙漠漠として、邊塞日暮人なき有様、琵琶を弾じて居るのは、いづれ中國の婦人であらうし、古しへの腰裏にも比すべき駿馬は、胡馬であらう。やがて、歸つて來て、テントに入り、今夜、月の明かなるを眺めつつ、葡萄の酒の綠なるを滿引して居る。

夜訪芭蟾二釋子因宿西澗聽琴

夜、芭蟾二釋子を訪ひ、因つて西澗に宿して琴を聽く

清夜獨幽尋。巖扉落葉深。

清夜、ひとり幽尋、巖扉、落葉深し。

許攜陶令酒。來聽穎師琴。

陶令の酒を攜へて、穎師の琴を聽くを許す。

人醉月沈閣。烏啼風滿林。

人酔うて、月、閣に沈み、烏、啼いて、風、林に滿つ。

應留西澗水。千載寫餘音。

應に西澗の水を留めて、千載、餘音を寫すべし。

【字解】【一】陶令酒、陶潛、彭澤令となり、又酒を受して居た。【二】穎師琴、韓愈に聽穎師彈琴の詩があり、李賀に聽穎師

彈琴歌あるを見れば、いづれ、その頃の名手であつたらう。

【題義】 芭蟪二釋子は、芭上人・蟪上人といふ二人の坊さんで、集中に數ば見えて居る。この詩は、夜、二人の僧を訪ひ、因つて、西澗の草庵に宿し、その琴を彈するを聽いて作つたといふので、二人は同じ處に居り、又いづれか一人琴を善くしたものと思はれる。

【詩意】 清夜に乘じて、ひとり、二釋子の草庵を尋ねると、巖下の柴扉には、落葉が深く溜まつて居た。われは、陶淵明の如く、酒を攜へて來り、そして、穎師にも比すべき名人の琴を拜聽することを許された。その酔ひかかつた時には、月、闇に沈みて、夜愈よ遅く、そして、風、林に満ちて、鳥が驚いて騒ぎ立てた。その琴聲の妙なるに至りては、これを西澗の水に留めて、千載の後まで、その餘韻を傳へたいと思ふばかりである。

【餘論】 後聯十字は、聊か清警の趣を得て居る。

錢塘送馬使君之吳中 錢塘、馬使君の吳中に之くを送る

樟亭離席散 遙發畫轎車 樟亭、離席散じ、遙に發す畫轎の車
飛雉新阡麥 啼鶯故苑花 飛雉、新阡の麥、啼鶯、故苑の花

望山登郡閣 行水到田家 山を望みて、郡閣に登り、水を行つて、田家に到る。

莫道凝香句 前人獨可誇 道ふ莫れ、凝香の句、前人ひとり誇るべしと、

【字解】 (一) 樟亭 杭州府志に「樟亭は、錢塘縣舊治の南五里に在り。今の浙江縣は、その故址なり」とある。 (二) 畫轎車 轎は車の泥よけで、そこに畫をかいた車。謝承の後漢書に「鄒弘、淮陰太守に遷る。春を行つて大旱、車に墮つて雨を致す、白鹿、道に及び、轎を挟んで行く。弘、怪んで主簿黃國に問ふ、鹿は吉となすか、凶となすか、と。國、拜賀して曰く、聞く、三公の車轎には畫いて鹿を作ると、明府、必ず宰相と作らむ」とある。 (三) 新阡麥 新阡は、新に開いた田畝。 (四) 故苑 南宋の故宮を指したので、杭州府志に載する西湖十景の中に柳浪聞鶯がある。 (五) 凝香句 韋應物の郡齋燕集詩に、兵衛森三畫戟、燕巖凝清香とあつて、蘇州官蹟志に「韋、詩を嗜む、吳中目して詩仙となす。蓋し、その畫戟清香の辭、最も警策となす。府治の後に凝香堂あり、以て韋應物・王仲舒・白居易・劉禹錫・范仲淹、五賢の像を内に奉ず」とある。

【題義】 この詩は、錢塘に於て、馬太守が吳中に赴任するのを送つたので、多分、作者が吳越に遊ぶで居た間の作であらう。使君は、太守の尊稱で、前に數ば見えて居る。

【詩意】 樟亭に於ける餞別の宴、方に散せし時、君は、畫轎車に乗つて、はるかなる旅路に上られる。今しも、春の末、雉は新に開いた畑の麥の下に鳴き、鶯は、むかしの宮苑の花に啼いて居る。途すがら、山を望むが爲に、郡廳の高閣に上ることもあるべく、水に傍うて、田家に至ることもあらう。吳中は、むかし、韋應物が畫戟清香の名句を留め、その爲に、凝香堂の設けさへあるが、君の才、決して其下に在らず、前人をして、獨り之を誇らしめぬであらう。

與劉將軍杜文學晚登西城

劉將軍杜文學と晩に西城に登る

木落悲南國。城高見北辰。木落ちて南國を悲み、城高くして北辰を見る。

飄零猶有客。經濟豈無人。飄零、なほ客あり、經濟、豈に人なからむや。

鳥過風生翼。龍歸雨在鱗。鳥過ぎて風翼に生じ、龍歸つて雨鱗に在り。

相期俱努力。天地正烽塵。相期して俱に努力、天地正に烽塵。

【字解】(一)木落、木の葉の落ちること。(二)北辰、北斗。(三)烽塵、烽火と煙塵、戰亂甚しきを云ふ。

【題義】説明に及ばぬ。但し、西城は、蘇州府城の西門の樓であらう。劉杜二人は、名字閱歷、ともに不詳。

【詩意】落葉の節に當つて、南國の景色、物さびしく、城樓高くして、北斗が見え、その下は、即ち帝都の在るところである。われ等は、皆飄零の客であるが、胸中には、經濟の大策を貯へて居る。鳥が飛び過ぐると、羽翼に風を生じ、まことに得意の有様、龍は、折角天に上りかけたが、どうした事か、歸つて来て、鱗には雨を残して居るが、これでは如何にも仕方がなく、賢愚地を易へたといふ様な安排。ここに諸君と約し、烽火煙塵、天地に滿ちて、世は刈菰と亂れし折から、ともに努力して、天晴、偉業を建てたいものである。

【餘論】この詩は、一句として隙の撃つべきものなく、通篇、超脱高妙、まさしく、完璧の作である。起首を對句にした處も面白く、後聯は、謂はゆる賦にして比なるものである。

和周山人見寄寒夜客懷之作

周山人の寒夜客懷の作を寄せらるるに和す

亂世難爲客。流年易作翁。亂世、客と爲り難く、流年、翁と作り易し。

百憂尋歲暮。孤夢怯山空。百憂、歲暮を尋ね、孤夢山の空しきを怯る。

門掩雲峰裏。燈明雪竹中。門は掩ふ雲峰の裏、燈は明かに雪竹の中。

無因乘夜訪。相慰一尊同。夜に乗じて訪ひ、相慰めて、一尊を同じうするに因なし。

【題義】この詩は、周山人が寒夜客懷といふ詩を寄せたから、これに和して答へたのである。山人は、前にも見えたが、名字不詳。

【詩意】この亂世に當つて、異郷に客となつて居るのも、容易な事ではなく、流年の爲に、用捨なく老人になつて仕舞ふ。さまざまの心配は、歳の暮に際して、一齊に尋ね來り、獨り寢の夢は、山空しくして人なきを恐れる位。雲に聳ゆる羣峰の底に在つて、門を閉ぢ、雪を帯びた竹の中に、燈火ひと

り明かである。君の事を思はぬでもないが、夜に乗じて往いて訪ひ、相慰めて、一尊を同じうすることとは、どうも、序がなくて、一寸出来ない。

【餘論】雲峰、雪竹の十字は、清迥鮮明である。

哭臨川公

臨川公を哭す

身用已時危。衰殘況病欺。身用ひられて、すでに時危く、衰殘、況んや病に欺かる。

竟成黃犬歎。莫遂白鷗期。竟に黃犬の歎を成し、白鷗の期を遂ぐるなし。「るをや。」

東閣圖書散。西園草露垂。東閣、圖書散じ、西園、草露垂る。

無因奠江上。應負十年知。江上に奠するに因なく、應に十年の知に負くなるべし。

【字解】(一) 病欺、病に壓倒せられる。(二) 黃犬歎、史記李斯列傳に「斯、その中子と俱に執へらる、顧みて謂つて曰く、吾若と復た黃犬を牽いて、上蔡東門を出て、狹坂を逐はむと欲するも、豈に得べけむや」とある。(三) 白鷗期、隱避して江上に白鷗と共に居る。(四) 奠江上、奠は物を供へて祭をすること。

【題義】臨川公は饒介、この人は張士誠に屬して大官に居り、青邱等も、これに禮遇されたが、士誠の敗後、刑せられたから、これを哭する爲に作つたのである。

【詩意】公が任用されたのは、危急の時であつて、随分骨を折つて働いたが、老年に成つた上に、病に壓倒せられ、まことに、お氣の毒な始末。その上、刑に處せられ、むなしく、李斯の如く黃犬の歎をなし、功成り身退いて、白鷗を友とするといふ兼ねての希望を遂げることが出来なかつた。公の歿後、東閣に儲へてあつた圖書は、散り散りに成つて仕舞ひ、西園には、草の露が垂れて、物さびしき有様。ここに、江上に出かけて、心ばかりの御祭をすることさへ出来ず、十年の知遇に負くのは、まことに、残念なことである。

一窓秋影

一窓の秋影

修竹與疏桐。秋陰接桂叢。修竹と疏桐と、秋陰、桂叢に接す。

竝生金井側。同映綺疏中。竝に金井の側に生じて、同じく、綺疏の中に映す。

隱匿纔籠霧。交橫忽颭風。隱匿、わづかに霧を籠め、交橫、忽ち風に颭く。

不須懷故館。月落併成空。須ひず、故館を懷ふを、月落つれば併せて空と成る。

【字解】(一) 秋陰、秋の曇り。(二) 金井、前に數ば見ゆ、銅にて包みたる井欄。(三) 綺疏、きれいな窓。(四) 故館、舊宅に同じ。

【題義】 説明に及ばぬ。

【詩意】 丈高き竹と、葉の疏になつた桐とが、秋の曇りを帯びて、桂樹の叢を成せるに接近して居る。これ等は、すべて、金井の側に生じて居るので、又同じく、綺麗な窓に其影を映じて居る。その隠れて見えなくなつたのは、霧に籠められたからであつて、枝條の入り交はつて居るのは、風に動かされたからである。この一窓の秋影に對して、舊宅を思ひ出しさうになつたが、やがて、月が落ちると、すべての影は無くなつて仕舞つて、あとには何も残つて居らぬ。

早春、侍皇太子游東苑池上、呈青坊諸公

早春、皇太子の東苑池上に遊ぶに侍し、青坊の諸公に呈す

銅輦出紆徐、春宮晝講餘、
戟煩郎將衛、簡授大夫書、
草長園鳴鹿、氷開沼躍魚、
從游伴商皓、忝竊愧何如。

【字解】 (一) 銅輦、陸機の詩に「推劍還銅輦」とあつて、その注に「銅輦は、太子の車飾」とある。(二) 紆徐、緩々くり靜かな

ること。(三) 春宮、竹書紀年に「周の穆王、春宮に居る」とある。易で云ふと、太子は震の卦、東方に當り、春で、青色なるより云ふ。(四) 戟煩郎將衛、通典に「凡そ、郎官は、皆更直して戟を執り、諸殿門を宿衛するを主る、侍衛の故を以て、進じて、これを侍郎といふ」とある。郎將は、もと軍人で、侍郎たるより云ふ。(五) 簡授大夫書、謝靈運の雪賦に「歳、將に暮れむとし、時、すでに昏く、寒風愴んで、愁雲繁し。梁王悦ばず、魂園に遊ぶ。俄にして、微塵零ち、密雪下る。王、乃ち簡を司馬大夫に授けて曰く、寡人の爲に之を賦せよ」とある。簡は紙。(六) 商皓、商山の四皓。(七) 忝竊、忝くも恩遇を竊む。

【題義】 この詩は、春の初、皇太子に陪して、宮城中の東苑なる池上に遊び、賦して、東宮近侍の諸公に呈したので、無論、青邱が南京に居た頃の作である。青坊は、東宮の詰所。

【詩意】 太子の銅輦は、そろそろと出て行かれるが、そは春宮に於て、晝の講書が済んだ後であつた。郎將は、戟を執つて宿衛し、大夫は、紙を賜はつて、その作を寫すことになつて居る。頃しも春の初、草は長じて、園内に鹿が鳴き、氷は解けて、池中には魚が躍つて居る。予が太子に陪遊し、商山の四皓の如き師傅の人人と同伴するのは、忝くも恩遇を竊んだ譯で、顧みると、まことに、慙愧に堪へぬ次第である。

題谿山小隱

谿山小隱に題す

何處谿山隱、衡門對野橋、
何處の谿山の隱か、衡門、野橋に對す。

五言律詩 早春侍皇太子游東苑池上呈青坊諸公 題谿山小隱

晚風攜鶴子。春雨種魚苗。

晚風、鶴子を攜へ、春雨、魚苗を種う。

小徑斜通竹。疏籬曲護蕉。

小徑、斜に竹に通じ、疏籬、曲つて蕉を護す。

人生閒自足。不問楚辭招。

人生、閒、自ら足る、楚辭の招くを問はず。

【字解】【一】衛門、かや草の門。【二】鶴子、鶴の雛。【三】魚苗、魚の新に孵化せしもの、避暑錄話に「浙東の人、率れ陂塘を以て魚を養ひ、春、魚初めて生ずる時に乗じ、種を江外に取る。長さ寸に過ぎず、木桶を以て水中に置き、草を細切して食となし、置に食ますが如し、これを魚苗といふ」とある。【四】楚辭招、楚辭に招隱士の一篇あるより云ふ、杜甫の詩に要歸歸未得、不用楚辭招とある。

【題義】この詩は、谿山小隱の圖に題したのである。

【詩意】ここは、何の處の谿山か知らぬが、衛門は野橋に對して、現に隱棲の人が居る。晚風爽かなる折から、鶴の雛を攜へて逍遙し、春雨そぼふる時、魚の子の世話をして居る。小徑は、斜に竹間に通じ、疏籬は、曲つて芭蕉を保護して居る。かういふ處に居れば、人生、閒、自ら足るべく、招隱士の篇中に見ゆる如く、何も態態山中に招いて貰ふにも及ばない。

城西客舍送周著作砥

城西の客舍、周著作砥を送る

客中寒食後。惆悵送君違。

客中、寒食の後、惆悵、君を送つて違ふ。

花隱歸城旆。風吹渡水衣。

花は隱す、城に歸るの旆、風は吹く、水を渡るの衣。

夜窓炊黍散。春苑鬪茶稀。

夜窓、黍を炊いで散じ、春苑、茶を鬪はすこと稀なり。

誰念西齋雨。相思獨掩扉。

誰か念はむ、西齋の雨、相思、ひとり扉を掩ふを。

【字解】【一】寒食、冬至より一百五日、この日、火食を禁ずるのは、晉の介子推が焚死せし日たるを以て、後人、これを悲んで、さうするのだといふ傳説がある。鄭中記に「冷食三日、乾粥を作つて之を食ふ、中國、以て寒食となす」とある。【二】歸城旆、旆は旗。【三】鬪茶、茶録に「建安、茶を鬪はす、水先づ投するものを以て負となし、俛つこと久しきものを勝となす、故に勝負な較ぶるの説に曰く、相去る「水兩水」とあり、范仲淹の鬪茶歌に鬪茶味令輕醒開、鬪茶香令薄開正」とある。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】客中寒食に遇うて、たださへ淋しき折から、君を送る爲に、折角来たところが、間に合はなかつたのは、いかにも残念で、惆悵の思を禁ずることが出来ない。見れば、君を送りに来た連中は、すでに城中に引き返し、その押し立てて来た旗は、花に隠れ、そして、君は水を渡らむとして、風が其衣を飄して居る。おもへば、夜の窓下に、君と共に黍を炊いたこともあつたが、雅會すでに散じて、再びすべからず、これより、春苑の中に於て、茶を鬪はす様な風流な遊びをすることも稀であらう。今しも、西齋に雨瀟瀟たる折から、ひとり扉を閉ちて、相思に堪へざるは、まことに、豫期せぬ

ことである。

兵後出郭

兵後、郭を出づ

俯仰興亡異、青山落照中。
 民歸鄰樹在、兵去壘煙空。
 城角猶悲奏、江帆始遠通。
 昔年荆棘露、又滿闔閭宮。

俯仰、興亡異なり、青山落照の中。
 民歸つて鄰樹在り、兵去つて壘煙空し。
 城角、なほ悲しく奏し、江帆、はじめて遠く通ず。
 昔年荆棘の露、又滿つ闔閭宮。

【字解】「闔閭宮」闔閭は吳王の名、これは、姑蘇臺を指したのである。

【題義】この詩は、兵亂の後、城を出でて郊外を逍遙した時に作つたのである。

【詩意】地に俯し、天を仰げば、興亡事、自ら異にして、亂後の光景は、傷心慘目。一帶の青山は、夕陽の中に隠見して、さながら、愁を含んで居る様に見える。人民は、やつと歸つて來たが、鄰家の木だけ残つて居て、その他の家屋は、すべて焼かれて仕舞ひ、兵隊は、すつかり引き上げ、殘壘寂寥として、煙だに上らない。城上の角聲は、なほ悲しげに奏し、江上の估帆は、やつと、遠方に往復

するやうに成つた。蘇州は、從來幾度も戰亂を経た處で、むかし荆棘に露を置いたと同じ様に、荒涼たる景色を、又ぞ闔閭の宮址に見るのは、まことに感慨に堪へぬことである。

【餘論】破題の二句は、頗る面白く、且つ力あるを覺えるが、その他の之に副はざるは、まことに遺憾である。

謝賜衣

賜衣を謝す

臚呼遙捧賜、服拜望蓬萊。
 香帶爐煙下、光迎扇月開。
 奇紋天女織、新樣内工裁。
 被澤徒深厚、慙無奪錦才。

臚呼、遙に賜を捧げ、服拜して蓬萊を望む。
 香は爐煙を帯びて下り、光は扇月を迎へて開く。
 奇紋、天女織り、新樣、内工裁す。
 澤を被る、徒に深厚、慙づらくは、奪錦の才なきを。

【字解】「臚呼」宮中に於て、次から次へと傳呼すること、唐書儀衛志に「朝日、御史大夫、臚官を領し、殿の西廡に至り、從官朱衣傳呼し、百官を促して班に就かしむ」とある。「服拜」賜はつた其衣を着て拜を爲す。「蓬萊」唐宮の名、天子の正殿。「香帶」帶爐煙下、買至の詩に衣冠身惹御爐香とある。「扇月開」庾信の詩に歌聲上三扇月とある。扇は羽團扇で、天子の後より差し懸すもの。「内工」宮中に抱へてある仕立屋。周禮に「典絲は絲の入るを掌つて、その物を辨じ、絲を外内工に分つ」とあつて、その注に「外工は外織婦なり、内工は女御なり」とあるが、後世は、さうではなく、別に職人を履ひ入れてあつたものと見

える。【七】 香錦才 唐書宋之問傳に「武后、洛陽の龍門に遊び、從臣に詔して詩を賦せしむ。左史東方朔、詩先づ成る。后、錦袍を賜ふ。之問、しばらくして獻す。后、これを覽て歎賞し、更に袍を奪つて賜ふ」とあり、杜甫の詩に「詩成奪錦袍」とある。

【題義】 この詩は、天子より衣を賜はつたことを謝して作つたのである。

【詩意】 宮中に傳呼して遙に賜を捧げて來り、これを頂戴した後は、直に著下ろし、天子の正殿の方に向つて拜を爲した。その衣の餘香は、御爐の煙を帯びて、焚きしめたものであるし、その光は、羽團扇に上る月を迎へて、一しほ、きらびやかに見える。その珍らしい紋は、天女の織つたのであらうし、新式の仕立て方は、御抱への職人が裁つて縫つたのである。聖主の恩澤を被ること、かくの如く深厚でありながら、わが身、ただ謝劣にして、かの宋之問の如く、人の錦袍まで奪ふ様な天晴の美才なきは、まことに、慙愧に堪へぬ次第である。

西清對雨

西清、雨に對す

楚臺雲起遠、漢苑雨來微。
曉溼宮城旆、寒沾陛楯衣。
溝中隨葉墮、爐畔帶煙飛。

楚臺、雲起ること遠く、漢苑、雨來ること微なり。
曉に宮城の旆を溼し、寒く陛楯の衣を沾す。
溝中、葉に隨つて墮ち、爐畔、煙を帯びて飛ぶ。

坐詠西清暇、君王召對稀。

坐詠、西清の暇、君王、召對稀なり。

【字解】 一 楚臺 楚は大國の號に取り、兼て楚の襄王巫山雲雨の事實に聯帶して云ふのであらう。二 漢苑 漢は、歷代中最も盛な治世なるより云ふ。三 陛楯衣 説苑に「執素綉、堂楯を障風にし、風雨に從つて簾るるも、士、かつて以て衣に簾するを得ず」とある。楯は欄檻、即ち手すり、陛楯は殿階に接近して居る手すり、衣は、そこに懸けてある幕。

【題義】 上林賦に青龍蚺螺于東廂、象輿婉孌于西清とあつて、その注に「西清は、西廂中、清淨の處なり」とある。すると、西清は、宮中の控へ所で、西の溜まりとでも云つた様な處と見える。この詩は、その西清に於て、雨の降るのを眺めて作つたのである。

【詩意】 遠くの高臺の上に雲が起ると、苑中に微雨が瀟瀟として降つて來た。その雨は、曉早く、宮城の旗を溼し、寒げに殿階の手すりの幕をも濡らすばかり。落葉と共に宮濠の中に落ち、香煙を帯びて御爐の邊に飛んで來る。身は、西清の控へ所に居て、この景色を眺めながら坐詠し、極めて暇であつて、こんな時に、君王が召し出して質問でもして下さらばと思ふが、生憎、さういふ事の無いのは遺憾である。

夜宿太廟齋宮

夜、太廟の齋宮に宿す

鳥散廟堦空、清香肅闕宮。

鳥散して廟堦空しく、清香、闕宮肅たり。

太常齋禁密列祖享儀崇

太常齋禁密列祖享儀崇し。

井叩銅瓶月墀鳴玉珮風

井は叩く銅瓶の月、墀は鳴る玉珮の風。

聽鐘候車駕庭燎已燼燿

鐘を聽いて車駕を候す、庭燎、すでに燼燿。

【字解】(一) 廟垣 塙は牆に同じ、牆外の短垣をいふ、漢書昆錡傳に「内史府は太上廟垣中門の東に居る、出づるに便ならず、錡乃ち門を穿つて南に出で、廟垣を穿つ」とある。(二) 閤宮 閤は深く鎮す、おたまや、靈廟。詩經に閤宮有値、實實枚枚とある。

【三】太常 漢書百官公卿表に「太常は、秦の官、宗廟の禮儀を掌る。景帝の中六年、更めて太常と名づく」とある。【四】齋禁 物いみをするに就いての禁制、後漢書周澤傳に「かつて、病に齋宮に臥す。その妻、澤の老病を哀み、開うて苦むところを問ふ。澤大に怒り、妻が齋禁を干犯せしを以て、牧めて詔獄に送る。時人、これが語を爲して曰く、生世不諧、作太常妻、一歳三百六十日、三百五十九日齋」とある。【五】鐘鳴 鐘は數瓦。【六】庭燎 庭の篝火。【七】燼燿 光明の貌。

【題義】太廟は、帝室の御先祖を祀つた廟所。齋宮は、祭儀に列する職員の物忌をする部屋。作者も、ある時、太廟の祭祀に關係して、ここに宿せしに因つて作つたのである。

【詩意】樹上の棲鴉は、驚いて飛び起ち、廟垣のあたり、人もなく、物とはなしに、一種の清香が漾うて、おたまやの中は、森嚴の氣に満ちて居る。太常の役人は、物忌の禁制がやかましく、御先祖代祭享の儀式は、まことに尊げに見える。銅製の釣瓶を以て月下に井を汲み、玉珮は、數瓦に鳴り響いて、風を起すばかり。その内に、鐘が鳴つたから、主上著御の御待ち受けをする爲に、庭上に於

ては、篝火が燃え上つて、燼燿と輝いて居る。

送秦主客遷侍儀使

秦主客の侍儀使に遷るを送る

蕃客來曾識衣冠上國風

蕃客、來つて曾て識る、衣冠上國の風。

承恩趨北闕罷直出南宮

恩を承けて北闕に趨り、直を罷めて南宮を出づ。

導駕爐煙裏催班漏點中

駕を導く爐煙の裏、班を催す漏點の中。

時清多奏頌還向閣門通

時清くして多く頌を奏す、還た閣門に向つて通す。

【字解】(一) 蕃客 外國の使者。(二) 北闕 宮城を云ふ。(三) 南宮 宮城の南に在つて諸官署の在るところ。(四) 儀班 拜謁の行列を促して案内する。(五) 漏點 漏聲に同じ、漏は水時計。(六) 閣門 正殿の側の小門。

【題義】唐書百官志に「主客郎中、員外、各一人、諸蕃朝見の事を掌る」とあり、鄭谷の寄三同年禮部趙郎中の詩に小儀澄澹轉中儀とあつて、金檀の按に「唐人、禮部郎中を謂うて中儀となし、員外郎を小儀となし、亦た少儀といふ」とある。この詩は、秦某が外務省の役員から、式部官に轉任した

のを送つたのである。

【詩意】外國の使者は、かつて來朝した時、君が衣冠堂堂、都の手ぶりをして居たのを見分けた位。

頃ろ、聖恩を承けて宮中直參となり、最早、南宮に宿直することは無い様に成つた。今後は、爐煙の中に御の案内をなし、水時計の音につれて、朝參の班列を促き立てるのが本職である。今しも、目出たき大御世で、頌を上るものも多し處から、時時、正殿の傍門から直に參殿することもあつて、何につけても、結構な身分である。

春日退直呈禁署諸公

春日退直、禁署の諸公に呈す

待詔直東華。歸休每日斜。

詔を待つて東華に直し、歸休、毎に日斜なり。

職連詞客苑。俸入酒胡家。

職は詞客の苑に連り、俸は酒胡の家に入る。

簷網長縈絮。庭磚欲過花。

簷網、長く絮を縈り、庭磚、花を過ぎむと欲す。

知君未出院。應草侍中麻。

知る、君が未だ院を出でざるを、應に草すべし侍中の麻。

【字解】【一】待詔 まだ本官に任せずして候補となつて居ること。【二】東華 門の名。【三】詞客苑 翰林を云ふ。【四】酒胡家 辛延年の詩に、笑調酒家胡とあつて、胡姬の居る酒樓。【五】庭磚 磚は敷瓦。【六】過花 花影が過ぎて行く。【七】未出院 院は御殿。【八】侍中麻 麻は詔敷、侍中が之を起草するのである。

【題義】春日、詰所より退出し、仍つて、宮中奉仕の諸君に呈したのである。

【詩意】予は、待詔として、東華門に近き控所に出仕し、その退出するのは、毎毎日の斜なる頃である。わが職は、翰林に接近して居て、俸給は、胡姬の居る酒家に入れて仕舞ふ位。櫛の蜘蛛の網には、柳の花が引ツかかり、庭の敷瓦の上には、花影が移つて行き、春の夕ぐれは、風情があつて、游賞に適して居る。それなのに、君がまだ御殿から退出せぬのは、侍中として詔敷を起草して居る爲でもあらうか。

送張司勳赴寶慶同知

張司勳の寶慶同知に赴くを送る

乍出司勳幕。還乘別駕車。

乍ち司勳の幕を出で、還た乗す別駕の車。

按圖猶漢地。輸布盡蠻家。

圖を按ずれば、猶ほ漢地、布を輸するは、盡く蠻家。

山熱蛇懸樹。江晴鶴浴沙。

山は熱して、蛇、樹に懸り、江は晴れて、鶴、沙に浴す。

郡樓回首處。北斗近京華。

郡樓、首を回らす處、北斗、京華に近し。

【字解】【一】司勳 題義の條に注して置く。【二】別駕 刺史の次役、州を巡察する時に隨行する。唐六典に「後漢、州に別駕を置く、歴代皆之あり」とあつて、同知は、恰も之に相當するものである。【三】輸布 元史泰定帝紀に「致和元年、雲南安陸塞土官岑世宗、その兄と相攻む、その民三萬二千戸を籍して來附し、歲ごとに布三千匹を輸す」とあつて、南方からは、主として布を上納

したものと見える。【註】蛇懸樹 柳宗元の詩に陰森野葛交蔽日、懸蛇結樹如三浦樹とある。

【題義】司勳は、周禮に「夏官司勳、六卿賞地の法を掌り、以て其功を等す、その功あるものは、銘して王の太常に書し、大蒸に祭り、司勳、これに詔す」とあつて、今でいふと賞勳局總裁。寶慶は府名、一統志に「湖南に屬す」とある。同知は、太守の次役、この詩は、張某が司勳より寶慶の同知に轉任するのを送つたのである。

【詩意】君は、今、司勳の幕より出で、別駕の車に乗つて、遠く湖南に赴任される。地圖を按ずれば、そこも、矢張、帝國の版圖であるが、布を上納するのは蠻族のみである。山は熱氣を含みて、蛇が木に懸り、晴れた日には、鶴が江邊の沙に浴して居る。その風土民情、中原とは餘程異なつて見える。郡樓に登つて首を回らして望めば、北斗のあたりが即ち帝都で、相去ること萬里、まことに、御苦勞ではあるが、精精、その職を盡して貰ひたい。

【餘論】山熱、江晴の十字は、南荒毒熱の境を寫し出して、まことに奇尙の極である。

寓天界寺

天界寺に寓す

雨過帝城頭、香凝佛界幽。

雨は過ぐ帝城の頭、香は凝つて佛界幽なり。

果園春孔雀、花殿午鳴鳩。

果園、春、雀を乳し、花殿、午、鳩を鳴かしむ。

萬履隨鐘集、千燈入鏡流。

萬履、鐘に隨つて集まり、千燈、鏡に入つて流る。

禪居容旅跡、不覺久淹留。

禪居、旅跡を容る、覺えず久しく淹留。

【字解】【一】乳雀 雀が其雛を養ふ。【二】千燈 法苑珠林に「明月寶珠、及び摩尼珠等、用つて塔燈と爲す」とある。

【題義】前に略傳中に述べた通り、青邱は、元史編纂の爲め、召されて南京に入り、史局が天界寺に開かれた爲に、同僚と共に、寺中に假寓することに成つたので、これは即ち其時の作である。

【詩意】雨は宮城の邊を過ぎて、一天塵を洗ひ、ここ天界寺中には、妙香自ら凝つて、佛界は殊に靜幽である。果園に於ては、春、雀が雛に哺み、花殿の近くでは、亭午の頃、鳩が鳴いて居る。鐘が一たび響くと、參詣の道俗、一齊に押し寄せて、萬履、ここに集まり、本尊の前に燈明を幾つも點すと、鏡に映つて、さながら流れる様に見える。もとより禪を學ぶものの居る處であるが、羈旅の客跡を容るるを許された故に、ここに淹留して、大分久しく成つた。

送前進士夏尙之歸宜春

前進士夏尙之の宜春に歸るを送る

淒涼庾開府、老去復如何。

淒涼たり庾開府、老去、復た如何。

五言律詩 寓天界寺 送前進士夏尙之歸宜春

故國歸鴻少、新朝振鷺多。故國、歸鴻少く、新朝、振鷺多し。
 菊荒應自歎、麥秀竟誰歌。菊荒れて、應に自ら歎すべく、麥秀でて、竟に誰か歌ふ。
 相送堪愁思、蕭蕭楚水波。相送つて愁思に堪ふ、蕭蕭たり楚水の波。

【字解】【一】庚辰府、周書庚信傳に「信、字は子山、南陽新野の人、梁に仕へて、爵、武康縣侯を襲ぐ。梁亡びて魏に仕へ、弘農守となり、驍騎大將軍開府儀同三司に遷り、爵、魏城縣侯に進む。真江南賦を作る」とある。【二】振鷺、詩經に振鷺于飛、子之彼西雝とあつて、注に「二王の後、來つて祭を助くるの詩たり」とある。ここでは官職ある人の行列を爲すを云ふ。【三】菊荒、陶潜の歸去來辭に三徑就荒、松菊猶存とあるを引用す。【四】麥秀、尚書大傳に「穀子、周に朝せむとし、殷の故墟を過ぎて、麥秀の歌を作るとある。【五】楚水、揚子江を云ふ。

【題義】前進士は、前朝、即ち元の進士、夏尙之は、名字閱歷ともに不詳であるが、詩で見ると、心を前朝に存し、新に明の興つたことを喜ばぬものらしい。宜春は縣名、江西袁州府に屬して居る。この詩は、前朝進士夏尙之の宜春に歸郷するを送つたのである。

【詩意】君の境涯の淒涼なることは、古しへの庚信の如く、年を取つては、如何であるか。今、故國には、歸る雁だに少く、新朝には、就職者が澤山ある。三徑の菊さへ荒れたるに至つては、自ら歎息を禁せざるべく、前朝宮闕の址に麥の秀でて漸漸たるを見れば、歌ふことさへ懶いであらう。ここに、君の歸國を送れば、愁思自ら生じ、大江の波蕭蕭として、愈よ物さびしげに見える。

【餘論】後聯は、有りふれた典故を翻用した處が面白いので、熟事生用とは、即ち此事である。

早出鍾山門未開、立候久之

早く鍾山門を出でむとして未だ開かず、立候、これに久しうす
 關吏收魚鑰、趨朝阻向晨。關吏、魚鑰を收め、朝に趨らむとし、阻てられて晨に向ふ。
 忘鳴雞睡熟、倦立馬嘶頻。鳴くを忘れて、雞、睡熟し、倦立、馬嘶くこと頻りなり。
 柝靜霜飛蝶、鐘來月墮津。柝は靜にして、霜、蝶に飛び、鐘來つて、月、津に墮つ。
 可憐同候者、多是未聞人。憐むべし、同候の者、多くは是れ未だ聞ならざるの人。

【字解】【一】關吏、門番。【二】魚鑰、門の錠、芝田錄に「門鑰、必ず魚を以てす、その目を眼せずして、夜を守るの義に取る」とある。【三】趨朝、參朝する。【四】阻、妨害される。【五】柝靜、柝は拍子木。【六】飛蝶、蝶は城垣。【七】墮津、津は舟つきの處。【八】同候者、一處に同門を待つて居る人。

【題義】この詩は、朝早く、鍾山門から出やうとした處が、門が明かぬ爲に、止むを得ず、しばらく立つて待つて居たといふことを作つたのである。

【詩意】門番は、錠を卸した儘で、明けて呉れぬから、參朝せむとした處を妨げられて、次第に、時

が移つて、朝まだきとなつて仕舞つた。これは、雞が朝鳴くことを忘れて、睡、なほ熟して居るからであらうが、ちつと立つて、飽きる程まで待つて居ると、馬が頻りに嘶いた、拍子木の響は静にして、霜は城垣の上に飛び、鐘が鳴ると、残月は、舟つきの埠頭に落ちた。ここに、氣の毒なのは、われと一處に城門の開くのを待つて居るもので、多くは是れ忙がしい人達と見えた。

雪夜宿翰林院呈危宋二院長

雪夜、翰林院に宿し、危宋二院長に呈す

偶伴王摩詰。寒宵宿禁林。
院鈴風外靜。宮漏雪中沈。
絳蠟銷吟燭。青綾擁賜衾。
明朝陪賀瑞。銀闕曉光深。

【字解】【一】王摩詰 王維、字は摩詰、同三崔員外、秋宵寓直の詩がある。【二】禁林 翰林院を云ふ。【三】院鈴 或幕間話に「翰林院に懸鈴あり、以て中夜の警急に備ふ。文書の出入には、索を引いて、以て傳呼に代ふ」とあり、韓偓の詩に、坐久忽聞鈴索動、玉堂西畔響丁東とある。【四】絳蠟 赤色の蠟燭。【五】青綾 青色の綾ぎわで造つた衾被。翰林院に備へ付けてあつて、宿直する者の使用に供する。【六】賀瑞 謝惠連の雪賦に盈尺則呈瑞于翌年とある。【七】銀闕 雪の爲に銀色に見える宮闕。

【題義】この詩は、雪夜、翰林院に當直し、危宋二人の院長に呈したので、危は危素、宋は宋濂であらう。

【詩意】偶ま、古しへの王維に比すべき二院長に伴うて、寒夜、翰林院に當直した。例の懸鈴は、引き動かすことなくして、風外に靜かであるし、漏刻の音は、雪中に沈んで聞こえる。やがて、赤色の蠟燭も、燃え切つて、夜も大分更けたから、青綾の衾をかついで、眠りに就くことにした。明朝、二君に陪して、豊年の瑞を賀する爲に參朝すると、宮闕、銀色をなし、曉光が一しほ深く見えるであらう。

【餘論】前聯十字は、巧警にして、中晩の遺と稱すべきものである。

自天界寺移寓鍾山里

天界寺より寓を鍾山里に移す

移寓鍾山里。開軒見翠微。
寺僧違乍遠。鄰父識猶稀。
愛讀明開牖。防偷固設扉。

五言律詩 雪夜宿翰林院呈危宋二院長 自天界寺移寓鍾山里

誰言新舍好。畢竟未如歸。誰か言ふ新舍好しと、畢竟、未だ歸るに如かず。

【字解】(一) 鍾山里 鍾山の麓に在る。(二) 翠微 山色を云ふ、爾雅に「山、未だ上るに及ばず、翠微といふ」とあつて、その

疏に「山、未だ頂上に及ばず、旁に在り、山氣青藍色、故に翠微といふなり」とあり、又愷夏漫筆に雅俗稱言を引いて「凡そ、山、遠く之を望めば翠、これに近づけば翠漸く微」とあり、岳飛の詩に「經年塵土滿三征衣、得得尋芳上翠微」とある。又轉じて山の中腹をいふこともある。(三) 遠乍違 違は、違へなくなることを。(四) 獸猶稱 類を見覺えたものは、まだ少い。(五) 防偷 竊盜を防ぐ。晉書王獻之傳に「夜、書中に臥す、偷人あり、その室に入り、物を盗んで、すべて盡く。獻之、徐に曰く、偷兒、青匪は我が家の舊物、特に是を置くべしと、羣偷皆走る」とある。(六) 新舍 新宅に同じ。

【題義】この詩は、青邱が天界寺の假寓から鍾山の里に移つた時に作つたのである。

【詩意】今回、寓を鍾山里に移したが、軒窓を開けば、山色が見えるので、まことに住み心地が善い。天界寺の坊さん達には、逢ふことも出来ず、これから、疏遠になるであらうし、鄰家の主人などは、面知りになつたものは、まだ稀である。書物を讀むことが好きだから、あかるく窓を開き、竊盜を防ぐ爲に、嚴重に扉を設けた。人は、この新宅が善いといふかも知れぬが、結局は、故郷に歸つた方が、どれ程善いか分からねぬ。

夜逢故郡賀冬至使胡浦二博士同宿

夜、故郡の賀冬至使胡浦二博士に逢ひて、同宿す

會宿本無期。忻逢兩舊知。會宿、本と期なし、逢ふを忻ぶ兩舊知。

問年驚別久。候曉畏朝遲。年を問うて、別の久しきに驚き、曉を候して、朝の遲

寒澁高城漏。陽廻上苑枝。寒は澁る高城の漏、陽は廻る上苑の枝。

明朝使事畢。歸騎又天涯。明朝、使事畢らば、歸騎又天涯。

【字解】(一) 會宿 一處に宿する。(二) 朝遲 參朝が遅くなる。(三) 陽廻 陽氣が歸つて来る、冬至は一陽來復の節なるが故に云ふ。(四) 上苑 宮中の御苑。

【題義】故郡は即ち吳郡、蘇州を云ふ。この詩は、故郷の蘇州から、胡浦二博士が賀冬至使として上京するに逢ひ、これと同宿した時に作つたのである。

【詩意】一處に會宿するのは、思ひがけぬことで、ここに舊知たる二博士に逢つたのは、まことに嬉しい。もう何年になるかを問うて、別の久しきに驚き、夜の明けるのを待つて居るのは、參朝の遅くなることを心配して居るからである。高城の漏聲は、寒氣の爲に澁つて居るが、上苑の樹木には、一陽來復の景色が、ありありと見えるであらう。かくて、明朝、使の役目が済むと、歸騎再び天涯に向ひ、遺憾ながら御別となるのである。

至日夜坐客館

至日、夜、客館に坐す

久客漸忘家。今宵忽感嗟。
 旅蹤猶泊梗。陽氣又吹葭。
 巷屋門封雪。鄉關路遠沙。
 閨中想逢節。也解憶京華。

【字解】(一)久客 久しく異郷に居る客。(二)泊梗 梗は小枝、水上に浮んで、一寸何かに引ッかかつて居る。(三)吹葭 後漢書の律曆志に「候氣の法、室を爲る三重、戸閉ちて、檢量必ず周密、布、室中に綆綆し、木を以て案と爲し、每律各一、内庫外高、その方位に従ひ、律を其上に加へ、葭の灰を以て其内端を仰へ、律を案じて之を候し、氣至るものは灰散す」とあり、杜甫の詩に刺繡五紋添三弱線、吹葭六暗動三飛灰とある。(四)巷屋 路次の中に在る家。(五)逢節 冬至に遇ふ。

【題義】この詩は、冬至の夜、客館に居て作つたので、前詩を作つた其翌日の事と見える。

【詩意】身は久客となつて、次第に家を忘れむとして居たが、今夜、忽然として感嘆嗟を禁せられなかつた。わが客蹤は、丁度、小枝が水に浮んで、何かに引ッかかつた様であるし、今日しも、冬至で、陽氣は管中の葭灰を吹き飛ばした。路次の奥なる我が家は、門まで雪に封せられ、故郷に通ずる路は、江邊の沙を遶つて行くのである。閨中なる我が妻も、矢張、この佳節に逢ひ、自然、わが居る

都の方を憶つて居るであらう。

送鮑翰林遷官陝右

鮑翰林の官を陝右に遷さるるを送る

鑾坡初罷直。西去惜離羣。
 載筆唐供奉。褰帷漢使君。
 濁流河驛雨。高樹嶽祠雲。
 公暇應懷古。登臨賦夕曛。

【字解】(一)鑾坡 翰林を云ふ。(二)唐供奉 李白が玄宗の朝、翰林供奉たりしを云ふ。(三)褰帷漢使君 使君は太守の尊稱、後漢書賈琮傳に「琮、冀州となる、傳車、赤帷裳を垂る。琮曰く、刺史は、當に遠く視、廣く聽き、美惡を糾察すべし、何ぞ帷裳を垂れて、以て自ら掩はむや」と。命じて、これを褰げしむ」とある。(四)河驛 河は黄河、河上の亭驛。(五)嶽祠 華山の祠廟。(六)登臨 高い處に登つて眺め下すこと。(七)夕曛 夕日に同じ。

【題義】姓譜に「鮑類、字は尙綱、歙の人。洪武の初、薦められて元史を修し、翰林修撰に陞り、出でて耀州同知となる」とあつて、青邱と同一出身の人。この詩は、その人が、今次陝西の耀州に赴任するを送つたのである。

【詩意】君は、今回、翰林に出仕することを罷めて、陝西に赴任せられるとのことで、ひとり、羣を離れて遠行されるのは、まことに名残惜しい。君の作詩の才藻は、筆を載せた唐の李白に比すべく、君の治民の本領は、帷を褰げた漢の賈琮の様である。赴任の路すがら、黄河の邊なる驛亭に雨が降ると、濁流滔滔として下り、華山の麓なる祠廟に雲立ち籠むれば、高樹濛濛として見え、流石に、壯絶の景色であらう。公事暇ある折ふしは、高きに登つて、懐古の思に耽り、夕陽の中に詩を作り、天晴の名作を出されることであらう。

【餘論】後聯十字は、豪壯なる陝西の景物の一斑を繪き出して、簡切勁直である。

送姚架閣

姚架閣を送る

芳晨悵別筵。新柳驛亭前。
客散春城酒。人登暮雨船。
江樓先見日。郡界遠臨邊。
到後安民俗。應知從事賢。

芳晨、別筵悵たり、新柳驛亭の前。
客は散す春城の酒、人は登る暮雨の船。
江樓、先づ日を見、郡界、遠く邊に臨む。
到る後、民俗を安んず、應に知るべし従事の賢。

【字解】「一」芳晨、春の日。晨といつても必ずしも朝には限らない。「二」從事賢、隋書百官志に「從事は從九品たり」とあり、

世説に「習鑿遺、史才常ならず、宜武、これを器とす。未だ三十ならず、便ち荊州治中となる。鑿遺の謝箋に云ふ、明公に遇はざれば、荊州の老從事のみ」とある。

【題義】架閣は、前にも見えたが、地方の小官である。この詩は、架閣に任せられた姚某の遠地に赴任するを送つたのであるが、その地は、何處か分らない。

【詩意】新柳の煙れる驛亭の前に於て、春日、別筵が催され、春城の酒に酔つた客が散じ去る頃、君は、暮雨瀟瀟の中、舟に乗つて發程される。君の任地は、山川險絶、江樓に上れば、早く日の出が見え、郡界は、遠く邊地に臨んで居る。君の手腕を以て、著任後、功績を擧げて民俗を安んじたならば、従事中の賢者として知られ、やがて、榮遷の慶があるだらう。

【餘論】前聯十字は、含蓄に富み、餘情の盡きざるを覺える。

送曾主簿之平樂

曾主簿の平樂に之くを送る

路出桂江東。鄉音想未通。
蛇飛山苦霧。鵬運海多風。
木魅長欺客。花蠻少學農。

路は出づ桂江の東、鄉音、想ふに未だ通せず。
蛇は飛んで、山、霧に苦み、鵬は運して海に風多し。
木魅、長く客を欺き、花蠻、農を學ぶこと少し。

縣廳何處在。椰葉晚陰中。

縣廳、何の處にか在る、椰葉晚陰の中。

【字解】【一】桂江。一統志に「梧州府城西に在り」と見ゆ。【二】鵬。地方の訛り。【三】鵬運。莊子に「この鳥や、海運すれば、將に南溟に徙らむとす」とあつて、字面は、ここから出て居るが、鵬が其身を運んで飛び去るといふ意。【四】木魅。寰宇記に「平樂府城東嶺山上に九峰あり、險、跡るべからず、かつて木客あり、形、小兒に似、行坐衣服、人に異ならず、時に市に出て、作器を易ふ、人、亦た別つなし」とあり、鮑照の燕城賦に木魅山鬼、野鼠城狐、風鳴雨噴、昏見晨趨とある。【五】花髮。夷徵記に「古しへ、八蠻と稱す、その文面、尤も異なるもの、飛頭・鑿齒・鼻飲・花面・赤棍の屬あり」と見えて居る、すると、花髮は、顔に花の入れ鬘をして居る蠻族と見える。

【題義】主簿は縣令の下役、平樂は廣西平樂府平樂縣。この詩は、主簿曾某の廣西に赴任するを送つたのである。

【詩意】行き行きて、一路、桂江の東に出づると、即ち平樂で、君の任地であるが、もとより、遠隔の蠻境であるから、地方の訛りは、なかなか分かるまい。蛇は飛んで、山には霧深く、鵬は起たむとして、海には風が多い。木精は人に化して、常に旅客を騙かし、顔に花形の入れ鬘をした蠻族は、農耕を爲すこと少く、見るところの山川民俗、もとより、中國とは違つて、なかなか恐ろしげである。そして、縣の役所は何處かといへば、椰子の葉繁くして、日暮、陰を成せる其中に在る。

桓簡公廟

桓簡公の廟

荒林慘淡中。石馬欲嘶風。

荒林慘淡の中、石馬、風に嘶かむと欲す。

功在山留碣。威存廟挂弓。

功在り、山に碣を留め、威存して、廟に弓を挂く。

飢鴉迎祭客。走鼠駭巫童。

飢鴉、祭客を迎へ、走鼠、巫童を駭かす。

千載宣城道。人憐内史忠。

千載宣城の道、人は憐む内史の忠。

【字解】【一】石馬。廟の前に据ゑてある石造の馬。【二】祭客。參詣して祭をなす人。【三】巫童。年わかき巫女。【四】内史。即ち桓簡。

【題義】晉書に「桓簡、字は茂卿、譙國の人、宣城の内史たり。蘇峻の涇縣を攻むるや、葬、力守年を経、城陥つて死す。賊平らぐ、廷尉を追贈し、諡して簡といひ、咸安中、改めて太常を贈る」とあり、一統志に「靈惠廟は、涇縣の西に在り、晉の宣城内史桓簡を祀る、又桓簡の墓は府城の北に在り」と見ゆ。この詩は、即ち桓簡の廟に詣でて作つたのである。

【詩意】慘澹として荒れたる林の中に、一字の廟があつて、廟前の石馬は、風に嘶かむとして居る。ここは、即ち桓簡を祀つた處で、その功績は、長しへに世に在つて、山上には碑碣を留め、威靈なほ存して、廟中には、形見の弓が掛けてある。飢鴉は、供へ物を持つて來る祭客を迎へて、かしましく叫び、鼠が走り出て、年わかき巫女を驚かすことがある。千載後の今日、宣城への道を行くものは、

當日、その地の内史たりし桓彝の忠烈を憐まぬものは無い。

【餘論】前聯は莊重典雅、よく桓簡公その人を盡して、阿堵傳神の妙がある。

送陳則

陳則を送る

挾策去誰親、侯門不禮賓。策を挾んで、去つて誰にか親む、侯門、賓を禮せず。

愁邊長夜雨、夢裏少年春。愁邊長夜の雨、夢裏少年の春。

樹引離鄉路、花驕失意人。樹は引く離郷の路、花は驕る失意の人。

一杯歌短調、相送欲沾巾。一杯、短調を歌ふ、相送つて巾を沾さむと欲す。

【字解】【一】挾策 策は馬鞭。【二】夢裏少年春 白居易の詩に、還有少年春氣味、時時暫到夢中一來とある。【三】短調 短章に同じ。

【題義】陳則、字は文彦、北郭に居て、青邱の熟友であつた。その詳は、前に卷三、春日懷二十友の詩に見えて居る。

【詩意】君は、鞭を挾んで、はるばる上京したが、誰が特に相親んで呉れたか、刻下諸侯の門では、決して賓客を禮遇せぬから仕方がない。愁邊には、長夜の雨降り注ぎ、夢中には、少年の春を追思し、

愈よ情に堪へられない。故郷を離れる路は、竝木に引かれて、明かに見えて居るし、花は、今が眞盛りで、さながら失意の人に驕つて居る様である。ここに、一杯の酒を酌み、短章を歌うて、君の歸郷を送れば、感慨極まらず、涙下つて、衣巾を濡すばかりである。

【餘論】愁邊の十字は、平易流麗の中に感懐を含んで、まさしく白傳の調である。

暮春送陳郎中出守構李

暮春、陳郎中の出でて構李に守たるを送る

出幕方爲郡、行車動畫輪。幕を出でて、方に郡となり、行車、畫輪を動かす。

圖書歸省吏、風俗問州人。圖書、省吏に歸し、風俗、州人に問ふ。

塘水龍鱗細、城槐兔目新。塘水、龍鱗細、城、槐、兔目新なり。

莫言花已盡、君到自陽春。言ふ莫れ、花すでに盡くと、君到らば自ら陽春。

【字解】【一】爲郡 郡の太守となる。【二】省吏 郡の屬吏。【三】兔目 博物志に「槐葉生じ、五日なるを兔目といひ、十日なるを鼠耳といふ」とある。【四】陽春 開元遺事に「人、宋琰を謂うて有脚陽春と爲す、至るところの處、陽春の物を照むるが如きを言ふなり」とある。

【題義】説明に及ばぬ。

五言律詩 送陳則 暮春送陳郎中出守構李

【詩意】君は、禮部の幕中より出でて、今次、樞李の太守となり、畫輪を動かし、行車を進めて赴任される。文書類は、屬吏輩に任かせて置き、主として、州人に向つて風俗を問ひ、それで施政の方針を定めて行かれる。陂塘に包まれる水は、漣波起つて龍鱗の如く細かであるし、城中の槐樹は、初めて芽を出して、兎の目の様である。春、方に暮れて、花すでに盡くるとき、君の徳は、陽春が物を暖める様であつて、無論、人民も心服するに相違ない。

送楊從事從軍

楊從事の從軍を送る

南風薰燕麥。送子悵如何。

南風、燕麥に薰し、子を送る、悵として如何。

迢遞戎車役。淒涼橫笛歌。

迢遞たり戎車の役、淒涼たり横笛の歌。

天籠平野迴。山繞古關多。

天は平野を籠めて迴かに、山は古關を繞つて多し。

莫笑書生怯。能當曳落河。

笑ふ莫れ、書生の怯、能く當る曳落河。

【字解】【一】燕麥 からすま。【二】迢遞 路の遠きを云ふ。【三】戎車 兵車に同じ。【四】曳落河 前に卷十、寄陶生の詩中に見ゆ、夷語にて健兒の義。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】南風が燕麥を吹いて薰る四五月の交、ここに、君の遠征を送れば、悵然たる思に堪へられぬ。兵車に乗つて子役する其路は、いとも遙かに、折から、横笛に和して聞こえる歌は、極めて淒涼である。君の行く手には、天が平野を籠めて迴かに、山は古關を繞つて亂立して居る。書生を嘲つて臆病といふのは、間違つた話で、その氣力は、まさしく、胡中の健兒に抗敵することが出来る。

【餘論】天籠の十字は氣象壯豁、かういふ敘景の語は、蓋し作者の得意とするところである。

送王員外遷崇教

王員外の崇教に遷るを送る

能書晉公子。清宦稱高情。

能書、晉の公子、清宦、高情に稱ふ。

海樹朝帆遠。江風夏服輕。

海樹、朝帆遠く、江風、夏服輕し。

官從三省去。僧出萬山迎。

官は三省より去り、僧は萬山を出でて迎ふ。

誰說簪纓累。名林得按行。

誰か説く簪纓の累、名林、按行を得たり。

【字解】【一】晉公子 晉朝の貴公子、王獻之を指す。晉書の本傳に「幼時、書を學ぶ、その父羲之、後より其筆を襲するも得ず、歎じて曰く、この兒、後、當に復た大名あるべし」とある。【二】海樹 海邊の樹木。【三】三省 中書・黃門・尚書を合稱す。【四】簪纓 仕官の係累。【五】名林 著名なる叢林、即ち寺。【六】按行 調べて歩く。

【題義】題下の原注に「崇教は典僧の官」とあつて、宗教局の吏員。この詩は、王員外の崇教に轉任したのを送つたのである。

【詩意】君の能書は、王獻之に比すべく、今次、崇教てふ清官に就かれたのは、高尚なる情思に協つて、定めて本懐の至であらう。すでに就任した上は、處處の寺觀を調べて歩くので、その途中、海邊の樹色蒼蒼として、朝に帆影遠く、江上の風意冷冷として、夏も衣服の輕きを覺える。君は三省の命を受けて出張され、到る處、坊さん達が山奥から出て來て歡迎する。かくの如く、名だたる叢林を調べ歩くのは、まことに、結構なことで、決して仕官上の係累を説くに及ばず、役人といふもの、一種特別の職掌である。

吳中、送顧生歸海陵

吳中、顧生の海陵に歸るを送る

涼風初變柳、歸興片帆孤。
涼風、はじめて柳を變じ、歸興、片帆孤なり。
家向三秋到、田經幾歲燕。
家は三秋に向つて到り、田は幾歲を經て燕す。
舊音猶帶楚、新夢未離吳。
舊音、猶ほ楚を帶び、新夢、未だ吳を離れず。
明日江南北、相思有雁無。
明日、江の南北、相思、雁ありや無や。

【字解】【一】三秋、秋は三月に互るが故に云ふ、唯だ秋といふに同じ。【二】帶楚、楚地の訛りを帯びて居る。【三】未離吳、吳は蘇州を指す。【四】有雁無、雁ありや否やと問すべし。

【題義】吳中は蘇州。海陵は一統志に「揚州泰興縣、隋の海陵の地」とある。顧生は、名字不詳。

【詩意】涼風吹き至つて、柳の葉の色を變せむとする頃、君は歸興勃然、孤帆を掛けて出發される。そこで、秋、家に到着されるが、田園は、幾年をか經て、大分荒れて居るであらう。君の言葉は、楚地の訛りを存して、少しも他國化せず、しかし、歸後の新夢は、この蘇州を離れぬであらう。明日、江の南北を隔つとき、相思の情を空飛ぶ雁に寄せて、書を贈られるか如何か、予は、首を延ばして待つて居る。

園中

園中

席暖林中憩、衣涼水上歸。
席暖かにして林中に憩ひ、衣涼しくして水上に歸る。
腐瓜蟲食遍、空樹鶴巢稀。
腐瓜、蟲食うて遍ねく、空樹、鶴巢ふこと稀なり。
邂逅幽尋得、參差薄願違。
邂逅、幽尋を得たり、參差、薄願違ふ。
喜無來往者、秋草沒園扉。
喜ぶ來往の者なきを、秋草、園扉を沒す。

【字解】(一) 邂逅、偶然の意。(二) 差差、豫期と反すること。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】林中に坐憩して、席の暖かなるに至り、やがて水邊より歸ると、衣まで涼しくなつた。腐つた瓜は、蟲が殆んど食ひ盡して仕舞ひ、枝の透いた木には、鶴も巢を結ばない。ここに、偶然、幽尋を試みたが、豫期に反して、ささやかなる我が願も遂げられて居ない。唯だ喜ぶべきは、來往するものなく、秋草、園扉を没し、四境の極めて物靜かなることである。

送前國子王助教歸臨川

前の國子王助教の臨川に歸るを送る

去國獨依依。羈臣淚滿衣。國を去つて獨り依依、羈臣、涙、衣に滿つ。

夢中燕月遠。望裏楚山微。夢中、燕月遠く、望裏、楚山微なり。

世變人驚老。身全詔許歸。世、變じて、人、老に驚き、身、全うして、詔して歸る。

舟前楓葉落。應到故園扉。舟前、楓葉落つ、應に故園の扉に到るべし。

【字解】(一) 依依、低徊して去るに忍びざる貌。(二) 羈臣、羈旅の臣。

【題義】國子は即ち國子學、今の大學。前の字があるから、この王某は、元末助教の職に居たので、後に南京に召し出されたのであらう。それが、今次、臨川に歸郷するといふので、青邱は、乃ち其行を送つたのである。

【詩意】君は鄉國を去つてより、依依として獨り心に忍びず、羈旅の臣として、涙は衣に滿つるばかり。燕山なる舊都の月は、夢中に遠く、一望すれば、郷里なる楚地の山は、かすかに見える。世が變つて、自らその老いたるに驚き、一身、幸に全く、この度、詔して歸國することを許された。君の乗れる舟の前には、紅葉が紛紛として落ちるが、やがて、君に隨つて、故園の柴扉にまでも到るであらう。

送潘巡檢之閩中

潘巡檢の閩中に之くを送る

京師到閩海。秋色幾程餘。京師より閩海に到る、秋色幾程の餘。

莎柵山兵守。榕林島戶居。莎柵、山兵守り、榕林、島戶居る。

曉衙雞應鼓。晚邏騎隨車。曉衙、雞、鼓に應じ、晚邏、騎、車に隨ふ。

清世元無盜。將軍好讀書。清世、元と盜なし、將軍、好んで書を讀む。

【字解】(一) 閩海、閩越の海岸、今の福州地方。(二) 莎、後周書李遠傳に「かつて、莎欄に校獵す、石を叢蒲中に見、以て伏兎となし、これを射て中り、鐵入ること寸餘」とある。莎草の中に設けたる棚。(三) 榕林、榕樹の林、舎舎の草木狀に「榕は、葉、木麻の如く、その蔭十畝」とあり、東坡の詩に、忽行榕林中、跨空飛棋枰」とある。(四) 曉衙、衙は廳舎。(五) 曉鐘、鐘は例祭。(六) 無盜、盜は泥棒ではなく、亂寇の徒。

【題義】續文獻通考に「明、外府州縣關津要害の處所に於て、巡檢一員を設け、徭編の弓兵二三十人を率領し、専ら巡緝盤詰を務む」とある。この詩は、潘某が巡檢に任命されて、閩中、即ち福州地方に赴任するのを送つたのである。

【詩意】ここ南京の都から、閩越の海岸までは、何里あるか知らぬが、秋色渺然として、餘程遠く見える。彼の地に於ては、莎草の中に棚を設けて、山兵、これを守り、榕樹の林を成せる中には、鳥民が居を構へて居る。曉早く廳舎を開くと、雞が鼓に應じて鳴き、日暮に偵察に出かける時は、車の後に騎兵を從へて行く。しかし、今は清平の御世、亂寇の徒などは絶無で、君も定めて閒暇であらうが、幸ひ讀書を好まれるさうだから、退屈されることも無くて過ごされるであらう。

送思上人

思上人を送る

名林雖盡廢。南去只隨緣。

名林、盡く廢すと雖も、南去、只だ緣に隨ふ。

野飯晨留鉢。城鐘夜到船。

野飯、晨に鉢を留め、城鐘、夜、船に到る。

虎馴應畏法。鳥喚不驚禪。

虎は馴れて應に法を畏るべし、鳥は喚んで禪を驚かさず。

他日期相見。高峰舊塔前。

他日相見るを期す、高峰舊塔の前。

【字解】(一) 名林、前に送王員外遷三崇教の詩中に見えて居た、著名なる寺。(二) 野飯、田舎の飯。(三) 虎馴、朝野食獸に「空知禪師、陸渾山に入り、闍若に坐す、虎暴せず、山中偶々野猪の虎と闘ふを見、藁杖を以て之を揮つて曰く、檀越、頗らく相争ふべからずと、即ち分散す」とある。

【題義】上人の名字、閔歴等は、よく分からぬが、當時、有名な高僧であつたらしく、釋妙聲の送思上人游方一序に「吳郡の思上人、天台氏の學を業とし、長洲の文殊寺に主たること數年、人の從つて化するもの、甚だ衆し。今乃ち棄てて去り、山水の間に簡然たり、繫がざるの舟、空を行くの雲の如く、何ぞ稱すべけむや」とあつて、この詩も、矢張、同時に、その飛錫を送つたのであらう。

【詩意】名だたる寺院は、すつかり荒廢して、君が巡錫しても、格別得るところもあるまいが、今次の南行は、唯だ隨緣、即ち成り行き次第である。朝に田舎で飯に有り付いた時、鉢を留めて心ばかりの謝禮とすることもあらうし、夜、船中に寢て居ると、城上の鐘聲が遠く聞こえるだらう。虎も馴れて、法力を畏れるであらうし、鳥が鳴いても、坐禪の邪魔には成らない。いづれ、他日高峰舊塔の前に於て、再び御目に懸るであらうから、その時まで、恙もなくて、在はさむことを希望する。

宴王將軍第

王將軍の第に宴す

流水通侯第。行雲傍妓臺。

流水、侯第に通じ、行雲、妓臺に傍ふ。

雨催牙仗散。風引羽觴來。

雨は牙仗を催して散じ、風は羽觴を引いて來る、

曲學移聲按。詩隨得韻裁。

曲は聲を移すを學んで按じ、詩は韻を得るに隨つて裁す。

莫令游宴歇。次第過花開。

游宴をして歇み、次第に花の開くを過ごさしむる莫れ。

【字解】

【一】侯第、公侯等、貴人の邸。【二】行雲、巫山の神女の朝に雲となり暮に雨となるを暗用す。【三】妓臺、妓は家妓、

即ち羣妾、それ等の居る部屋を指したのであらう。【四】牙仗、牙は將軍の牙旗、その牙旗を擁護して居る兵仗。【五】羽觴、席上

を早く巡るより羽といふ。【六】曲、歌曲。【七】移聲、節を調へる。

【題義】

説明に及ばぬ。但し、王將軍の名字、閔歷等は不詳。

【詩意】

庭内を走る流水は、侯家にも通じ、羣妾の居る一構の亭臺には、行雲の倚り添ふ想がある。この日、宴酣なるに當つて、雨が降つて來たので、物物しき牙旗の兵仗などは、解散して仕舞ひ、

風は羽觴を引いて、愈よ急に廻らしめる。妓人どもは、節を調へることの出來た處で、歌曲を奏し、

座客は、韻を得るに隨つて詩を作り、席上は、なかなか賑かである。この游宴を止めて、しづ心なく、

次第に花盛りを過ごさしめる様なことなく、幸ひの折から、十分に、春の景色を吟賞したいものであ

る。

送朱從事之吳興

朱從事の吳興に之くを送る

釋褐方從宦。青山故郡鄰。

褐を釋いて、方に宦に従ひ、青山、故郡に鄰る。

草深湖帶雨。花暗驛藏春。

草深くして、湖、雨を帯び、花暗くして、驛、春を藏す。

鼓聚祈蠶女。舟逢射鴨人。

鼓は聚む蠶を祈るの女、舟は逢ふ鴨を射るの人。

幕中應待久。徒此惜離辰。

幕中、應に待つこと久しかるべし、徒に此に離辰を惜む。

【字解】

【一】釋褐、短衣を脱して朝衣に著換へる、即ち始めて出仕すること。攝維の解嘲に、或釋褐而傳とあり、國朝會要に「興

國二年、はじめて呂蒙正等に賜つて、褐を釋かして、後、遂に例となす」とある。【二】祈蠶女、陸游の詩に、戸戸祈蠶喧三鼓當と

ある。蠶が善く上がる様にと祈ること。【三】射鴨、水上に居る鴨を射る、前に卷二、射鴨詞に詳しく見えて居る。【四】離辰、別

離の時。

【題義】

從事は、地方長官に隸屬して、今の理事官の如きもの。吳興は蘇州附近。この詩は、從事朱

某の吳興に赴任するを送つたので、矢張、青邱が南京に居た時分の作であらう。

【詩意】

君は、今回、はじめて出仕して任命せられ、その行くところは、青山、故郡に近き處、即ち

吳興の地である。途すがら、草は深くして、湖水は雨を帯び、花は暗くして、驛亭に春景色を匿し、折から、三月の半ば過ぎて、流石に眺は面白い。鼓聲の襲撃たるは、蠶を祈る村女どもを聚めるのであるし、舟を乗り出すと、鴨を射る者にも出遇ふであらう。幕中では、久しく、君の著任を待つて居るに相違ないので、ここに、別離の時を惜んで、愚圖愚圖して居るのは、本意でもあるまじく、早速、旅程に登られたらば善からうと思ふ。

【餘論】草深、花暗の十字は、例の寫景の名聯である。

和友人過采石

友人の采石を過ぐるに和す

山暝斷磯頭、猿聲兩岸愁。

山は暝す斷磯の頭、猿聲、兩岸に愁ふ。

柳間娼女酒、月下估人舟。

柳間娼女の酒、月下估人の舟。

擒虎嗟橫渡、騎鯨憶醉游。

擒虎、橫渡を嗟し、騎鯨、醉游を憶ふ。

停橈正懷古、風急葦花秋。

橈を停めて、正に古しへを懷ふ、風は急なり葦花の秋。

【字解】【一】斷磯、磯は邦訓いそであるが、本職は絶壁。【二】估人、行商の人。【三】擒虎、人名、隋書韓擒虎に「高祖、大舉して陳を伐つ、擒、五百人を率ゐて、宵に采石を濟る、守者皆醉ふ、擒、遂に之を取る」とある。擒、本名は擒虎。【四】騎鯨、李

白が采石の江中に於て、月を拘せむとし、誤つて、水に落ちて死んだのを、後人は鯨に騎して去つたといつて居たので、その評は、前に卷十、風臺圖の詩中に詳説して置いた。【五】停橈、橈は舟を行る船であるが、ここでは、舟の磯に用ふ。

【題義】この題は、一に和包師聖同知過采石に作つてあるといふから、友人は、即ち包師聖であらう。采石は、南京の西、當塗の西北二十里に當り、牛渚の山が江中に突入した處の絶壁である。こゝは、むかしから、要衝の地で、孫策は劉繇を牛渚の營に攻め、孫權は周瑜をして此に屯せしめ、爾後、重鎮となり、隋の韓擒虎の陳を滅せしも、明の常遇春の元兵を敗りしも、ともに、この道に由つたのである。

【詩意】采石磯頭の山は、暮れかかり、兩岸の猿は、愁を含めるが如く、柳の間には、酒を賣つて居る娼婦があるし、月下には、估客の舟が羣がつて居る。むかし、韓擒虎が横に江水を絶つて渡つたのも、李白が醉游の中に鯨に騎して去つたのも、皆、ここに於てし、俯仰之餘、感慨に堪へざらしめる。舟を停めて、往事を思へば、秋風颯として至り、蘆の花が吹き亂されて、一しほ、景色が淋しく見える。

【餘論】後聯は、擒虎の横渡を嗟し、騎鯨の醉游を憶ふといふ義であるが、文字の上からいふと、擒虎その人が横渡を嗟し、李白が自ら醉游を憶ふといふ様に聞こえる。もとより、詩は文章と異にして、かかる一種の語法を承認して居ることは、勿論であるが、決して、感服すべきものではない。擒虎と

騎鯨との對も、一寸面白い様であるが、實は苦しまぎれの小刀細工に過ぎぬ。

謔柳

柳に謔る

何恨苦長聾。纖姿嫵媚春。何を恨んで、苦に長く聾す、纖姿、嫵媚の春。

慣愁行路客。羞比舞筵人。行路の客を愁へしむるに慣れ、舞筵の人に比せらるる」

亂葉斜斜雨。狂花袞袞塵。亂葉斜斜の雨、狂花袞袞の塵。

殘蟬來噪日。應落漢潭濱。殘蟬來り噪ぐの日、應に落つべし漢潭の濱。

【字解】(一) 蟬、なまめがしき貌。(二) 狂花、柳絮を云ふ。(三) 漢潭、漢水の淵。桓温が、おのが種まいた柳の大きくなつたのを見て、嘆息したといふことがあつて、その地は漢南であるが、ここには、漢潭と云つたのであらう。

【題義】 謔は、戯れる、嘲るといふ義で、この詩は、即ち柳を嘲つたのである。

【詩意】 柳の纖細なる姿は、春に當つて、愈よなまめがしき、何を恨んで、長しへに眉を聳めて居るのであらうか。生來、路を行く旅人の心を愁へしめることが上手でありながら、筵上に舞ふ美人に比せらるるを羞ぢて居る。柳の葉は、斜斜たる雨に亂れ靡き、その花は、袞袞たる塵に混じて飛んで行く。やがて、秋に成つて、殘蟬が來て止まつて噪ぐ折から、葉が黄ばんで、漢水の邊に散るのは、一

段傷心の景であつて、むかし、桓温が之を見て歎息したのも、尤もな事である。

無題

無題

顧影出中堂。長眉學內妝。影を顧みて、中堂を出で、長眉、内妝を學ぶ。

本爲戚里婦。不是狹斜倡。本と戚里の婦たり、是れ狹斜の倡ならず。

扇撲園中蝶。箏彈陌上桑。扇は撲つ園中の蝶、箏は彈す陌上桑。

相逢不敢笑。只恐斷君腸。相逢ふも、敢て笑はず、只だ恐らくは、君の腸を斷たむ」

【字解】(一) 中堂、奥向をいふ。(二) 內妝、宮女の妝。(三) 戚里、天子の母方の親族の居る處、轉じて外戚の義に用ふ。史記高石君傳に「その家を長安中の戚里に徙す、婦美人たるを以てなり」とある。(四) 狹斜、狹い路次といふのが本義であるが、唐代長安の花柳地は、裏町の狭い處に在りしに因つて、游里の意味に用ひて居る。盧照鄰の長安古意に、長安大道連狹斜、青牛白馬七香車とある。(五) 陌上桑、漢代の樂府題で、相和歌辭に屬し、一に豔歌雜數行に作つてある。古今注に「陌上桑は、秦氏の女子に出づ。秦氏は邯鄲の人、女あり、羅敷と名づく、邑人千乘王仁の妻たり。王仁、後に趙王の家令となる。羅敷、出でて桑を陌上に采る。趙王、羅敷に登り、見て之を悦び、因つて、酒を置いて、奪はむと欲す。羅敷、彈箏に巧なり、乃ち陌上桑の歌を作り、以て自ら明かにす、趙王、乃ち止む」とある。

【題義】 無題は題が無いとか、題を失つたとかいふのではなく、李商隱が、その縁情諸什に冠するに

無題を以てせしより、後人は皆之を沿襲して居るので、主として、閑閑間の情事に關した詩を指すことが、慣例に成つて居て、青邱の此作も、無論、その一例に當つべきものである。

【詩意】美人が其影を顧みつつ、深閨から出て來たが、眉を長く描いたのは、御殿風の妝を真似たのである。この人は、もと天子外戚の身内であつて、游里の倡婦ではなく、従つて、自然と品格が備はつて居る。庭園に出でては、團扇を以て蝶を撲ち、箏を弾じて陌上桑の古曲を弾じ、その貞志、決して移らざることを仄めかして居る。その相逢うて敢て笑はざるは、君の心腸を斷つて、眷戀の情に堪へざらしめるのを恐れるからであつて、もとより、生來の無愛想ではない。

京師寓廨三首

京師寓廨 三首

誰言舊隱非、靜里且相依。誰か言ふ、舊隱非なりと、靜里、且つ相依る。

綠樹城通苑、青山寺對扉。綠樹、城、苑に通じ、青山、寺、扉に對す。

官閒休直早、客久夢還稀。官は閒にして直を休むること早く、客久しくして還るを

是物春來典、唯存舊賜衣。この物、春來典す、ただ存す舊賜衣。「夢むること稀なり。」

【字解】(一) 通苑 苑は御苑。(二) 休直 退出。(三) 春來典 杜甫の詩に、朝回日典春衣とある。

【題義】寓廨の廨は官舎。元史の編修に際し、史局は天界寺に設けられ、そして、編修員の連中は、便宜上、皆寺中に寓居したので、この詩は、即ち其寓の實況を詠じたのである。

【詩意】わが往日の棲隱は、すでに駄目となつたといふ譯でもないが、上京の後は、しばらく、この靜かな處に寄寓して居る。綠樹は、城を繞つて、御苑に通じ、青山は、寺に近くして、扉に對して居る。もとより、閑官であるから、退出することも早く、久客の身は、還郷の夢だに稀である。羈居岑寂、一物なく、唯だ囊に頂戴した朝衣があるが、これとても、春來質に入れて置いたのを、やつと近ごろ受け戻したのである。

幾夜頻聽雨、經春不見花。幾夜か、頻りに雨を聽き、春を經れども、花を見ず。

藤蕪青渚燕、楊柳白門鴉。藤蕪、青渚の燕、楊柳、白門の鴉。

拙宦危機遠、工吟癖性加。拙宦、危機遠く、工吟、癖性加はる。

閒坊車馬少、不似住京華。閒坊、車馬少く、京華に住するに似ず。

【字解】(一) 藤蕪 草の茂みをいふ。(二) 青渚 地名かとも思はれるが、不詳。(三) 白門 前に數ば見えた白下門で、李白の詩に何處最關情、烏啼白門柳とある。(四) 閒坊 靜かなる街路。

【詩意】幾夜か、打つづけて雨の降る聲を聞いたが、春に成つても、花は、まだ咲き出さぬ。草の生ひ茂れる青渚には、燕が飛び繞り、柳の立ち列ぶ白門には、鴉が啼いて居る。身は、仕官に不得意なる儘、却つて、危機に遠ざかり、詩は、追追上手になつて、性癖が愈よ加はつて來た。この邊は、靜かな町であつて、車馬の往來極めて少く、とんと、都に住んで居るにも似つかはしからぬ位である。

寂寞過芳時。幽懷只自知。

寂寞として芳時を過ぎ、幽懷 只だ自ら知る。

袖無投相刺。篋有寄僧詩。

袖には相に投ずるの刺なく、篋には僧に寄するの詩あり。

鼠跡塵凝帳。蛙聲雨到池。

鼠跡、塵、帳に凝り、蛙聲、雨、池に到る。

疏慵堪置散。不敢怨名卑。

疏慵、置散に堪へたり、敢て名の卑きを怨まず。

【字解】(一) 芳時 春暁なる時。(二) 投相刺 宰相に差し出す名刺、梁書諸葛璠傳に「江紀、璠を明帝に薦めて曰く、璠に安んじ、道を守り、禮を悦び、時に教く、未だ嘗て刺を邦宰に投じ、璠を府守に曳かず」とある。刺を宰相に投ずるは、即ち權門に出入して、一身の爲に色色運動することである。(三) 置散 閑散な職に置く、韓愈の進學解に投置散、乃分之宜とある。

【詩意】寂寞として花の盛りを過ぎしたが、一片の幽懷 只だ自ら知るのみである。袖裏には、宰相に差出す名刺もなく、篋中には、坊さんに贈つた詩がある。塵は紗帳にこびり付いて、鼠の足跡が、

はつきりと見え、雨は池塘に満ちて、蛙の聲が騒がしく聞こえる。自分は、本來無性の怠け者であるから、史官といふ様な閑散な職に置かれたのが、丁度、適當であつて、聲名の卑いことなどは、何とも思つて居ない。

【餘論】袖無の一聯は、作者の人物の高尙なることを想見すべく、平衍夷曠を以て推すべき佳聯である。

送舒徵士考禮畢歸四明

舒徵士の考禮畢りて四明に歸るを送る

寄語關門吏。休輕尙布衣。

語を寄す關門の吏、尙ほ布衣なるを輕んずるを休めよ。

叔孫聊應召。周黨竟辭歸。

叔孫、聊か應に召さるべし、周黨、竟に辭して歸る。

赤日京塵遠。蒼煙海樹微。

赤日、京塵遠く、蒼煙、海樹微なり。

送君還自歎。老却故山薇。

君を送つて、還た自ら歎す、老却す故山の薇。

【字解】(一) 叔孫 漢書叔孫通傳に「博士となる。高祖に説き、朝儀を起し、古禮を采り、秦儀と雜へて之を效し、はじめて長樂宮に用ふ、諸王より以下、震懾せざるなし。通を拜して奉常となす」とある。(二) 周黨 後漢の初の逸士。前に卷三、詠二隱逸十六首の中に評述して置いた。

【題義】四明は、一統志に「寧波府、唐には明州といふ、四明山は府城の西南に在り」と見ゆ。この詩は、舒某が徵士となつて上京し、禮部の試験を受けし後、四明に歸郷するを送つたのである。この人は、多分試験に及第したが、朝廷の現状を見て、仕官を欲せず、直に歸郷したのであらう。

【詩意】關門の役人に寄語するが、舒君は、依然、無官の布衣だといつて、輕蔑してはならぬ。君は、古しへの叔孫通の如く、召し出されて、大に登庸せらるべき筈であつたが、周黨の様な高節を抱き、たつて辭退して歸郷されるのである。途すがら顧みれば、赤日の下に都の沙塵は次第に遠ざかり、蒼煙棚引く處、海邊の樹色は、薄く見えて居る。君を送るに就けて、予も亦た歎息に堪へないので、早く故山に歸り、薇を採つて生活して居たいと思つて居たものの、今しも、春盡きて、薇も段段末になり、そして、まだ何時歸れるか分らない。

【餘論】赤日、蒼煙の十字は、氣象壯闊、例の御手の物である。

陪客登陶丘

客に陪して陶丘に登る

相逢俱失意。此地偶同游。

相逢ふ、俱に失意、この地、偶ま同游。

獨樹邀人去。斜陽爲客留。

獨樹、人を邀へて去り、斜陽、客の爲に留まる。

依村煙景夕。近水竹聲秋。

村に依る煙景の夕、水に近く竹聲の秋。

設有歸歎歎。何山是故丘。

謾に歸歎の歎あり、何の山か是れ故丘。

【字解】(一) 獨樹 一本立てる木、王褒の詩に「平原看獨樹」とある。(二) 煙景 煙を帯びたる景色。(三) 歸歎 論語に「歸らむ歎、歸らむ歎、吾が黨の小子」とある。(四) 故丘 故山、故國に同じ。

【題義】説明に及ばぬ。陶丘は、何處か分からぬが、或は婁江の岸上かも知れぬ。

【詩意】君と相逢ひ、ともに失意を嘆き詫びつつ、料らずも一處に此に游んだ。獨樹は人を迎ふるが如く、斜陽は、客の爲に、ことさらに留まつて居る様である。村を繞つて煙れる景色は、次第に夕ならむとし、水に近き邊には、竹聲すでに秋をなして居る。ここに、早く歸りたいと歎息するもの、どの山が、果して、わが故丘であるかと思ひ惑ふのも、はかないことである。

【餘論】後聯十字は、放翁の口吻に似て居る様である。

王公子宅五月菊

王公子宅の五月菊

秋英忽夏發。宛在阿戎家。

秋英忽ち夏發し、宛として、阿戎の家に在り。

細認驚初見。高吟喜共誇。

細に認めて、初めて見たるに驚き、高吟して共に誇るを

不依寒竹雨。欲映午榴霞。
我意甘遲暮。尊前有此花。

寒竹の雨に依らず、午榴の霞に映せむと欲す。
わが意、遲暮を甘んず、尊前、この花あり。

【字解】(一) 秋英、秋の花、即ち菊。(二) 阿戎、晉書に「王渾の子、戎、年十五。既婚、渾に謂つて曰く、渾仲清爽、扇の倫に非ざるなり、扇と言ふは、阿戎と語るに如かず」とある。(三) 遲暮、老境。

【題義】題下の原注に「吳郡の王君明仲は、清獻公の子」とあつて、王君は、名家の出なるが故に、特に公子と云つたのである。五月菊は、夏菊と思はれる。この詩は、王君の宅に夏菊を見て作つたのである。

【詩意】秋咲くべき菊が、夏咲き出で、おまけに、こは、阿戎の様な酒脱なる少年公子の家である。仔細に眺めると、今まで見たこともないものであつて、高吟して、主人と共に誇らしげに、この花を賞した。この菊は、秋寒げなる竹の雨に倚り添はうとせずして、夏の眞晝に燃えて、夕やけの如く見ゆる石榴の花と相映じて居る。われ、幸に老境に甘んじて居たのに、樽前にかういふ花があるのは、まことに、豫想外の事である。

送周復秀才賦行李中一物得紈扇

周復秀才を送る、行李中の一物を賦して紈扇を得たり

不畫乘鸞女。應憐素質新。
霜機驚落早。風塵讓揮頻。
席上曾歌怨。窓間或掩擘。
何如爲君子。遠路障埃塵。

【字解】(一) 乘鸞女、前に扇の詩中にも引いたが、江淹の詩に畫作秦玉女、乘鸞向三煙霧とある。(二) 素質、紈扇は白く練り精で造るが故に云ふ。(三) 霜機、白く絹を織る機。(四) 風塵、風を生ずる拂子。(五) 歌怨、班婕妤が團扇に託して、おのが薄命を歎き詫びた詩を感賦行と題してあるを云ふ。なほ、李商隱の詩に燭分歌扇淚とある。(六) 掩擘、ひそめる類を隠す、温子昇の詩に妖姬掩扇歌とある。

【題義】周復秀才の遠行を送らむとし、その荷物の中の一物を詠することにし、予は、紈扇を得たから、この詩を作つたといふので、つまり、團扇に託して、送別の意を述べたのである。秀才は、どういふ譯で、どこに行くのか、その邊の事は、一切不詳である。

【詩意】この團扇には、乘鸞の弄玉などは畫かす、小ざつぱりして居て、紈素の新なるは、殊に愛すべきを覺える。この紈素は、白地を織る機の上から早く落ちて來て、やがて、細工されて、團扇となつたので、その打續いて揮り動かされることに就いては、拂子とても到底及ばぬであらう。席上、こ

れにかこつけて、怨歌を唱へたものもあるし、窓間、これを以て覆める其顔を掩うたこともあるが、君子の爲に、遠路、塵埃を障るの一事は、取り分け、稱すべきことである。

送流人

流人を送る

漢條應偶觸。蠻俗未能諳。
海近風多颶。山昏瘴似嵐。
行衝哀甸虎。食畏蠱家蠶。
鄉國何年返。懸知老日南。

【字解】(一)漢條 條は法律の個條、漢は例の如く添へて云ふ。(二)颶 大暴風。(三)瘴 毒熱の氣。(四)嵐 山氣。
【五】哀甸 一統志に「雲南永昌軍民府は、古しへの哀甸、故に哀甸哀甸といふ。本名安樂、夷語訛して哀甸となる」とある。【六】蠱家蠶 周禮に「庶氏、毒蟲を除くを掌る」とあり、宋太祖紀に「永州諸縣民の蠱を畜ふもの、三百二十六家を僻處に徙し、復た郷に齒するを得ざらしむ」とあり、盧谷開鈔に「鄧州、農に蠶んで戸を啓けば、一小籠子を見る、開き視れば、乃ち白金酒器、數十事、擊へ歸れば、殿上に物あり、蠶蠶然として動き、金色爛然たるを覺ゆ、乃ち一蠶なり。友人談るものあり、曰く、これ謂はゆる金蠶なり、能く人の腹中に入り、腸胃を殘嚼し、復た完然として出づ」とある。すると、蠶とは蠱の如き形を爲せる毒蟲、蠱家とは、これを飼養して居る巫祝の類であらう。【七】日南 漢書地理志に「日南郡は、故の秦の象郡、武帝の元鼎六年、更めて名づく」とあり、その注に「その日の南に在るを言ふ、謂はゆる北戸を開いて以て日に向ふもの」とある。

【題義】流人は、罪を得て遠地に配流せらるるもの。この詩は、即ち之を送つたのである。

【詩意】君達は、偶然に法律の箇條に觸れたので、もとより、格別の惡事を爲したのでもなく、遠流されるとは、まことに氣の毒千萬、殊に行く先の蠻地の風俗は、まだ十分に知つて居ない位。その地は、海近くして、颶風屢ば到り、毒熱の氣、山を昏くして、煙嵐と疑はれる。路を行いては、哀甸の虎にぶつつかかることもあるべく、食事をするに際しては、注意して、蠱家の蠶を口にしてはならぬ。何時になつたら故郷に返れるか、その邊の事は、とんと分からず、多分は、日南の地に老朽ちるであらうが、深く思ひ諦めて、餘りよくよせぬが善からう。

贈張省郎

張省郎に贈る

漢署早爲郎。長游鳳沼旁。
雞知壺水候。馬識火城光。
每載趨曹筆。時熏直省香。
邊書無一羽。冠蓋得翱翔。

五言律詩 送流人 贈張省郎

【字解】【一】漢書 漢代の役所。ここでは中書省を指して云ふ。【二】鳳沼 即ち鳳凰池、中書省の近くに在るので、後には、省の異名の如くなつて居る。【三】蠶水候 蠶は銅蠶、即ち水時計、時計の制限。【四】火城 國史補に「元日冬至ごとに、仗を立て、大官は皆珂傘を備へて燭を列し、五六百炬に至るものあり、宰相將に至らむとすれば、衆皆燭を滅して之を避く」とあり、東坡の詩に「萬人爭看火城邊」とある。【五】趨曹筆 漢官儀に「八座、成を受け、事、郎に決す、筆を下せば詔筆となり、言を出せば詔命となる」とある。曹は他省の吏員。その吏員を趨走せしめる詔筆の筆といふ義。【六】直省香 漢官儀に「その入つて齋廟に直する、侍史一人、女侍史二人を給し、皆、端正妖麗を選び、香爐香囊を執り、燒薫して衣服を護す」とあり、梅堯臣の詩に、官奴休執燭、侍史正薰衣とある。省中に宿直すれば、香を焚いて、衣服を護せしめらる。【七】邊書無一羽 邊庭に一羽書なしといふ意。漢書高帝紀の注に「檄は、木簡を以て書と爲し、長さ尺二寸、微召に用ふるなり。急事あらば、加ふるに、鳥羽を以て之に挿み、名づけて羽書といふ」とある。【八】冠蓋 蓋は車蓋、併せて大官の禮裝。

【題義】この詩は、中書省の郎中たる張某に贈つたのである。

【詩意】君は、早くより、郎中となつて、鳳池の傍に遊び、中書の職務に擔はつて居る、雞が漏刻を知つて、曉を報ずると、君も、その時分に出仕されるし、元日冬至に火城を設ける場合など、第一に其處に臨むから、馬まで之を識別して居る。毎筆を載せ、入朝して詔書を草し、各省の屬僚を趨走せしめ、時たま宿直すると、女侍史が付き添つて居て、香を衣服に焚きしめて呉れる。今しも、四海無事、邊境から羽書の來ることもないから、冠蓋堂堂として、廟廊の間に翔翔することが出来るので、まことに結構な事である。

送瀚公住靈巖

瀚公の靈巖に住するを送る

離宮游路絶。名寺道場開。

離宮、游路絶え、名寺、道場開く。

我昔題詩去。師今說法來。

われ、昔、詩を題して去り、師、今、法を説いて來る。

茱萸垂澗戶。菌萐發池臺。

茱萸は澗戸に垂れ、菌萐は池臺に發す。

興壞俱空幻。登臨不用哀。

興壞ともに空幻、登臨、哀むを用ひず。

【字解】【一】離宮 靈巖は即ち館娃宮の址、吳王夫差の離宮であつた。【二】茱萸 ぐみ。【三】菌萐 蓮の花。【四】興壞 盛衰・興替に同じ。

【題義】説明に及ばぬ。但し、瀚公の本名は不詳。

【詩意】ここは、吳王夫差の離宮の址で、荒廢すでに久しくして、游覽の路も無いやうであるが、幸に名だたる寺が設けられて、一大道場に成つて居る。さきに、予は其處に游んで、詩を題したことがあるが、今や、老師は、晉山せられて、妙法を講説することである。頃しも秋、茱萸は枝もたわわになつて、澗邊の菴の傍に垂れ、蓮の花も、今が盛りで、池臺を繞つて居る。世事の盛衰は、本來空にして幻、ここに登臨しても、格別悲むに及ばぬことである。

送宿衛將出守鄧州

宿衛將の出でて鄧州に守たるを送る

中郎身領仗宿衛在承明

中郎身、仗を領し、宿衛して承明に在り。

舊射雙鵬落新乘五馬行

舊と雙鵬を射つて落し、新に五馬に乗じて行く。

紅雲遙魏闕白水近穰城

紅雲、魏闕遙に、白水、穰城に近し。

好勸諸年少春來賣劍耕

好し勸めむ諸年少、春來、劍を賣つて耕せ。

【字解】【一】中郎 中郎將の略。【二】宿衛 宮城を護衛する。【三】承明 宿衛する者の溜まり所、漢書に「君、承明の廡を厭ふ」とあつて、注に「石渠閣外、直宿の止まる所、廡といふ」とある。【四】五馬 官儀に「漢制、九轡は二千石、右驂を以てし、太守は四馬のみ、その加秩あつて二千石に中るものは、乃ち右驂、故に五馬を以て太守の美稱と爲す」とあり、遷賢閣覽に「漢時、朝臣出でて使し、太守と爲れば一馬を増す、故に五馬といふ」とある。【五】魏闕 魏は魏、巍然たる宮闕、即ち宮城。【六】白水 清んだ水。【七】穰城 鄧州志に「州東新野縣、鄧州に屬す、縣に白河あり」と見ゆ。

【題義】晉書武帝紀に「中軍將軍を置き、以て宿衛を統ぶ」とあり、鄧州は一統志に「春秋の時、鄧侯の國、秦には穰邑となし、漢には穰縣となし、南陽府に屬す」とある。この詩は、宿衛將たりし某が、鄧州の太守となつて、新に赴任するのを送つたのである。

【詩意】これまで、君は中郎將に在官し、みづから兵仗を領して、宮城を護衛し、そして、承明の溜まり所に居たので、材武絶倫、一矢に雙鵬を射落した程であつたが、今回は、太守に轉じ、五馬に乘

じて、花花しく赴任される。途すがら、顧みれば、紅雲棚引く處、魏闕は次第に遠く隔り、前面には、白水滔滔として穰城も程近くなつて來る。君の如き武臣でさへ、この通りであるから、諸年少輩も、春來、劍を賣つて牛に換へ、この太平の御世に際し、長閑かに田を耕すのが然るべきことであるといつて、懇に勸告する次第である。

甘露寺

甘露寺

勝地江山壯名林歲月遙

勝地、江山壯に、名林、歲月遙なり。

刹藏京口樹鐘送海門潮

刹は藏す、京口の樹、鐘は送る海門の潮。

月黑龍光發天清蜃氣銷

月は黒くして龍光發し、天清くして蜃氣銷ゆ。

何當尋很石閒坐話前朝

何ぞ當に很石を尋ね、閒坐、前朝を話すべき。

【字解】【一】京口 地名、揚子江の北岸。【二】海門 縣名、一統志に「通州に屬す、今、海に没す」とある。【三】龍光 金龍の鱗の光。【四】蜃氣 本草に「蜃は、蛟の屬、能く氣を吐き、樓臺城郭の狀を成す、將に雨ふらむとすれば即ち見はる、蜃樓と名づけ、又海市といふ」とある。【五】很石 一統志に「甘露寺内に在り、石の狀、羊の如し。相傳ふ、諸葛孔明、その上に坐し、孫仲謀と孟德を攻むるを謀るもの」とある。【六】前朝 主として六朝の國國を云ふ。

【題義】甘露寺は、一統志に「鎮江府北固山上に在り、吳の甘露年中に建つ、因つて名づく、内に梁の武帝の書、天下第一江山の六字あり」と記してある。

【詩意】ここは、音に聞く勝地であつて、江山の形勢は雄壯であるし、甘露寺も、著名なる叢林であつて、久しく歲月を経過した。堂塔は、京口に連る樹色の中に匿れ、鐘聲は、海門の潮を送つて押し寄せしめる。月の黒き夜など、金龍の鱗光が明かに映發し、天が清むと、屐氣が初めて銷え、打見たるところ、極めて閑裕である。されば、何も很石を尋ね、その上に閑坐して、六朝の舊事を話して懐古の想に耽らすとも善いので、つまり、景色を賞すれば、それで澤山である。

送張羽後夜坐西齋

張羽を送つて後、夜、西齋に坐す

開齋聽鐘坐、憂緒悵多端。

開齋、鐘を聽いて坐し、憂緒、悵として多端。

鳴雁雨中急、離人江上寒。

鳴雁、雨中に急、離人、江上に寒し。

秋燈下木葉、夜艇隔風湍。

秋燈、木葉を下し、夜艇、風湍を隔つ。

別後情蕭索、方知舊會歡。

別後、情蕭索、方に知る舊會の歡。

【字解】【一】開齋、物靜かなる西齋。【二】憂緒、さまざまに思ひ悩む心緒。

【題義】この詩は、張羽の遠行を送りし後、夜、ひとり西齋に坐し、愁思の堪へられぬままに作つたのである。

【詩意】ひとり、物靜かなる西齋に坐して、鐘の聲を聽いて居ると、悵然として、さまざまに思ひ悩んで居る。鳴雁の聲は、雨中に急であるし、離れ行く征人は、江上の寒さに堪へられぬであらう。秋燈の下には、木葉紛紛として下るべく、夜泊の舟は、風に鳴る奔湍を隔てて居る。旅況、かくの如きを思へば、別後、殊に物さびしく、ここに至りて、愈よ舊日會同の喜ばしさを知るのである。

【餘論】前聯は刻劃せずして、自然巧妙、後聯と共に、張羽の旅況を臆測したのである。

徐山人別墅

徐山人の別墅

茶香孤墅發、竹色四鄰分。

茶香、孤墅より發し、竹色、四鄰分かる。

掃地侵蟲字、開窓散鳥羣。

地を掃うて蟲字を侵し、窓を開いて鳥羣を散す。

樹涼池過雨、苔潤石生雲。

樹涼しくして、池、雨を過ぎ、苔潤うて、石、雲を生ず。

我出無車馬、偏宜訪隱君。

われ出でむとして車馬なく、偏に隱君を訪ふに宜し。

【字解】【一】孤墅、墅は別莊。【二】四鄰分、分は分明の義。【三】蟲字、文心雕龍に鳥鳴似ノ語、蟲葉成ノ字とあつて、落葉を指

したものであらう。【一】隱君 隱士に同じ。

【題義】徐山人は、例の徐貞。この詩は、その別荘を訪うて作つたのである。

【詩意】香ばしき茶煙は、君の莊中より發し、竹の葉色は、青青として、四鄰とは打つて變つて、はつきりとして居る。庭上を掃除する際は、蟲が食んで字を爲せる落葉を押し除け、窓を開くと、近くに居た鳥の羣が驚いて飛び起つ。樹の涼しきは、池邊、雨の過ぎたるに因り、苔の潤へるは、石上雲を生じたからである。予は、貧窮の身、外出するにも車馬なく、唯だ徒歩して、君の如き隱士を訪ふことだけは出来る。

【餘論】樹涼の十字は、名聯として數ふべきものである。金檀注本には、金蘭集補遺改本として、左の一首を附記してある。

吾憐孺子宅。門對三晚山。客去尊留月。僧來榻掃雲。茶香孤嶼發。竹色四鄰分。莫厭頻相過。

言懷少似君。

この詩は、前の起聯を以て後聯となし、前聯はあまり面白くない。これを改作とすると、却つて折角の者を悪くして仕舞つた様なもので、むしろ、の方が原作、前に掲げた方が定稿であらうと思はれる。

客館秋懷

客館秋懷

獨臥愁空館。牆陰野豆開。

獨臥、空館を愁へ、牆陰、野豆開く。

暑將潮氣斂。秋與竹聲來。

暑は潮氣と斂まり、秋は竹聲と來る。

身賤多違志。時清少棄材。

身賤しくして多く志に違ひ、時清くして棄材少し。

慙非張仲蔚。門戶有蒿萊。

慙づ張仲蔚に非ず、門戶に蒿萊あるを。

【字解】【一】暑將潮氣斂 將は「もつて」と訓する場合が多いけれども、ここでは「と」と訓する方が穩當である。【二】張仲蔚 皇清證の高士傳に「張仲蔚は、平陵の人、居るところ、蓬蒿人を没す、榮名を治めず、時人識るなし」とある。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】ひとり、客舎の空館に臥して、愁に堪へず、牆根の陰には、野豆が花を開いて居る。今しも、殘暑は、潮氣と共に收まり、秋は、竹聲と共に音づれて來た。身は貧賤の爲に、志すことも、多くは成し遂げず、清平の世には、棄材少く、それぞれ用ひられて居るのに、こんな事では仕方がない。慙すべきは、この身、古しへの張仲蔚に非ずして、その居るところだけが、頗る相似て蓬蒿に没して居るといふことである。

【餘論】前聯十字は、全篇の警策である。

秋夜宿周記室草堂送王才

秋夜、周記室の草堂に宿して王才を送る

相別還相戀。秋宵暫對牀。

相別れて、還た相戀ふ、秋宵、しばらく對牀。

人情貧後見。客況醉中忘。

人情、貧後に見はれ、客況、醉中に忘る。

池柳疏含吹。江雲薄護霜。

池柳、疏に吹を含み、江雲、薄く霜を護す。

離舟待明發。愁思劇茫茫。

離舟、明發を待つ、愁思、劇だ茫茫。

【字解】 〔一〕含吹、風を含むといふ義、唐の太宗の雨と題する詩に「綠柳添絲密、含吹織空羅」とある。〔二〕明發、明朝に同じ。

【題義】 説明に及ばぬ。周記室は、前に數ば見えて居た。

【詩意】 すでに、王君と相別れたる後、翻つて戀しく覺え、秋の夜、しばらく周記室と牀を對して居た。人の眞情は、貧後に於て見はれ、客中の窮況も、醉中に於て忘れて仕舞ふ。池邊の柳は疏にして、風を含み、江上の雲は薄くして、霜を護るが如くである。王君の舟は、明朝を待つて發程すること、わが愁思は、甚だ茫茫として盡くろくことはない。

【餘論】 前聯は、窮中の實況で、まさしく、閱世の語である。

江上雨

江上の雨

冥冥衆樹昏。浩浩一江渾。

冥冥として衆樹昏く、浩浩として一江渾る。

急有廻風韻。輕無入霧痕。

急にして廻風の韻あり、輕くして霧に入るの痕なし。

鳥啼叢竹嶺。人臥落花村。

鳥は啼く叢竹の嶺、人は臥す落花の村。

門巷春泥滑。誰來共酒尊。

門巷、春泥滑かに、誰か來つて酒尊を共にせむ。

【字解】 〔一〕浩浩、ひろき貌。〔二〕一江渾、渾は濁る。〔三〕叢竹嶺、竹の發生して居る山。

【題義】 説明に及ばぬ。

【詩意】 雨の爲に、冥冥として、多くの樹は昏くなり、浩浩として、一江の水は、濁つて居る。急に降り注ぐ時には、風に吹き廻らされる様な響があるし、輕く飛ぶ時には、霧に入る痕だに無い。鳥は、竹の叢生せる山路に啼き、人は、懶げに落花の村に臥して居る。門巷は、ぬかるみで歩き悪く、ここに訪ひ來つて、酒樽を共にする人もない。

【餘論】 後聯は、巧に雨中の光景を描き出して居る。

送賈二進士歸省

賈二進士の歸省するを送る

年少擅詞華。曾看手八叉。

年少、詞華を擅にし、かつて看る手八叉。

晨裝歸路雨。春酒別筵花。

晨裝、歸路の雨、春酒、別筵の花。

馬帶雲過嶺。人同燕到家。

馬は雲を帯びて嶺を過ぎ、人は燕と同じく家に到る。

罷官趨觀好。不是謫長沙。

官を罷めて趨觀好し、これ長沙に謫せられしならず。

【字解】

【一】同華。文詞の光華。【二】手八叉。温庭筠が八叉手の間に八韻の詩を成したといふことで、前に卷十、送三頭貢士の詩中に引いて置いた。【三】晨裝。朝早く出發する時の旅裝。【四】趨觀。家庭に走つて兩親に見えろ、即ち歸省に同じ。【五】長沙。漢書賈誼傳に「誼、長沙王の太傅となり、湘水を渡り、賦を爲つて以て屈原を弔うて曰く、悲承三嘉惠二分映三罪長沙」とある。

【題義】

賈二の二は排行、名字は不詳。

【詩意】

君は、年少にして詞華を擅にし、かつて試場に於ては、八叉手の間に八韻の詩を成した位。明朝、旅裝を整へ、歸路の雨にぬれそぼちつつ行くであらうが、今日は、この別筵に於て、春酒を酌んで、ともに花を看るが善からう。途すがら、馬は、雲を帯びて嶺路を過ぎ、人は、燕子と同じく家に至るであらう。君が官を罷めて歸省されるのは、まことに宜しく、決して、古しへの賈誼が罪を獲て長沙に謫せられた様なものでは無い。

【餘論】後聯は、語法も一寸珍らしく、平易にして且つ緊健である。

贈衍師

衍師に贈る

石橋尋禮罷。歸住白雲層。

石橋、尋ねて禮し罷み、歸つて住す白雲の層。

法悟經慵讀。年衰塔倦登。

法悟つて、經、讀むに慵く、年、衰へて、塔、登るに倦む。

青苔生砌錫。黃葉翳龕燈。

青苔、砌錫に生じ、黃葉、龕燈を翳す。

我欲相依老。前身恐是僧。

われ、相依つて老むと欲す、前身、恐らくは是れ僧。

【字解】

【一】石橋。啓蒙記の注に「天台山、拾溪水險、前に石橋あり、徑、尺に盈たす、長さ數十丈、下、絶淵に臨む」とある。

【題義】

衍師は道衍、前に春日懷二十友の詩にも見えて居た。

【詩意】

上人は、すでに天台の石橋を尋ねて拜禮をなし、歸つて白雲層を爲せる亂山の上に住んで居られる。妙法を悟つた後は、御經も讀むに懶く、年を取ると、塔に上ることが、なかなか大儀である。青苔は、錫で裏んだ殿階に生じ、黃葉は、龕中の燈火に翳して、飄つて來る。この静寂の有様は、とても人間には見られぬ位、われは、上人と一處に居て、老い行かうと思ふので、どうやら、わが前身

送錢氏兩甥度嶺

錢氏兩甥の嶺を度るを送る

吏送投荒去。應歸下瀨營。

吏は、投荒を送つて去り、應に下瀨の營に歸るべし。

一家十口散。萬里兩身行。

一家、十口散じ、萬里、兩身行く。

洞獠欺商市。山魃喚客名。

洞獠、商市を欺き、山魃、客名を喚ぶ。

江邊南望泣。不盡渭陽情。

江邊、南望して泣く、渭陽の情を盡さず。

【字解】(一) 投荒 未開の蠻境に赴く。(二) 下瀨營 漢書武帝紀に「甲を下瀨將軍となし、若梧を下る」とあつて、その注に「瀨は濶なり、吳越、これを瀨といひ、中國、これを磧といふ」とあり、李贄の凱旋の詩に尙想江陵陣、猶疑下瀨師とある。下瀨は、早瀨を下ること、それが軍隊の名にも成つて居るので、營といへば、その軍隊の駐屯する處。(三) 洞獠 集韻に「西南夷、これを獠といふ」とある。(四) 山魃 抱朴子登仙篇に「山精、形、小兒の如く、獨足後に向ひ、夜、喜んで人を犯す、名を魃といふ、その名を呼べば、但す能はざるなり」とある。(五) 渭陽 舅、即ちなちの義。詩の秦風に我送舅氏、西至渭陽とあるに本づく。

【題義】兩甥といへば、母方の甥二人で、これに因つて、青邱の母の錢氏であつたことも分かる。度嶺は嶺南に赴くことで、いづれ、今の兩廣の地であらう。この詩は、錢氏兩甥の嶺南に赴くを送つたので、詩で見ると、矢張、征戍の爲であらうと思はれる。

【詩意】官吏どもは、汝等の南荒に向ふのを送つて行くとのことで、いづれ、下瀨の兵營に落ち付くことであらう。汝の一家は、十人の眷屬であつたのに、盡く分散し、そして、汝等二人、萬里の遠くに行くのである。穴居の蠻民どもは、時時出て来て、市場に妨害を加へ、山魃は、却つて過客の名を知つて、これを呼び止めやうとする。ここに、汝を送るにつけて、江邊に立ちつつ、南望して泣き、叔父たる我が職分を十分に盡し得ぬのを遺憾に思ふ次第である。

【餘論】前聯は、聊か算博士の讖を免れぬが、湊合自然に巧妙である。

送客歸閩省觀

客の閩に歸りて省觀するを送る

秋城聞暮砧。歸思忽盈襟。

秋城、暮砧を聞き、歸思、忽ち襟に盈つ。

客久依人遍。親衰念子深。

客久しくして人に依ること遍ねく、親衰へて子を念ふ

青山分嶺路。紅荔到鄉林。

青山、嶺路を分ち、紅荔、郷林に到る。

菽水還堪樂。何須季子金。

菽水、還た樂むに堪へたり、何ぞ季子の金を須ひむ。

【字解】【一】暮姑 暮に打つ姑の聲。【二】盤 胸に滿つといふに同じ。【三】紅荔 荔枝の荔枝語に「その實、廣上にして圓下、大さ徑寸有五分ばかり、香氣清遠、色澤鮮紫、膜は桃花の紅の如し」とあり、皮日休の詩に紅荔懸纒絡とある。【四】菽水 禮記に「菽を暖ひ、水を飲んで、その歡を盡す、これ之を孝といふ」とある。貧窮の中に在つて孝を盡すこと。【五】季子金 季子は蘇秦の字。その六國從約の長となつて家に歸りし時、妻は痛く恐れ入つて、待遇おろそかならず、如何なる故かといつて問ふと季子の金多きに見ればなり」といつたことが、史記の列傳に見えて居る。

【題義】閩は今の福州地方。この詩は、客の閩中に歸つて親を省するを送つたのである。

【詩意】秋城の日暮に砧うつ聲を聞くと、歸國の念が胸に湧いて、殆んど禁せられない。君は久しく客となつて居て、随分、人の世話にも成り、まだ其志を達せず、御兩親は、年を取つて、ひどく君の事を思つて居られるから、今次の歸省は、至極、結構な事である。青山の間は峠の路を分けて入り、荔枝の畑を行くと、自然、故郷に赴くので、一寸他には見られぬ景色。たとひ、貧窮の中に在つて、菽を食ひ水を飲んでも、親に奉侍するのが、孝の大なるものであつて、何も蘇秦の如く、六國從約の長となつて、懷中を暖かくせずとも宜しい。

【餘論】前聯十字は、情真にして語華、一誦、人をして黯然たらしめる。

圓明佛舍訪呂山人

圓明佛舍に呂山人を訪ふ

憐君不出院。結夏與僧同。
憐む、君が院を出でず、結夏、僧と同じきを。

陰竹行廊遠。香花掩殿空。
陰竹、廊を行つて遠く、香花、殿を掩うて空し。

飯分齋鉢裏。書寄藏函中。
飯は分つ齋鉢の裏、書は寄す藏函の中。

茶宴歸來晚。西林一磬風。
茶宴、歸り來ること晩し、西林、一磬の風。

【字解】【一】結夏 荆楚歲時記に「四月十五日、天下の僧尼、禪刹に就いて挂搭す、これを結夏といふ」とある。結夏は即ち安居。四月十五日より、僧衆が一所に靜居して修行すること、その期限は、九十日。夏籠り、夏居ともいふ。徐寅の詩に、不出真如結夏僧とある。【二】藏函中 經藏の箱の中、白居易の自記に「文集、五本あり、一本は廬山東林寺經藏院に在り、一本は蘇州南禪寺經藏の内に在り」と見ゆ。【三】茶宴 即ち茶會、雲仙雜記に「錢起、字は仲文、趙莒と茶宴を爲し、又、かつて長孫の宅を過ぎ、朗上人と茶會を爲す」とある。

【題義】圓明精舍は、姑蘇志に「圓明寺は、吳江縣二十三都に在り」と見ゆ。この詩は、圓明寺に山人の呂某を訪うて作つたのである。

【詩意】君が院をば出でず、多くの僧と共に、夏ごもりを致されるのは、まことに奇特の至。陰を投する竹に傍うて、長廊を巡れば遙けく、香ばしき花に掩はれて、佛殿の中には、人も居ない。飯は、齋の鉢より分けて貰ひ、おのが著した書は、經藏に寄贈して、函中に入れてある。茶會を畢つて歸れば、日すでに暮れ、西林の風に飄へる磬聲が、いと淋しげに聞こえるのみである。

答宗人廉夜飲王氏池亭見懷

宗人廉、夜、王氏の池亭に飲み、懷はるるに答ふ

遙聞池上酌涼夜失炎天。はるかに聞く、池上に酌むと、涼夜失炎の天。

酒碧傾當竹衣香坐近蓮。酒は碧に傾けて竹に當り、衣香はしく、坐して蓮に近し。

沿波人弄月翻樹鳥鳴煙。波に沿うて、人、月を弄し、樹に翻つて、鳥、煙に鳴く。

座上誰相憶唯應是惠連。座上、誰か相憶ふ、唯だ應に是れ惠連なるべし。

【字解】 一、失炎天、暑氣の無くなつた天候。二、惠連、南史謝方明傳に「子惠連、年十歲、能く文を屬す。族兄靈運、これを嘉賞して云ふ、驚軍ある毎に、惠連に對すれば、輒ち佳語を得と。かつて、永嘉の西堂に於て詩を思ひ、竟日就らず、忽ち夢に惠連を見る、即ち池塘生三春草を得、大に以て工と爲す」とある。

【題義】 宗人は同宗、即ち同姓の人、名を廉といふから、即ち高廉。その高廉が、ある夜、王氏の池亭に飲み、寄懷の作を寄せたから、これに答へたのである。

【詩意】 はるかに承れば、涼夜、暑熱の忽ち去りしに乘じて、王氏の池亭で會飲したとのことで、酒の碧なるは、竹に向つて之を酌むからであらうし、衣の香ばしきは、蓮の花に近く坐つて居たからであらう。波に沿うて、池上を徘徊しつつ、人が月を弄ぶと、木の上から翻つて、鳥が煙の中に鳴い

て居る。その座上、誰が最も予を憶つたかといへば、かの惠連に比すべき我が族弟、即ち足下であつたらう。

【餘論】 すでに他を以て惠連に比した上は、隱然、自ら靈運を以て居るので、作者に於ては、もとより當然の事であらう。この詩中、池上といひ、座上といひ、上の字の複して居るのは、まことに目障りである。

賦得蟬送別

蟬を賦し得て、別を送る

疏槐細柳中涼占一枝風。疏槐細柳の中、涼は占む一枝の風。

蛻出形猶弱驚飛響未終。蛻出して形なほ弱、驚飛して響未だ終らず。

雨來林館靜日下驛門空。雨、來つて林館靜に、日、下つて驛門空し。

離管尊前發淒涼調正同。離管、尊前に發す、淒涼調、正に同じ。

【字解】 一、林館、林中の亭館。二、離管、別離の際に吹く竹管といふので、即ち笛であらう。

【題義】 ある人の遠行を送るに際し、蟬を詠じて、餞別の意を寓したのである。

五言律詩 答宗人廉夜飲王氏池亭見懷 賦得蟬送別

【詩意】槐葉疏に柳樹密なる中に在つて、蟬は、涼しげに枝に止まつて、折から吹く風を獨占して居る。この蟬は、やつと脱け出たばかりで、體も尙ほ弱弱しく、驚いて飛ぶと、いつまでも、鳴く聲を止めない。雨が降つて林中の亭館靜なる時、夕日が沈んで驛門に人なき折から、蟬の最も得意な時分である。ここに、君の行を送つて、尊前に笛を吹くものがあつたが、その淒涼の調は、さながら、この蟬の聲に似て居る様である。

何隱君小墅

何隱君の小墅

移家營別墅。一徑竹扉開。

家を移して別墅を營み、一徑、竹扉開く。

泉滿疏渠放。花多借地栽。

泉は滿ち、渠を疏して放ち、花は多く、地を借りて栽う。

壁間田器挂。窓裏浦帆來。

壁間に田器挂り、窓裏に浦帆來る。

自戀幽居樂。誰言是棄材。

自ら戀ふ幽居の樂、誰か言ふ、是れ棄材。

【字解】(一) 疏渠、溝渠を疏通させる。(二) 田器、すき鍬の類。(三) 浦帆、浦上の行舟。

【題義】小墅は、ささやかな別莊。何隱君は、名字閱歷ともに不詳。

【詩意】君は、家を移して、専ら別莊の方を経營せられ、一徑をたどり行くと、どん詰まりに、竹の扉が開いて居る。泉の滿ち湛へた時は、溝渠を疏通して之を放出し、花は多すぎる位で、附近の土地を借りて栽植して居る、壁間には、犁や鍬が掛けてあつて、その本業を知るべく、窓の中には、浦上の帆影が見えて、景色が頗る面白い。君は、自ら幽居の樂を眷戀して此に居るといふが、いかにも御尤もで、誰も役に立たぬ人物だといつて、けなすものはない。

【餘論】後聯は、小墅内外の景を分敘して、さながら觀るが如くである。

贈張明府

張明府に贈る

聞道彈琴處。門前柳帶沙。

聞くならく、琴を彈する處、門前、柳、沙を帶ぶと。

海珍通估市。湖稅減漁家。

海珍、估市を通じ、湖稅、漁家に減す。

暮港迷荷葉。秋田間豆花。

暮港、荷葉を迷ひ、秋田、豆花を間る。

亂來無此地。君政亦堪誇。

亂來、この地なし、君の政、亦た誇るに堪へたり。

【字解】(一) 彈琴、宓子賤の故事、前に數ば見えて居たが、呂氏春秋に「宓子賤、琴を彈じて單父を治む」とある。(二) 海珍、海外の珍貨。(三) 湖稅、湖上の漁業稅。(四) 暮港、港は入江。(五) 間豆花、まじる、田の中處處に種点である。

【題義】明府は太守の尊稱。この詩は、太守張某に贈つたので、詩で見ると、その任地は、兩廣邊であるらしい。

【詩意】承はれば、君は琴を弾じて、領内自然に治まり、お宅の門前には、柳が沙を帯び、水に傍うて種ゑてあるとのことである。海外の珍貨は、商人の市場に引きも切らず出で、湖上の漁業税は、漁家の爲を思つて、大分減少された。入江の夕ぐれには、蓮の葉が一ぱいの爲に、望眼將に迷はむとし、秋の畑には、處處に豆の花が咲いて居る。一たび争亂を経たる後、天下の廣きも、この地の如き安寧で住み善い處は少く、君の政績は、まさしく世に誇るべきものである。

【餘論】湖税減漁家は、湖税が除り甚しい爲に、漁家が減少したといふのではなく、從來高かつたのを漁家の爲に減少したと見れば、意義不通となるが、その曖昧にして語法の好ましからぬことは、辨を俟たぬ。

送唐博士肅移家構李

唐博士肅の家を構李に移すを送る

楊柳發初齊。春陰廢苑西。

楊柳、發して初めて齊しく、春陰廢苑の西。

故人乘醉別。新鳥傍愁啼。

故人、酔に乗じて別れ、新鳥、愁に傍うて啼く。

舟重全家去。詩多一路題。

舟は重くして全家去り、詩は多くして一路題す。

杏花開北郭。誰復共招攜。

杏花、北郭に開いて、誰か復た共に招攜。

【字解】「初齊」出揃ふ。

【題義】列朝詩集に「唐肅字は處敬、會稽の人、至正己亥、江浙の郷試に中りて、黃岡書院山長を授けられ、嘉興儒學正に轉ず。洪武の初、召されて禮樂書を修し、應奉翰林文學兼國史院編修官に擢んでられしが、疾んで朝を失ひしを以て、罷めて歸里し、佃濠の翟相山に謫せられ、歲餘にして卒す」とある。すると、この詩は、青邱が南京に居た頃の作で、唐肅の官を罷めて歸里するを送つたのである。【詩意】柳の葉は、初めて出そろひ、廢苑のあたりは、曇つて、ぼんやりして居る。わが友は、酔に乗じて別れ去り、春の鳥は、わが愁に傍うて啼いて居る。一家の眷屬を載せた爲に、舟は重げに見え、途すがら留題して行くから、詩は澤山出来るであらう。さはれ、君去りし後は、北郭に杏花開くとともに、誰と共に相攜へて游賞すべきか。それを思ふと、まことに、物さびしく遺憾の至である。

贈妓

妓に贈る

樂籍小名收。侯家舊主謳。

樂籍、小名收まる、侯家の舊主謳。

笑能撩客喜，醉肯逐人留。
蝶識薰香氣，鶯慙度曲喉。
更憐諳酒令，少日住揚州。

笑へば能く客を撩して喜ばしめ、酔ふも肯て人を逐うて」
蝶は識る薰香の氣、鶯は慙づ度曲の喉。
更に憐む、酒令を諳んずるを、少日、揚州に住す。

【字解】 蝶、流の名籍、收登開談に「元和中、成都の樂籍、薛濤といふもの、篇草を善くし、辭辯を足る」とある。【三】小名、即ち謠名、宋の王銍に侍兒小名録がある。【三】主韻、音頭取り、漢書衛皇后傳に「后、字は子夫、平陽の主韻者たり。すでに飲む、帝、ひとり子夫を悦び、遂に宮に入る」とある。【四】蝶、開元遺事に「都下の名妓楚蓮香、國色無雙、出入ことに蜂蝶相隨ふ、その香を慕ふを以てなり」とある。【五】酒令、實退録に「後漢の賈逵、かつて酒令を作る。唐、最も盛なり。本朝、歐公、九射格を作り、勝負を分たす。酒を飲むもの、皆適然に出づ。陳述古、亦た嘗て酒令を作る。近ごろ、李如圭、漢酒令を作る。今、館閣小酒令一卷あり」と見ゆ。多く謎の類なもので、これを言ひ中てぬものは、罰として飲ませられる。【六】揚州、杜牧の詩に、十年一覺揚州夢、贏得青樓薄倖名とあつて、唐の中葉に於て、揚州は、天下第一風流の勝區であつた。

【題義】 この詩は、ある席上に於て、侍坐の妓に贈つたのである。

【詩意】 今こそ、妓籍に藝名を掲げて居るが、もとは、侯家の音頭取りであつた。その笑ふ時は、客の心を撩亂して喜ばしめ、酔つた處で、人に口説かれて留宿することを肯んせず、生來の堅造として知られて居る。蝶は、衣の焚き物の香を識別して、その後隨ひ、鶯さへも、歌ふ喉のすぐれたるに對して、慙ち入るばかり。その上、酒令を諳記して居て、取り持ちが上手であるが、それも其善、若

い時、揚州に住んで居て、嬌名を一時に擅にしたのである。

送顧倅之錢塘

顧倅の錢塘に之くを送る

之官即勝游，送別漫多愁。
草色荒宮燕，槐陰遠驛鶻。
湖通朝汲井，潮動夜眠樓。
早向臨平過，荷花已欲秋。

官に之くは即ち勝游、送別、漫に多愁。
草色、荒宮の燕、槐陰、遠驛の鶻。
湖は通じて、朝に井を汲み、潮は動いて、夜、樓に眠る。
早く臨平に向つて過ぎよ、荷花、すでに秋ならむと欲す。

【字解】 一、之官、赴任する。二、槐陰、槐は多く街路の並木として種々である。三、遠驛、遠い驛に向つて馳せる馬。四、臨平、杭州府志に「臨平山は、仁和縣に屬す」とある。

【題義】 倅は縣官の次役。この詩は、縣倅顧某の錢塘に赴任を送つたのである。

【詩意】 赴任することが、取りも直さず勝游であつて、君の得意は、さることながら、ここに、その行を送るに際しては、自然愁に堪へられない。草色青青として、燕は荒宮に舞ひ、槐陰漠漠として、馬は遠驛に向つて行く。任地の錢塘は、西湖にも海にも近い處、朝早く井水を汲むと、井は西湖に通じて居るし、夜遅く樓上に眠ると、樓は潮聲に動かされる。なるべく早く臨平を過ぎるが善いので、

名だたる運は、丁度今が見頃であらう。

【餘論】後聯は、錢塘の風土を寫して、極めて的確である。

答高廉同飲後見寄

高廉の同飲後、寄せらるるに答ふ

竹林消暑宴客散獨歸時

竹林消暑の宴、客は散ず獨歸の時。

愁記歡餘別醒慙醉後詩

愁へて記す歡餘の別、醒めて慙づ醉後の詩。

蟬催斜景急鳥度廣川遲

蟬は斜景を催して急、鳥は廣川を度つて遲し。

何事聞鐘處勞君尙遠思

何事ぞ鐘を聞くの處、君を勞して尙ほ遠く思はしむ。

【字解】【一】消暑宴、暑氣拂ひの酒宴。【二】斜景、景は日影、斜陽に同じ。【三】廣川、川は、必ずしも江河ではなく、平原をいふ。

【題義】高廉は、即ち前に一寸見えた宗人廉である。この詩は、高廉と會飲せし後、廉から詩を寄せて來たから、これに答へたのである。

【詩意】竹林中に暑氣拂ひの酒宴を催し、やがて、坐客皆散せしに因つて、自分も一人で歸つて來た。しかし折角歡を盡せし後に別れるもつらく、醒めての後に醉後の詩を見ると、出鱈目で、全く成つて

居らぬが愧かしい。歸る途すがら、蟬は急に嘶いて、斜陽を促すが如く、鳥は廣い平原を度つて、歸り行くのも早くはない。夕ぐれの鐘を聞いて居る處へ、君が遠思を勞して、態態寄懐の詩を寄せられた、その御志は、まことに辱い。

沈徵士鉉野亭

沈徵士鉉の野亭

清時猶在野獨臥見高情

清時、猶ほ野に在り、獨臥、高情を見る。

移艇聞煙唱鈎簾看雨耕

艇を移して煙唱を聞き、簾を鈎して雨耕を看る。

江晴雙鶴下樹晚一牛鳴

江は晴れて雙鶴下り、樹は晩にして一牛鳴く。

回首徒相憶柴車不入城

首を回らして徒に相憶ふ、柴車、城に入らず。

【字解】【一】清時、太平の世。【二】煙唱、煙中の漁唱、即ち漁歌。【三】雙鶴、鶴は、このとり。【四】柴車、高士傳に「何賦、かつて或屬を賦み、柴車に乗ず」とあつて、粗末なる車。

【題義】徵士沈鉉は、前に卷六、送沈徵士鉉歸海上の題下に注して置いたが、その中に「世郊外に居り、室を築いて野亭といふ」とあるから、この野亭は、即ちそれで、あまり平凡ではあるが、居室の號と見える。この詩は、即ち沈鉉の野亭に寄題したのである。

【詩意】この太平の世に際し、君は依然として野に居り、悠悠獨臥、その高情は、明かに知られる。そこで閒なる儘、小舟を移して煙中の漁歌を聞き、簾を捲き上げて雨裏に耕す有様を見て居る。江天晴れたる時は、雙鶴下り來り、樹色たそがるる折から、一牛が地に鳴いて居る。おもへば、日夕徒に相憶ふだけで、君は柴車に乗つて城中に入ることなき爲め、滅多に、御目にかかれぬのは残念である。

題醫師王隱君墓表後

醫師王隱君の墓表の後に題す

孤舟別楚水。客鬢已蒼蒼。

孤舟、楚水に別る、客鬢、すでに蒼蒼。

竟賦招魂些。虛傳續命方。

竟に賦す招魂の些、虚しく傳ふ續命の方。

悲風柏隴小。積雨藥園荒。

悲風、柏隴小、積雨、藥園荒る。

生滅雖能悟。看碑亦感傷。

生滅、能く悟ると雖も、碑を看て亦た感傷。

【字解】(一) 蒼蒼、ここでは青いことではなく、古色蒼然の蒼で、色を失ふ、灰色になる、つまり白いこと。(二) 招魂些、些は楚辭に見えた語助で、ここでは楚辭といふ義。(三) 續命方、命を延ばす藥方。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】むかし、揚子江上に孤舟を乗り出して、君に別れし後、予は、客鬢すでに白く、大分、年が寄つた。料らざりき、ここに、君の死を弔うて、招魂の楚辭を賦せむとは。そして、君の家には、續命の藥方があつたといふが、かうなつて見ると、何の効果もなかつたものと思はれる。今しも、悲風吹き渡つて、柏樹茂れる墓は、極めて小さく、積雨の爲に、折角の藥園も、荒れはてて仕舞つた。生滅常ならざること、十分悟り切つて居るが、碑を見ると、矢張、感傷に堪へられない。

贈朱山人

朱山人に贈る

老來嫌衆累。依澗獨開房。

老來、衆累を嫌ひ、澗に依つて、ひとり房を開く。

積雨苔生桁。廻風葉滿牀。

積雨、苔、桁に生じ、廻風、葉、牀に滿つ。

學僧持淨律。避客錄奇方。

僧を學んで淨律を持し、客を避けて奇方を録す。

若問塵中事。無聞不是忘。

もし塵中の事を問はば、無聞、これ忘ならず。

【字解】(一) 衆累、多くの俗累。(二) 苔生桁、桁は衣桁、古樂府東門行に「還視桁上無懸衣」とある。(三) 淨律、清淨なる戒律、佛燈錄に「無上菩提、身に被るを願となし、口に説くを法となし、心に行ふを律となす」とあり、指月錄に淨律淨心、心即是佛とある。(四) 奇方、珍らしき藥方、唐書陸贄傳贊に「贄、すでに荒遠に放たる、常に戸を闔ち、人、その面を識らず、古今集驗方五十

五言律詩 題醫師王隱君墓表後 贈朱山人

詩を爲り、以て郷人に示すと云ふとある。

【題義】説明に及ばぬ。但し、山人の名字閱歴等は不詳。

【詩意】君は、老來、さまざまの世上の俗累が、うるさいといつて、洞に傍うて、ひとり山房を開かれた。長雨の折など、昔が衣桁の上を生じ、颯風一たび過ぐれば、落葉は吟牀に滿つるばかり。又僧を學んで、清淨なる戒律を固守し、客を避けて、珍らしい藥方を頻りに蒐録して居る。もし、塵中の事を問うたらば、敢て忘れたではないが、この頃は、丸で耳にせぬから、何も知らないといふはれるだらう。

【餘論】前聯は工警、巧に洞上の隱棲を寫して居る。

谿上

谿上

秋色共谿長。游人語笑涼。

秋色、谿と共に長く、游人、語笑涼し。

萍開天倒影。蓮墮水流香。

萍は開いて、天、影を倒にし、蓮は墮ちて、水、香を流す。

魚留和星澹。禽置帶雨張。

魚留、星に和して澹き、禽置、雨を帯びて張る。

從今搖桂櫂。不必問瀟湘。

今より桂櫂を搖かし、必ずしも瀟湘を問はず。

【字解】【一】語笑、笑語に同じ。【二】蓮墮、蓮の花が落ちる。【三】魚留、魚は竹で造つた捕魚の具。【四】禽置、鳥を捕ふる網。【五】桂櫂、楚辭の九歌に桂櫂兮蘭楫とあつて、香木で造つた櫂。

【題義】ただ谿上では分からねぬが、橋李詩繫には、查家蕩と題し、蕩は嘉善縣北に在つて藕花が多いとのことである。

【詩意】秋色は、谿水と共に長く、游人の笑語は、涼しげに聞こえる。萍草が開くと、天は影を倒にして池中に映じ、蓮の花が落ちると、流るる水も、香を帯べるが如くである。星あかりの下に、魚の網を引き出して見たり、雨の中に、鳥を捕ふる網を張つたりして居る。今より、桂櫂を用意して漕ぎ出すと、又一段の樂で、必ずしも、瀟湘を問ふには及ばない。

次韻楊儀曹雨中

楊儀曹の雨中に次韻す

雨中池閣曉。清簾薦文漪。

雨中池閣の曉、清簾、薦文漪たり。

陰恐晴期遠。寒疑暑候遲。

陰は恐る晴期の遠きを、寒は疑ふ暑候の遲きを。

荷高擎欲折。柳重舞難敲。

荷は高くして擎ぐれば折れむと欲し、柳は重くして舞へ

應阻陪高詠。開簾看散絲。

應に高詠に陪するを阻つなるべし、簾を開いて散絲を看る。

【字解】【一】 葛文瀾 竹むしろの上の斑紋が漣波の様である。【二】 陪高詠 吟席に陪する。【三】 散絲 雨の降るを形容して云ふ。

【題義】 唐書百官志に「武德三年、儀曹郎を改めて禮部郎中といふ」とあるから、儀曹は即ち禮部郎中の古稱。その職に居た楊某が雨中の詩を寄せられたから、次韻して之に答へたのである。

【詩意】 曉早く、雨中の池閣に横臥して居ると、竹むしろの斑紋は、漣波の如く、さも涼しさうに見える。しかし、この曇天は、容易に晴れさうもなく、あまり寒いので、夏の季候が遅いのかと疑ふばかり。雨を帯びては、蓮の葉の高きは、撃げたるまま折れさうであるし、柳の葉は重たげであつて、舞ふ時は、直立して居られぬ様である。どうか、吟席に陪したいと思つて居るものの、簾を開いて、細雨絲を散ずるが如く降り來るを見れば、これに妨げられて、まことに、不本意の至である。

寄錢塘諸故人

錢塘の諸故人に寄す

年少客名都。狂游每共呼。

年少、名都に客たり、狂游、毎に共に呼ぶ。

荷深箏在舫。竹靜矢鳴壺。

荷深くして、箏、舫に在り、竹、靜にして、矢、壺に鳴る。

明月潮千里。殘陽雨半湖。

明月、潮千里、殘陽、雨半湖。

故人能念否。歡意近來無。

故人能く念ふや否や、歡意近來無し。

【字解】【一】 名都 即ち錢塘、もと南宋の都たりしが故に云ふ。【二】 矢鳴壺 これは投壺の戲で、遠く離れて矢を壺中に投げ入れ、その多寡に因つて、勝負を論ぶのである。

【題義】 説明に及ばぬ。青邱は、吳越の游を爲せし時、錢塘に立ち寄つて淹留したことがあるので、その折の知人輩に寄せたのである。

【詩意】 さきに、年少の時、錢塘に客となり、日夕狂游、毎に諸君と共に誘ひ合つて居た。蓮の花の深い處に、游山舟を漕ぎ入れて、箏を彈せしめ、竹影靜かなる邊に於ては、投壺の遊戲を試みたことがある。明月の下には、千里の潮が押し寄せ來り、夕陽の中には、半湖の雨が未だ晴れずに居た。予は、近ごろ、格別面白くもなくて、いたく閉口して居る折から、舊知の諸君は、幸に予を念つて居て呉れるか如何。

送烏程馮明府

烏程の馮明府を送る

青山若下南。一騎入晴嵐。

青山、若下の南、一騎、晴嵐に入る。

縣治琴聲古。泉香酒味甘。

縣、治まつて琴聲古く、泉、香ばしくして酒味甘し。

竹欄春護鴨。葦箔夏分蠶。竹欄、春、鴨を護し、葦箔、夏、蠶を分つ。
大小馮君後。傳家爾最堪。大小馮君の後、傳家、爾、最も堪へたり。

【字解】(一) 若下。一統志に「湖州長興に上若下水あり」と見ゆ。(二) 晴嵐。嵐は山氣。(三) 縣治琴聲古。宓子賤の故事、前
に贈張明府の詩中にも見ゆ。(四) 酒味甘。輿地志に「吳興烏程縣、酒、名あり」と見え、郡國志に「古しへ、烏巾の程林、こ
に居り、能く酒を醸し、因つて、以て酒に名づく」とある。(五) 葦箔。葦を編んで簾の如くし、その上で蠶を飼ふ。馬祖常の詩に葦
門仍葦箔とある。(六) 大小馮君。漢書に「馮野王、その弟立と皆奉世の子なり。立、五原太守となり、西河、上都に徙る、治行、野
王と相似たり、民、これを歌うて曰く、大馮君。小馮君。兄弟繼踵相因循。聰明賢知惠吏民。政如三魯循德化鈞。周公康叔猶二君。」
とある。

【題義】この詩は、烏程の太守馮某の赴任を送つたのである。

【詩意】下若水の南なる青山の麓を過ぎて、唯だ一騎、晴れたる山氣の中に入り入つて赴任される。縣
は治まつて、琴聲、古調を弄し、泉は香ばしく、従つて、それで醸した酒は、極めて味が善い。春、
竹の欄をしつらへて鴨を飼ひ、夏、葦の簾を編んで、その上で蠶を養ふ。むかし、大馮君・小馮君と
いふ賢守があつたが、傳家の吏治は、君だけには屹度出來ると思ふので、何分しつかりと遣つて貰ひ
たい。

【餘論】大小馮君は、千年も前で、あまり懸け離れて居るが、同姓ではあるし、太守として令名もあ

つたし、先づ以て切實であらう。

喜了上人見過

了上人の過ぎらるるを喜ぶ

幾時西澗別。忽喜過家園。幾時か西澗に別る、忽ち喜ぶ家園を過ぐるを。
澹泊林間供。虛空世外言。澹泊林間の供、虚空世外の言。
豆花零晚架。瓜蔓絡秋垣。豆花、晚架に零ち、瓜蔓、秋垣に絡ふ。
莫厭頻相顧。衡門久息喧。厭ふ莫れ、頻りに相顧みるを、衡門、久しく喧を息む。

【字解】(一) 幾時。何時の義。(二) 家園。青邱の郷里を指す。(三) 林間供。供は飲食。(四) 晚架。架は棚。(五) 息喧。
喧は騒がしきこと、世と違さがる。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】西澗に於て上人と別れたのは、何時であつたか、はつきり覺えても居らぬが、今日、ここ予
の郷里を訪問されたのは、まことに喜ばしい。何分、林間の住居で、礙な物も差上げられないが、
世外の話は虚空であつて、格別、毒にもならない。頃しも秋、豆の花は古りたる棚より落ち、瓜の蔓
は、破れ垣に巻きついて居る。どうか足繁く來て御貰ひしたいので、予は、衡門の中に在つて、久し

く世事を忘れ、まことに、寂寥の思に堪へられない。

【餘論】金檀注本には、第七句に頻相過とあつて、過の字が第二句、過家園の過と重複する處から、ここでは、大全集に據つて、前に掲げた通り、頻相顧と訂正して置いた。

病目

目を病む

閉目洗黄蓮。深窓坐兀然。

目を閉じて、黄蓮に洗ひ、深窓、坐して兀然。

未忘聽鳥興。暫絶看花縁。

未だ鳥を聴くの興を忘れず、暫く絶つ花を看るの縁。

問女知簷日。瞋奴畏竈煙。

女に問うて簷日を知り、奴を瞋つて竈煙を畏る。

願因無見處。得證定心禪。

願はくは見る處なきに因つて、定心の禪を證するを得む。

【字解】【一】黄蓮、藥の名、本草綱目に「黄蓮は、主として熱氣を治す、目痛み、骨傷つくも、涙出でて目を明かにす」とある。

【三】兀然、獨坐の貌。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】この頃、目を煩つて居る處から、黄蓮を煎じた汁で、雙眼を閉じたまま之を洗ひ、深窓の下に、何も爲すことなく、つくねんとして兀坐し、耳は確かであるから、鳥聲を聴いて打興することは

出来るが、しばらくは、花を看ることも出来ず、娘に問うて、檐の日影の移れるを知り、家僕を叱りつけて、竈の煙が燻つては困まるといつた。全く物を見ない上は、禪でいふ定心の域に到達したいものだと思つて居る。

病目不飲

目を病みて飲まず

愚目未全明。醫教謝麴生。

目を患へて、未だ全く明かならず、醫は麴生を謝せしむ。

暫從彭澤止。恐學左邱盲。

暫く彭澤の止むるに従せ、左邱の盲を學ばむことを恐る。

壁下蘭尊掩。林間藥臼鳴。

壁下、蘭尊掩ひ、林間、藥臼鳴る。

坐聽連日雨。何物慰閒情。

坐して聴く連日の雨、何物か閒情を慰めむ。

【字解】【一】麴生、酒を云ふ。開天傳信記に「葉法善、玄真觀に居る、かつて、朝客十餘人あり、これに詣る。滿坐酒を思ふ。忽ち一人あり、門を叩いて云ふ、麴秀才と。傲視して直に入る。法善、ひそかに小劍を以て之を撃てば、手に墮つて元を喪ひ、階下に墜ち、化して瓶榼となる。一坐驚いて、遂に其處を觀れば、乃ち盈瓶の醴醢なり、成な大に笑つて之を飲み、酔うて、その瓶を搯して曰く、麴生の風味、忘るべからざるなり」とある。酒は、元と麴より造るから麴生といつたのである。【二】彭澤止、陶淵明に止酒の詩あるより云ふ。【三】左邱盲、史記太史公自序に「左邱、明を失ひ、厥れ國語あり」と見ゆ。【四】蘭尊、木蘭の材で造つた酒樽、或は蘭の字を唯だの形容と見ても宜しい。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】目を煩つて、まだ全癒せぬ處から、醫者は、酒を禁せよといった。そこで、しばらく陶彭澤が酒を止めた真似をしたが、左邱明の如く盲目に成つては困まるからである。蘭尊は、壁下に在つて、蓋をした儘であるし、林間に於ては、白で藥を搗く聲が聞こえる。つくねんと坐つた儘、連日降りつづく雨の聲を聞いて居ると、無聊禁せず、しかも、この閉情を慰める物の無いのは、まことに閉口である。

賦得蟹送人之官

蟹を賦し得て、人の官に之くを送る

吐沫亂珠流。無腸豈識愁。

沫を吐けば、亂珠流れ、無腸、豈に愁を識らむや。

香宜橙實晚。肥過稻花秋。

香は橙實の晩に宜しく、肥は稻花の秋を過ぐ。

出籩來深浦。隨燈聚遠洲。

籩を出でて深浦に來り、燈に隨つて遠洲に聚まる。

郡齋初退食。可怕有監州。

郡齋、はじめて退食、怕るべし監州あるを。

【字解】(一) 無腸 抱朴子に「山中辰日、無腸公子と稱するものは蟹なり」とある。(二) 橙實晚 劉克莊の詩に香切橙實蟹正肥とあつて、橙實は蟹に添へることになつて居る。即ち、その醃汁を懸けて、味を増す爲めであらう。(三) 稻花秋 陸龜蒙の蟹志に

「江東の人云ふ、稻の登るや、率れ一籠を執り、以て其魁を朝し、然る後、その之くところに従ひ、蚤夜勞瘁、江を指して奔る。漁者、練漚、その流を承けて之を隙る、名づけて蟹漚といふ」とある。(四) 出籩 籩は上に見えた蟹籠。(五) 隨燈 本草に「蟹、性、明に走る」とある。(六) 監州 通判を云ふ。歸田錄に「國初、通判、常に知州と權を争ふ。毎に云ふ、我は是れ郡監と。錢昆といふものあり、餘杭の人、浙人、蟹を嗜む、常に外に補せられむことを求む。郡人、その欲するところを問ふ、曰く、但た螃蟹あつて、通判なき處を得ば可なりと。今に至つて、人、以て口實となす」とある。

【題義】説明に及ばぬ。但し、その人は、太守として何處ぞへ赴任するのであらう。

【詩意】蟹が沫を吐くと、珠玉紛亂して流れる様に見えるが、もとより心腸が無いから、人情を解せず、従つて、愁とは何等の關係もない。その蟹の肉の香を帯びたるは、殊に橙の實の熟する頃に宜しく、その肥えるのは、稻花の秋を過ぎてからである。籩から脱け出でて深い入江に來ても、燈光に隨つて、遠い沙洲の上を集まり、容易に人に捕獲されて仕舞ふ。君も退廳して、官舎に閑居する時、定めて、この蟹を食ふであらうが、むかしの知州輩で、蟹は善いが通判は氣に食はぬといった人もある通り、通判に對しては、一目置いて、平生、これを怕れて居ることであらう。

江上早發

江上早發

蒼蒼汀霧起。何處望高城。

蒼蒼として汀霧起り、何の處にか高城を望まむ。

五言律詩 賦得蟹送人之官 江上早發

游子曉初發。居人寒未耕。游子、曉、はじめて發し、居人、寒、未だ耕さず。
 犬鳴林月落。魚躍浦風生。犬は鳴いて林月落ち、魚は躍つて浦風生ず。
 已有先行者。煙中聞棹聲。すでに先行の者あり、煙中、棹聲を聞く。

【字解】(一) 蒼蒼、このも青い意味ではなくて白色。(二) 高城、城は城壁。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】汀の霧は、白く立ちこめ、高い城壁も、何處かと思ふ位。旅客は、曉、すでに出發したが、居民は、寒さに恐れて、まだ耕作に出て来ない。犬が鳴いて、殘月、林外に落ち、魚が躍ると、微風、浦上に生ずる。但し、吾よりも早く出かけた人もあるらしく、煙の中で棹の聲が聞こえて居る。

【餘論】後半四句、一氣呵成、そして、頸聯の對仗も、穩安にして、且つ切當である。これは、寧ろ此四句だけを存して五絶にした方が善かつたかも知れないので、まして、第一句の汀霧は、結句の煙中と衝突する傾向がある。

客舍喜姪庸至

客舍、姪庸の至るを喜ぶ

客裏逢人喜。相過況阿宜。客裏、人に逢うて喜ぶ、相過ぐ、況んや阿宜なるをや。
 遠游驚歲晚。多難惜門衰。遠游、歲晚に驚き、多難、門の衰へたるを惜む。
 帆落江橋近。鐘來野店遲。帆、落ちて江橋近く、鐘、來つて野店遅し。
 一杯燈下語。渾似在家時。一杯、燈下に語る、すべて家に在るの時に似たり。

【字解】(一) 阿宜、杜牧の姪の小字を阿宜といつた。(二) 門衰、家門が衰微する。(三) 帆落、帆を卸して仕舞ふ。

【題義】姪といふからには、兄の子で、現に青邱には二兄があつて、その一は、吳の張士誠亡びし後、遠地に移されたことが、前に見えて居て、或は其方の兄の子かと思はれる。これは、多分、青邱が南京に居た頃の作であらう。

【詩意】客中岑寂、人に逢ふことは、極めて嬉しく、まして、肉身の甥に於ては、猶更の事である。われは、遠游して、歳の將に暮れむとするに驚き、不幸つづきで、家門の衰微したのは、まことに、殘念である。汝が此に来る途すがら、帆を卸せば、江橋すでに近く、鐘が聞こえらると、野店に日が暮れかかつたであらう。今しも、燈下に酒を傾けつつ、つきぬ話をして居ると、丸で家に居た時と同じ様な氣がする。

哭周記室

周記室を哭す

萬里一羈臣。悲歌楚水春。

萬里一羈臣。悲歌楚水の春。

漫期重會面。竟作永傷神。

漫に期す、重ねて會面せむことを、竟に永く傷神すること

主祭唯孤姪。收詩有故人。

祭を主るは、唯だ孤姪、詩を收むる、故人あり。

獨揮聞笛淚。斜日下西鄰。

獨り揮ふ笛を聞くの淚、斜日、西鄰を下る。

【字解】(一) 羈臣 前に數ば見ゆ、羈旅の臣。遠く家郷を離れて仕官する人。(二) 收詩 遺稿の詩を取り收めて整理する。(三) 獨揮 前に卷四、魏使君の五古中にも引いたが、晉書向秀傳に「秀、山陽の舊墟を經、鄰人、笛を吹くものあり、聲を發すること寡亮、秀、乃ち思舊賦を作る」とある。

【題義】 説明に及ばぬ。但し、周記室は、前に數ば見えて居た青邱の熟友である。

【詩意】 君は、萬里の遠國から來た羈旅の臣で、揚子江岸の春を悲歌し、生涯、不得意を免れなかつた。さきには、いづれ重ねて逢へるだらうと思つて居た處が、料らざりき、凶音忽ち至り、永く傷心せむとは。君の歿後、嗣子なく、祭を主るは、唯だ一人の甥であつたが、遺詩を取りまとめるに、然るべき友人のあつたのは、まだしも幸である。ここに、笛を聞いて、われ獨り涙を揮へば、折から、夕日が西鄰に下つて、愈よ物さびしきを覺えた。

【餘論】 後聯は、哀痛の極、詞客身後の寂寞を道ひ得て、復た餘蘊なきものである。

過永定廢寺

永定の廢寺を過ぐ

亂後僧何去。門閉落葉時。

亂後、僧いづくにか去る、門は閉なり落葉の時。

畫昏秋蠹老。齋斷午禽飢。

畫昏くして秋蠹老い、齋斷えて午禽飢う。

罷說傳心法。猶看賜額碑。

傳心の法を説くを罷め、猶ほ看る賜額の碑。

不知興壞理。來此豈無悲。

興壞の理を知らず、ここに來る、豈に悲なからむや。

【字解】(一) 畫昏 壁畫が古くなつて、ぼんやりして來た。(二) 秋蠹 蠹は紙蟲の類。(三) 齋斷 齋は僧食、とき。(四) 傳心法 心から心に傳へる妙法、即ち佛法。

【題義】 姑蘇志に「永定教寺は、吳江縣荒浦村に在り」と見え、この詩は、その寺の荒廢に歸した實況を詠じたのである。

【詩意】 戰亂の後、寺中の僧侶は、何處へか散り失せて、さしもの名利も、今は無住となり、折から、落葉する時に際して、山門の邊、いとも靜にして、音なふ人もない。壁畫は年を経て、模糊に歸し、秋蠹も、老いては、これを食まうともせず、僧食を設けず、従つて殘飯を投げ與へることもないから、

畫見る鳥も、飢ゑて居る様である。ここに在つて、妙法を説き出づる人なきも、むかし、教額を賜はつた旨を記した石碑だけは、残つて居る。予は、興廢の理を知らざれども、眼前に、この寺の荒れはてた模様を見ると、自然に悲しく成つて来る。

楓橋送丁鳳

楓橋、丁鳳を送る

紅葉寺前橋。停君晚去橈。

紅葉寺前の橋、君が晩去の橈を停む。

を計らず。

醉應忘世難。歸不計程遙。

醉うては、應に世難を忘るべく、歸るには、程の遙なる

山隱初沈日。風催欲上潮。

山に隠れて初めて日を沈め、風催して潮を上らむと欲す。

離魂來此處。還似灞陵銷。

離魂、この處に来る、還た灞陵に銷ゆるに似たり。

【字解】(一) 寺前橋、寺は即ち寒山寺。(二) 晚去橈、日暮に出發する舟。(三) 世難、浮世の多難なること。(四) 灞陵、長

安の東北に灞水があつて、そこに架せるを灞橋といひ、橋邊には柳多く、唐代、人を送る時には、ここに來て柳を折るを例とした。その近傍に、漢の文帝の陵があるから、ここには灞陵といつたので、實は、灞橋と云つた方が通りが善いが、前に寺前橋といつて、橋の字を使つたから、止むなく、灞陵としたのであらう。

【題義】楓橋は、唐の張繼が舟を泊して、例の月落烏啼の詩を作つた處で、その近傍なる寒山寺と共に

爾後甚だ著名である。地は、蘇州閶門の西、日本里數で一里ばかりの處に當り、むかし、旅客は城内から漕ぎ出して、ここを通つたので、その川は、即ち運河の支流である。この詩は、楓橋まで態態跡を付けて來て、丁鳳の歸國を送つたのである。但し、鳳の字並に閱歷等は不詳。

【詩意】ここに、紅葉に埋められた寒山寺の前なる楓橋の邊に來り、日暮、將に發程せむとする君の舟を止めて、聊か別意を表した。醉中には、浮世の多難を忘るべきも、君の歸るは、程の遠きを計らず、随分長旅である。見わたせば、夕日は山に隠れて、初めて沈み、潮は風に促されて、さし始めた。ここに來て別を爲す上は、自然、銷魂を禁せず、さながら、古しへの灞陵に似て居る様である。

盜發漢侍中許臧墓

盜、漢侍中許臧の墓を發く

古塚竟誰穿。虛傳鋼最堅。

古塚、竟に誰か穿つ、虚しく傳ふ、鋼、最も堅きを。

玉魚宵已出。石獸曉猶眠。

玉魚、宵、すでに出で、石獸、曉、猶ほ眠る。

長夜俄看日。幽臺不掩泉。

長夜、俄に日を見るも、幽臺、泉を掩はず。

須知摸金者。亦到漢陵前。

須らく知るべし、摸金の者、亦た漢陵の前に到りしを。

【字解】(一) 銅最堅 銅は封銅。(二) 玉魚 玉で魚の形を造つたので、明器と同じく棺中に入れて埋葬する。杜甫の詩に昔日玉魚蒙葬地、早時金盤出人間とある。(三) 掘窟 地下を云ふ。(四) 摸金者 陳琳が袁紹の爲に豫州に據する文に「操、又特二發邱中郎將・摸金校尉を置き、過ぐるるところ窟突、賊として露はれざるはなし」とある。すると、摸金者は即ち摸金校尉、陵墓の發掘を其職として居たらしい。

【題義】許儼の墓は、題下の原注に「宜興に在り」と記してある。それから、周必大の游山集に「周橋を渡つて、後漢許太尉儼の墓を訪ふ。古翁仲・龜趺あり、大墩相連り、漸く邑人に掘掘せらる」とあるを見れば、早くから發掘されて居たので、ここに謂ふのは、最近、大仕掛に遣らしたものと思はれる。

【詩意】この古塚は、畢竟、誰が發掘したのか、封銅は至極堅固といふ評判であつたが、すツかり、裏切られた譯である。棺中に收めてあつた玉魚は、夜、すでに取り出され、石獸のみは、曉になつても、平氣で眠つて居る。すでに、發かれたのであるから、墓中では、長夜が明けて、俄に日を見た様な譯であるが、どうせ、地下であつて、黃泉を掩ひ塞ぐことは出来ない。しかし、古墳發掘は、決して珍らしいことではないので、むかし、曹操の時に、摸金校尉といふものがあつて、漢代の帝陵に、どしどし手を著けて、頻りに之を荒したといふことである。

過海昌、贈李侯

海昌を過ぎて、李侯に贈る

閒廳晝下簾、秋色滿疏髯。

閒廳、晝、簾を下し、秋色、疏髯に滿つ。

久戍殘兵老、多貧長吏廉。

久戍、殘兵老い、多貧、長吏廉なり。

陰風潮動郭、晴日地生鹽。

陰風、潮、郭に動き、晴日、地、鹽を生ず。

三老相逢說、年來戶牘添。

三老相逢うて説く、年來、戶牘添ふと。

【字解】

【一】閒廳 ひまな役所。【二】久戍 久しく駐屯して居る。【三】多貧 貧窮甚しきこと。【四】生鹽 鹽を製出する。

【三老】

禮記に「三老五更を大學に食はしむ」とあつて、月令章句の注に「三老は國老なり、五老は庶老なり」とある。【六】戸牘 牘は利、利戸、規定以外の居室。

【題義】

海昌は鏡塘の南、作者は吳越に游んだ時、ここを通過したので、前に卷三、登海昌城樓一望、海の題下に詳しく述べて置いた。李侯は李君に同じく、前に卷四に送海昌守李使君遷海虞の詩に見えた、その李使君である。この詩は、海昌縣を過ぎて、縣令の李君に贈つたのである。

【詩意】

縣の役所は、公務多端ならず、大に閒暇ある處から、晝でも、簾を下して閉廳することがあるし、秋色は、君の疏髯に滿ち、大分霜を帯びて白く成りかけて來た。久しく、屯營を撤せざる爲め、居殘りの兵卒も年老い、貧窮の甚しきに甘んじ、長官たる君は、廉潔を以て知られて居る。陰風吹

き到老折から、潮聲は城郭を動かさし、天が晴れて日がきらきらして居る時には、鹽田に於て、どんどん鹽を製出する。かくの如く、地僻にして争亂に遠ざかり、且つ殖産が盛であるから、戸口蕃殖し、古老の話では、年年、剩戸が頻りに増加したとのことである。

送易從事祖飲南渚

易從事を送りて、南渚に祖飲す

疏楊映老荷。別處最秋多。

疏楊、老荷に映す、別るる處、最も秋多し。

送客年年路。愁人日日波。

客を送る年年の路、人を愁へしむ日日の波。

霞明添醉色。風急斷離歌。

霞、明かにして醉色を添へ、風、急にして離歌を斷つ。

莫爲官程促。青山易看過。

官程の爲に促さるる莫れ、青山、看過し易し。

【字解】

一 疏楊 半ば落葉して、まばらに成つた楊柳。二 老荷 末になつた蓮の花。三 官程 官で規定された日程。

【題義】 易從事は名字不詳。祖は、犯鞞の祭を行ふ、つまり、出發に先つて、道祖神を祀ること、それから轉じて、送別の意味になる。この詩は、易從事の遠行を送り、仍つて、南渚に於て宴飲を催したといふので、この人は、蓋し舟で行くと見える。

【詩意】 半ば落葉して疏になつた柳は、末になつた蓮の花に映じ、ここ送別の處が、一番秋景に富んで居る。年年、ここより出發する客を送るが、日日、江上の波は、人を愁へしめる。夕やけが赤くなる頃、人も醉色を添へ、風が急なるとき、別れの歌を止め、追手の風に送られて、君は愈よ出發される。行く手の青山は、景色頗る面白いが、ただ輕輕看過し易いから、豫定の日程に促されて、あまり、忙しく行き過ぎざらむことを切望する。

【餘論】 前聯は、平凡の様であるが、實は鍾鍊の後に得たる名聯である。

題張靜居畫

張靜居の畫に題す

楚客寫荆岑。秋雲隔浦陰。

楚客、荆岑を寫す、秋雲、隔浦陰る。

人家連橘塢。水廟映楓林。

人家、橘塢に連り、水廟、楓林に映す。

亂後清游歇。愁邊遠色深。

亂後、清游歇み、愁邊、遠色深し。

相看休向晚。怕有峽猿吟。

相見て晚に向ふを休めよ、怕らくは峽猿の吟するあらむ。

【字解】

一 楚客 張靜居を指す。二 荆岑 荆は楚の別名、もと同意義の字だから通用したのである。岑は峰、故に楚山に同

【三】 橋塢 塢は堤。【四】 水廟 水邊の祠廟。【五】 峽猿吟 峽中に棲む猿が鳴く。

【題義】 説明に及ばぬ。

【詩意】 これは、楚客が、その故郷の山を寫したので、一片の秋雲、浦を隔てて前の方に横はり、此方では、柑橘を栽培してある隄の上に連り、水邊の祠廟は、紅葉の林に映じて居る。畫中の風景は、かくの如くであるが、亂後の事として、清游を試むるに由なく、愁邊には、遠景が一層ぼんやりして居る。この畫を眺めて、日暮に及んだならば、峽猿が我が心を知つて、悲しげに叫び出すかも知れぬから、いい加減に巻いて收めるが善からう。

夜懷王校書

夜、王校書を懷ふ

燈暗獨吟餘。疏桐月滿除。

燈は暗し獨吟の餘、疏桐、月、除に滿つ。

蟲寒初入戶。鼠餓欲侵書。

蟲寒くして初めて戸に入り、鼠餓えて書を侵さむと欲す。

河漢三更望。江湖兩地居。

河漢、三更に望み、江湖、兩地に居る。

相思無去夢。今夜恨何如。

相思、夢を去るなし、今夜恨何如。

【字解】 【一】 月滿除 除は庭階、劉兼の詩に月移花影過庭除とある。【二】 河漢 銀河。

【題義】 説明に及ばぬ、校書は官名。

【詩意】 ひとり沈吟しつづある間に、油は盡きて、燈火が暗くなり、葉の疏になつた桐の上の月が、光を庭階に投じて居る。蟲は寒氣に恐れて、はじめて戸に入り、鼠は餓えて、書を嚙ちらうとして居る。銀河は、三更の頃に望むべく、江湖の廣きに、君の一家は兩地に分かれて居る。君を思ふ心は、夢中だに離れず、殊に、今夜の恨は如何ばかりか、どうか察して呉れ玉へ。

答陳則見寄

陳則の寄せらるるに答ふ

何由慰遠思。獨詠寄來詩。

何に由つてか、遠思を慰めむ、獨り詠す寄來の詩。

行路方難日。清秋欲盡時。

行路、方に難きの日、清秋、盡きむと欲するの時。

江多驚雁火。樹少宿鳥枝。

江には雁を驚かすの火多く、樹には鳥を宿せしむる枝少し。

早晚如相見。應憐有鬢絲。

早晚、もし相見なば、應に鬢絲あるを憐むべし。

【字解】 【一】 遠思 遠き相思の情。【二】 寄來詩 陳則より寄せ來りし詩。【三】 早晚 その内、いつかの義。【四】 鬢絲 白髮。

【題義】 説明に及ばぬ。そして、陳則は、前に見えて居た。

【詩意】 何に由つて、遠き相思の情を慰むべきか、君から寄せ来りし詩を朗吟するのが、せめてもの心遣りである。今しも、天下争亂に苦み、愈よ行路難を嘆する折から、殊に清秋も將に盡きなむとして居る。江上には、飛雁を驚かす様な漁火が殊に多く、樹梢には烏鵲を宿せしむる様な枝も少く、打見るからに、蕭條の至。その内、幸に逢ふことが出来たならば、君は、我が兩鬢に白髪を生じて、形容の痛く枯槁したのを氣の毒に思つて呉れるであらう。

【餘論】 前聯は感愴淋漓、殊に餘情の盡きざるを覺える。

煮藥

藥を煮る

葉燥井泉清、山窓藥在鑪。

葉は燥いて井泉清く、山窓、藥、鑪に在り。

燈前看火候、枕上聽潮聲。

燈前、火候を看、枕上、潮聲を聽く。

味熟吟方就、香來病已輕。

味熟して吟方に就り、香來つて病すでに輕し。

何時采芝朮、養得羽翰成。

何時の時か、芝朮を采り、羽翰を養ひ得て成らむ。

【字解】 〔一〕葉燥、落葉を拾ひ集めて燃料にする、それが丁度よく乾いて居る。〔二〕在鑪、鑪は鍋。〔三〕火候、火の加減。

〔四〕芝朮、芝は靈芝、朮は藥草の名。

【題義】 説明に及ばぬ。

【詩意】 燃料にする落葉は乾き、汲み立ての井水は奇麗に澄んで居る。そこで、藥を鍋に入れて、山窓の下で之を煮立てる。燈前に居て火加減に注意し、やがて煮え上がると、枕上に潮聲を聞く様な氣がする。藥の味の丁度善く成つた頃に、考へて居た詩が恰も完成し、一種の香氣の漾ふ時、病氣も既に直つた様な氣がする。何時の時か、靈芝草朮の類を採取して服し、そして、羽が生えて登仙する様にすることが出来やうか。

【餘論】 瑣細な事柄を稍や面白く言ひこなしたのは、流石に手腕を見るべきも、題の性質上、格別彼此云ふべき程のものではない。

夜投西寺

夜、西寺に投ず

江月上秋衣、來敲遠寺扉。

江月、秋衣に上り、來つて敲く遠寺の扉。

棲禽驚客至、睡僕訝僧歸。

棲禽は客の至るに驚き、睡僕は僧歸れるかと訝る。

鐘度行廊盡、燈留浴院微。

鐘は行廊を度つて盡き、燈は浴院に留まつて微なり。

非無招旅館、禪寂願相依。

招旅館なきに非ざるも、禪寂、願はくは相依らむ。

【字解】 〔一〕行廊 通行用の長廊。 〔二〕浴院 風呂場。 〔三〕招旅館 旅客を招き入れる亭館、即ち旅館。

【題義】 説明に及ばぬ。但し、西寺の本名は、何と云ふか、分からぬ。

【詩意】 江上の月、はじめて上つて秋衣を照らす頃、ここに寺の扉を敲いて、一宿を乞うた。すると、樹上の棲禽は、不意の客來に驚き、廊下に睡つて居た寺男は、僧の歸つたのではないかと思つて居た様子。寺内に見るところは、夜半の鐘、はるかに響いて長廊を度りて盡きなむとし、風呂場には、燈火が微に残つて居る。もとより、普通の旅館が無いではないが、禪寂の境に身を寄せたいと思つて、強ひて、此に泊まつたのである。

【餘論】 大全集には鐘度三行廊盡の盡の字を遠に作り、遠寺の遠と重複して居て、ここに掲げた金檀注本の方が宜しい。

送石明府之崑山

石明府の崑山に之くを送る

茂苑行春罷。攜琴又向東。
潮聲數里外。山色半城中。

帆帶桃花雨。衣翻柳葉風。
島夷聞善政。爲有船舶通。

帆は帯ぶ桃花の雨、衣は翻る柳葉の風。
島夷、善政を聞かば、爲に船舶の通するあらむ。

【字解】 〔一〕茂苑 即ち長洲苑、前に數見ゆ。 〔二〕行春 太守が春に方つて領内を巡檢すること。 〔三〕攜琴 宓子賤の故事を暗用したのであらう。 〔四〕桃花雨 桃の花に降りかかる雨。 〔五〕柳葉風 風土記に「河朔春時、疾風數日、一たび作らば三日乃ち止む、吹花擊柳風といふ」とある。 〔六〕船舶通 太倉州志に「太倉は、一故と崑山の州治たり、海は州城の東七十里に在り、外、琉球日本等六國に通ず、故に太倉の南關、これを六國馬頭といふ」とある。

【題義】 明府は太守の美稱、石某の名字は不詳、崑山は今の上海の附近。この詩は、即ち石某の崑山太守に赴任するを送つたのである。

【詩意】 君は蘇州に居て、この春、巡檢を済ましたばかりなのに、今度は、例の琴を攜へて、東方に赴任されることになつた。その地は、海の近くで、潮聲は數里の外に聞こえ、一望の平郊で、山の一半は、城中でなければ碌碌見えぬ位。途すがら、征帆は、桃花に降り注ぐ雨を帯び、吟衣は、柳の葉を揺らす軟風に飄つて、時節柄、旅も氣散じなものであらう。島夷どもが、君の善政を聞いたならば、互市貿易を成さうと思ひ、船舶相通して、頻繁に來往することは、受合である。

【餘論】 後聯は明靚の至、濃春の煙景は、まさしく、この十字に盡きて居る。

過城西廢塲

城西の廢塲を過ぐ

亂前游最熟。亂後問都迷。
園散栽花戶。林荒采菊蹊。
廢泉流圃淺。斜日下城低。
唯有煙中鳥。迎人依舊啼。

亂前、游、最も熟す、亂後、問へば、すべて迷ふ。
園には散す、花を栽うるの戸、林は荒る、菊を采るの蹊。
廢泉、圃に流れて淺く、斜日、城に下つて低し。
唯だ煙中の鳥のみあり、人を迎へ、舊に依つて啼く。

【字解】 一、游、最熟、兼く遊びに來りしこと。二、栽、花、圃、園丁の家。三、采、菊、蹊、小徑。

【題義】 この詩は、蘇州城西の荒廢した隄を過ぎて作つたのである。

【詩意】 亂前には、頻繁に此處に遊びに來たが、亂後、今はじめて來り過ぎて、いろいろ問うて見ると、すべて心に迷ふことのみである。園中には、園丁の家が散點して居るが、林下に通じて、かつて菊を採取した小徑は、荒れはてて仕舞つた。灌溉用の泉は、碌碌手入をせぬ爲に、いつしか廢し、烟地に流れて居ても、極めて淺くなり、日は斜にして、城壁の下に低く沈んで行く。唯だ煙中の鳥のみは、人を迎へて、むかしの様な聲で啼いて居る。

【餘論】 廢泉、斜日の一聯は、亂後荒廢の景を道ひ得て、極めて切實である。

送范架閣赴嘉禾兼簡李使君

范架閣の嘉禾に赴くを送り、兼ねて李使君に簡す

陸相祠前路。孤舟欲上時。
空江難晚別。荒郡易秋悲。
月送潮生早。雲隨雁去遲。
幕中知有子。太守只題詩。

陸相祠前路、孤舟、上らむと欲するの時。
空江、晚に別れ難く、荒郡、秋悲み易し。「こと遅し」
月は潮を送つて生ずること早く、雲は雁に隨つて去る。
幕中、知る、子あり、太守、只だ詩を題するを。

【字解】 一、陸相祠、嘉興府志に「陸宣公祠は、府治の南に在り」と見ゆ。

【題義】 架閣は太守の次役、范某の名字は不詳。嘉禾は、一統志に「嘉興府、三國の吳には嘉禾」といふとある。李使君は、即ち嘉禾の太守。使君は、太守の尊稱。この詩は、范某が架閣となりて嘉禾に赴任するを送り、併せて、手紙に代へて、その地の李太守に寄せたのである。

【詩意】 孤舟、愈よ其地に著し、陸宣公祠の前に上陸せむとする時、君の得意、いかばかりぞ。ここに、空江に臨みて、日暮、別を爲すことは、實につらく、殊に亂後の荒郡、秋を悲み易い。やがて、月は潮を送つて、さし上ること早く、雲は雁に隨つて、去ることが遅い。幕中に君が居て、萬事取捌けば、太守は、まことに安心で、暇なるまま、唯だ詩を作つて居られることであらう。

喜呂山人見過江館

呂山人の江館を過ぎらるるを喜ぶ

非君憐夙契誰肯顧柴門

君が夙契を憐むに非ずんば、誰か肯て柴門を顧みむ。

日短清江路風高大樹村

日は短し清江の路、風は高し大樹村。

交呈新著稿同發舊藏尊

交も新著の稿を呈し、同じく舊藏の尊を發す。

莫便尋歸棹心懷未盡論

便ち歸棹を尋ぬる莫れ、心懷未だ盡く論せず。

【字解】 一 夙契 むかしからの交誼。二 大樹林 地名、青邱の本陣に「沙湖の東に在り、南に通つて、吳淞江に切す」とある。

【題義】 説明に及ばぬ。呂山人は、前に數ば見えて居た。

【詩意】 君が舊來の交誼を思うて、態態、來訪されるに非ざれば、誰か敢て、この柴門を顧みるべきか。今しも、清江の路に、日は暮れ易く、名にしおふ大樹村は、風あたりが烈しい。君と對坐する間、引き替へ、取り替へ、頃ろ作つた詩稿を見せ、又一處になつて、貯への酒樽の口を明けた。まだ心中の思を十分に盡さず、話したいことが澤山あるから、さう直ぐに歸棹を尋ねず、マア緩ッくりして居るが善からう。

贈鄰友

鄰友に贈る

同居一塢中只隔水西東

同じく一塢の中に居り、只だ隔つ水の西東。

林近書燈露溪廻酒舫通

林は近くして、書燈露はれ、溪は廻つて酒舫通す。

放鳧長合隊移竹每分叢

鳧を放てば、長く隊を合し、竹を移せば、毎に叢を分つ。

只恐君微起難期作兩翁

只だ恐らくは、君、微起せられ、兩翁と作るを期し難きを。

【字解】 一 酒舫 酒を載せた游山舟。二 微起 朝廷より微されて塵を出る。

【題義】 一本に答丁校理見貽とあるさうだから、鄰友は即ち丁某、さきに校理に在職したが、頃ろは官を罷めて家居して居るのであらう。

【詩意】 君と予とは、同じく一塢の中に住し、水を隔てて東西に居るだけの相違である。林は近くして、君の讀書の燈火が見えるし、溪水は廻流して、游山舟が自由に通ずる。家鴨を放し飼にして置く、と、兩家の分が合して、その儘、一隊となることがあるし、竹を移植する時には、毎毎株を分けて贈ることになつて居る。平生の交情、かくの如く、只だ恐るるは、君が朝に微されて此を去り、兩翁と作るを期し難いと云ふ其事のみである。

【餘論】 林近、溪廻の十字は、水上鄰居の實況を寫して、畫筆猶ほ及ばざる底の活趣がある。

雨中就陳卿飲酒醉歸聞丁二臥病客樓賦此寄慰

雨中、陳卿に就き、酒を飲みて酔うて歸り、丁二の病に客樓に臥せるを聞き、これを賦して寄慰す

我醉聽歌後。君愁臥病中。われは醉ふ、歌を聴くの後、君は愁ふ、臥病の中。

山雲秋郭暗。江雨夜樓空。山雲、秋郭暗く、江雨、夜樓空し。

短燭知頻剪。清樽恨不同。短燭、頻りに剪りしを知り、清樽、恨むらくは同じうせず。

題詩非檄手。那得愈頭風。詩を題する、檄手に非ず、那ぞ頭風を愈やすを得む。

【字解】(一) 檄手 檄を草する手腕。(二) 愈頭風 三國志に「曹操、頭風を病む、陳琳が作るところの檄を讀んで、倉然として起つて曰く、これ我が病を愈やす」とある。頭風は即ち頭痛。

【題義】陳卿は、前に見えた陳則だらうと思はれるが、確證もないし、又詮議立をする程の必要もない。丁二は、前に卷八、夜飲丁二侃宅聽琵琶とあつた其人で、名は侃といふ。この詩は、雨中陳卿の宅を訪ひ、酒を飲んで酔うて歸り、丁侃が旅館に病んで居ることを聞いて、慰問の爲に寄せたのである。

【詩意】われ歌を聴いて後に、大醉して歸ると、君が病中、客舎に閉ち籠つて居るといふことを傳聞

した。山雲、低く地に垂れて、城郭秋暗く、江天雨急にして、夜樓人もなき折から、君は如何にして居るか。燭の短くなつたのは、しきりに之を剪つたからであるし、共に清樽を傾けざりしは、まことに遺憾である。恨むらくは、われ詩を作つても、むかしの陳琳の如く、巧に檄を草する手腕あるに非ず、従つて、これを君に寄せても、頭痛を愈やさしめることが出来ない。

【餘論】山雲、江雨の一聯は、例の如く、景の妙を極めて居る。

送醫士宋君之江上

醫士宋君の江上に之くを送る

詩瓢與藥囊。此去卽行裝。詩瓢と藥囊と、ここを去つて、卽ち行装。

跡隱名猶在。交親意未忘。跡は隠れて、名、猶ほ在り、交は親しくして、意、未だ忘れず。

別芸繙舊帙。嘗草試新方。芸を別つて舊帙を繙き、草を嘗めて新方を試む。

春水孤舟起。還來問竹房。春水孤舟起つ、還り來つて竹房を問へ。

【字解】(一) 詩瓢 詩稿を入れて置く瓢。唐詩紀事に「唐球、蜀の味江山に隱居す、詩を爲るとき、瓢を携つて圓となし、大瓢中に納る。没するに臨み、瓢を江に投じて曰く、斯文、苟くも沈没せずんば、得るもの、吾が苦心を知らむのみと。新渠に至る、眼も

のあり、曰く、唐山人の瓢なり」とある。(二) 別芸 芸は草の名、續博物志に「芸香、紙魚の蠶を避けしむ、故に藏書の室は芸室と

稱す」とある。【三】新方、新しい處方。【四】竹房、竹間の書房、劉長卿の時に竹房通開上方圖、書徑者訪三書游」とある。

【題義】説明に及ばぬ。但し、宋醫士の名字閱歴等は不詳。

【詩意】君は詩瓢と藥囊とを大切に持つて居るが、ここを去つて居を移す時も、この二物だけが、即ち荷物であつて、その他には、一長物だにない。君は、跡を隠して、あまり、宣傳を務めないが、それでも、評判は自然高いし、われとの交、殊に親しくして、決して忘れない。平生、何をして居るかといへば、芸草を掻き除けて、古い帙に収めた書籍を繕き、又百草を嘗めて、從來知られざりし新しい藥方を試みたりして居る。御都合で、移居されるのは仕方がないが、他日春水方に漲り、孤舟纜を解くに宜しくなつた時など、また此處に来て、竹間なる我が書室を尋ねて呉れ玉へ、その積りで御待して居る。

【餘論】兩聯、ともに精當、断じて移易すべからざるものである。試三新方の試の字を、大全集には識に作つてあるが、或は其方が善いかも知れない。

屏居

屏居

飲水依道者。心清無衆喧。水を飲んで道者に依り、心、清くして衆喧なし。

幽花落半樹。疏雨過荒園。幽花、半樹落ち、疏雨、荒園を過ぐ。

看山易云夕。尋澗偶窮源。山を見て云に夕なり易く、澗を尋ねて偶ま源を窮む。

欲喻靜中趣。居然忘我言。喻さむと欲す、靜中の趣、居然としてわが言を忘る。

【字解】【一】飲水、論語に、水を飲み、故を曲ぐ、樂、その中に在り、不義にして富み且つ貴き、我に於ては浮雲の如し」とある。【二】道者、有道の人。【三】易云夕、云は、ここにと訓す。【四】忘我言、陶淵明の雜詩に此中有真意、欲辯已忘言とあるに本づく。

【題義】屏居とは、世事を屏けて閑居すること。この詩は、即ち其間の感慨を敍したのである。

【詩意】われは、貧賤に安んじ、水を飲んで、有道者に親み、専ら修養を爲しつつあるから、一心清くして衆喧なく、極めて物靜かなる感じがする。眺めやれば、幽花は、木の半面だけ散つて仕舞ひ、疏雨は、荒園を過ぎ、紛華を競ひし春も、名残少くなりはてて仕舞つた。山を見て居ると、兎角夕なり易く、澗水を尋ねると、料らずも、その源頭を窮めたこともあつた。靜中の趣を、人に論して見やうと思ふものの、例の通り、言を忘れて、何と云つて善いか分からなく成つて仕舞つた。

立秋日

立秋の日

碧天收夏色。節氣變清商。碧天、夏色を收め、節氣、清商に變ず。

暑自今宵伏。風從此日涼。

暑は今宵より伏し、風は此日より涼し。

金莖初有露。玉氣未成霜。

金莖、初めて露あり、玉氣、未だ霜を成さず。

皜日并凄雨。潜催草木黄。

皜日と凄雨と、ひそかに草木を催して黄ならしむ。

【字解】「一」節氣、季節に同じ。「二」清商、秋は五聲に配當すると、商聲なるが故に云ふ。「三」金莖、漢の武帝が宮庭に設けたので、その上に盤があつて雲表の露を承ける仕掛になつて居る。「四」玉氣、純潔の氣。「五」皜日、照り輝く日。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】渺渺たる碧天、夏の氣色を收め、季候も、すつかり清商に變じて仕舞つた。そこで、暑熱も今日より勢を失ふべく、風も此日より涼しいであらう。金莖の上には、初めて露が溜まつたが、玉の様な純潔なる氣は、また結んで霜となるまでに至らぬ。これより、照り輝く日と、さびしげに降る雨とが、草木をして、次第に黄ならしめるのである。

效唐人贈邊將

唐人の邊將に贈るに效ふ

翩翩越騎將。負勇出山西。

翩翩たり越騎の將、勇を負うて山西を出づ。

射虜誇猿臂。封侯賭馬蹄。

虜を射て猿臂に誇り、侯に封せられて馬蹄を賭す。

候烽河外暗。伏幟草中低。

烽を候せば河外に暗く、幟を伏して草中に低し。

欲雪憑陵恥。須禽左谷蠡。

憑陵の恥を雪がむと欲せば、須らく、左谷蠡を禽にす。

【字解】「一」翩翩、勢よく貌。「二」越騎、後漢書百官志に「越騎校尉一人、二千石に比す」とあつて、その注に「その才力超越を取るなり」とある。「三」出山西、漢書趙主傳贊に「山東相を出し、山西將を出す」とある。「四」猿臂、臂長くして弓を挽くに便なること。史記李將軍傳に「廣、人と爲り、猿臂長し、その善射は、亦た天性なり」とある。「五」賭馬蹄、これは、格別の典故も無いが、馬を走らして、其速さを争つたといふことであらう。蹄の字は、韻を絶つて、止むを得ず點出したものと見える。「六」候烽、烽火の上るを伺つて居る。「七」河外、黄河の塞外より中國に入る處は、急に東南に向つて曲つて居る。ここが即ち後世の河套で、非常に肥饒である爲に、動もすれば、胡漢の争ふところとなつた。「八」憑陵恥、賊軍に威張られた恥辱。「九」左谷蠡、史記匈奴列傳に「匈奴、世、官號を賜へ、左右賢王、左右谷蠡を置く、最も大國なり」とある。つまり、匈奴大臣の稱。

【題義】唐人の集には、贈邊將といふ題が屢ば見える、仍つて、青邱は、試みに之に擬して作つたのである。

【詩意】君は、今翩翩たる越騎の將校として知られて居るが、もと勇氣を自負して、山西地方から出仕したものである。賊を射ては、猿臂の長さを誇るべく、封侯の位を得むとしては、馬の速さを賭して、見事に勝つたこともある。烽火の擧がるのに注意して見て居ると、河外の方は、戰塵暗く立ちこめ、伏兵となつては旗幟を草中に低く偃せて、目につかぬ様にして居る。しかし、漢兵が賊に威張られた

舊日の恥を雪がむとならば、是非とも、匈奴の大臣たる左谷蠡を生捕にせねばならぬ。

送董湖州

董湖州を送る

五馬貴專城。花兼赤綬明。五馬、貴くして、城を專にす、花は赤綬と明かなり。

政條民乍識。賦籍吏初呈。政條、民、乍ち識り、賦籍、吏、初めて呈す。

山籠輪茶至。溪船摘芰行。山籠、茶を輪して至り、溪船、芰を摘んで行く。

非將茗雪水。誰比使君清。茗雪の水を將てするに非ざれば、誰か使君の清に比せむ。

【字解】(一)五馬。太守の美稱、前に數ば見ゆ。(二)專城。漢の樂府陌上桑に四十專三城居とある。太守といへば一州の長官

で、州城内に大威張りで居る。(三)赤綬。後漢書に「諸侯王は赤綬四條」とあり、太守は諸侯に比すべきが故に云ふ。(四)政條。施政の條目。(五)賦籍。課税の帳簿。(六)摘芰。芰は荷の類。(七)使君。太守の尊稱。

【題義】この詩は、董某の湖州太守となつて赴任するのを送つたのである。

【詩意】君は、今、太守となり、出でては五頭立の馬車に乗り、入つては州城を專にすべき大した身分で、赤い印綬は、花に映じて、一きは鮮かに見える。その著任に際して、施政の條目を人民は早くも心得、課税の帳簿を役人が第一に呈出する。湖州の地たるや、山谷の間に茶を産し、それを粗末

な籠に盛つて運搬し、又山水の眺も宜しく、船に乗つて溪中に芰荷を摘むことも出来る。君は、元と廉潔を以て知られた人で、苟くも、茗雪の水を以てするに非ざれば、到底、君の心の清きに比較することは出来ない。

【餘論】大全集には、この首の前に效唐人贈邊將があつて、又その前に、同じく送董湖州と題して、左の一首がある。

五馬貴專城。初勞問俗行。舟車輕客稅。鼓角靜邊聲。曉市煙中集。春筍雪後耕。茗山與茗水。應比使君清。

第一第八の兩句は、略ぼ相似て居るが、その他は、餘程違ふ。前聯は、政條民乍識の方が、民衆に切實であるし、後聯も、山籠輪茶至の方が、その地に特殊なるものを列擧したのだから面白い。又使君の清に比するにしても、水だけで澤山で、茗山を加へては適切でない。要するに、いづれも格別の名作で無いにしても、前に掲げた方が、なほ聊か優れて居て、おもふに、定稿であらう。大全集に、かくの如く接近して、二首ともに採録したのは、如何なる故か。

晚次西陵館

晚に西陵館に次す

五言律詩 送董湖州 晚次西陵館

匹馬倦嘶風。蕭蕭逐轉蓬。匹馬、倦んで風に嘶き、蕭蕭として轉蓬を逐ふ。
 地經兵亂後。歲盡客愁中。地は兵亂を経たるの後、歳は盡く客愁の中。
 晚渡廻潮急。寒山舊驛空。晚渡、廻潮急、寒山、舊驛空し。
 可憐今夜月。相照宿江東。憐むべし、今夜の月、相照らして江東に宿す。

【字解】「二」轉蓬、蓬の種が散ること、杜甫の詩に轉蓬行地遠とある。

【題義】西陵館は、前に卷三、夜抵江上候船至曉始行の第一句に夜辭西陵館とあつた其處で、一統志に「蕭山西陵渡、即ち西興。錢鏐王、陵の字を忌み、名を西興と易ふ」とあつて、錢塘江の岸上である。この詩は、矢張、その時に係るらしく、これを作つた後、夜、江上に抵つて、船の至るを候したのであらう。

【詩意】馬は、長途に倦きはてた爲か、風に向つて長嘶し、身は、蕭蕭として轉蓬を逐ふやうなものである。この地方一帯は、兵亂を経たる後、荒廢の様は、目もあてられず、客愁淒涼たる中に、今年も、將に盡きむとして居る。日暮、渡口、廻潮方に急に、寒山の下、舊驛殘破して、居民も碌に無い位。幸ひ今夜月があつたから、その光に送られて、江東に来て一宿することが出来た。

【餘論】前聯は、唐賢の口吻。大全集には、廻潮を隨潮に作つてあるが、さうすると、對仗精當を缺

いて、甚だ宜しくないと思ふ。

送顧別駕之邊郡

顧別駕の邊郡に之くを送る

故人雖盡別。相去獨君賒。故人、盡く別ると雖も、相去る、ひとり君のみ賒なり。
 緣路雲千埃。臨邊樹一家。路に緣る雲千埃、邊に臨む樹一家。
 渡江船載馬。到館燭驚鴉。江を渡らば、船、馬を載せ、館に到らば、燭、鴉を驚かす。
 莫歎孤城廢。春來尙有花。歎する莫れ、孤城廢すと、春來尙ほ花あり。

【字解】「二」千埃、埃は一里候、土を稍や高く盛り上げ、樹を植えて標としてある。

【題義】説明に及ばぬ。但し、邊郡の何の地たるかは分からぬ。

【詩意】舊知の人人、盡く御別をしたが、中にも、君だけは、一番遠くに行かれる。路に傍うて、一里塚は、數へ切れぬ位で、雲を帯びて相接し、邊界に臨めば、木の茂れる處に一軒の家がある。途すがら、江を渡る時には、馬をも舟に載せ、旅館に入つて燈火を點すると、宿鴉が驚いて飛び騒ぐ。しかし、亂後孤城の荒廢したことを歎息せずとも宜しいので、春來れば、自然咲き出づる花もあつて、

いくらか、心を慰めることも出来るであらう。

送僧恬歸靈隱

僧恬の靈隱に歸るを送る

游方應未久。柳色變新年。

游方、應に未だ久しからざるべし、柳色、新年を變ず。

在路逢春雪。還山訪冷泉。

路に在つて、春雪に逢ひ、山に還つて冷泉を訪ふ。

鐘催投寺錫。燈照泊江船。

鐘は催す、寺に投ずるの錫、燈は照らす、江に泊するの船。

法意休多問。無言即是禪。

法意、多く問ふを休めよ、無言、即ち是れ禪。

【字解】 游方、論語に「父母在、未嘗遊、遊必有方」とあるに本づく、然るべき方に遊ぶ。冷泉、亭の名、なほ題義の項を見よ。注意、佛法の極意。

【題義】 僧恬といへば、恬上人といふ坊さんであらうか、本名は分からぬ。杭州府志に「景德靈隱寺は、武林山の陰に在り、晉の咸和元年、梵僧慧理建つ、靈隱と名づく。宋の景德四年、景德靈隱寺と改む、寺前の冷泉亭は、飛來峰下に在り、唐の白居易記あり」と見え、西湖附近の一名勝である。この詩は、恬上人の靈隱寺に歸るのを送つたのである。

【詩意】 上人は、然るべき方に遊ぶ積りで出かけ、未だ久しからざるに、新年に際して、柳色青く芽

ぐむ頃となり、路すがら、春雪に逢ひ、旅も難儀だといふので、引きかへして、舊山の冷泉亭に歸られる。その間、日暮、鐘聲に促され、宿を野寺に乞うては錫杖を投じ、江上に船を泊すれば、燈火さびしげに照らすことであらう。今、別に臨んで、佛法の極意などは、質問せぬので、無言こそ禪の極致、それ以上の事は、到底、言葉で顯はされぬものである。

江上寄王校書行

江上、王校書行に寄す

寥落舊歡違。江邊獨掩扉。

寥落、舊歡違ふ、江邊、ひとり扉を掩ふ。

鄰家聞暮笛。客舍試春衣。

鄰家、暮笛を聞き、客舍、春衣を試む。

宿鳥歸山亂。行人渡水稀。

宿鳥、山に歸つて亂れ、行人、水を渡ること稀なり。

相思比花絮。斜日繞城飛。

相思、花絮に比す、斜日、城を繞つて飛ぶ。

【字解】 寥落、物さびしき貌。花絮、落花飛絮を合せて云ふ。

【題義】 王校書行は、即ち北郭十子の一、前に卷三、春日懷三十友詩の中にも見えて居た。校書とは、行が嘗て郡庠の經師となつたから云つたのであらうが、この時は、すでに生徒を謝して閑居した様で

ある。

【詩意】君は、さびしげに獨りで居て、むかしの友人にも遇はず、江邊に扉を掩うて隠れて居る。時あつては、鄰家に吹き鳴らす暮笛を聞き、時あつては、客舎に在つて春衣に著換へなどし、出入ともに、氣ままである。今しも、宿りを急ぐ鳥は、山に歸らむとして亂れ、旅客の水を渡るものも稀である。この時、君を思ふ我が心は、落花飛絮に比すべく、夕日影の中に在つて、城を繞つて飛び行くを禁せられない。

【餘論】鄰家聞暮笛、斜日繞城飛の二句の如きは、極めて不完全な語法で、意象を晦澁ならしめる虞がある。

送越將罷鎮

越將の鎮を罷むるを送る

楚客佩吳鴻臨邊最有功

楚客、吳鴻を佩び、邊に臨んで最も功あり

讀書圍壁裏賭酒射堂中

書を讀む圍壁の裏、酒を賭す射堂の中

旆出莎城雨笳吹柳浦風

旆は出づ莎城の雨、笳は吹く柳浦の風

越人相感意應與暮潮東

越人相感するの意、應に暮潮と東すべし

【字解】【一】吳鴻 李白の結客少年場行に「首插吳鴻」とあつて、その注に「吳鴻は釣名」とあるのを金櫃は引いて居るが、これだけでは、不十分である。吳越春秋に「閭閻、すでに其邪を賣とし、復た命じて、金釣を作らしむ。令して曰く、能く善釣を爲るものは、これを百金に賞せむと。釣を作るもの、甚だ衆し。人あり、王の重賞を食るや、その二子を殺し、血を以て金に塗り、遂に二釣を成して、以て獻す。釣に向つて、子の名を呼んで曰く、吳鴻魚精、われ此に在り」と。要、口に絶たず、釣、ともに飛んで父の胸に著く。王、大に驚き、乃ち百金を賞し、遂に服して身を離さず」とあつて、吳釣には相違ないが、もと工人の子で、後に釣の名となつたのである。【二】圍壁 圍城に同じ。【三】射堂 射を習ふ堂。【四】莎城 水邊の城。

【題義】この詩は、越地の鎮將某が官を罷めて歸國するのを送つたのである。

【詩意】君は、楚地の産にして、吳鴻の釣を佩び、邊境を鎮撫して、最も功績があつた。ある時は、書を圍城の中に讀み、ある時は、酒を射堂の上に賭し、大旆を莎城の雨に溼らしつつ打つて出で、胡笳を柳浦の風に吹かして進軍した。越人は、君の功德を感じて居るから、今君の去るに臨み、その意、暮潮と共に東して、長しへに付きまとうて來るであらう。

送王稹赴大都

王稹の大都に赴くを送る

王郎歌莫哀且酌姑蘇臺

王郎、歌、哀む莫れ、且つ酌め姑蘇の臺

獨客自傷別諸侯誰愛才。

獨客、自ら別を傷み、諸侯、誰か才を愛す。

關河千里去宮闕五門開。

關河千里去り、宮闕五門開く。

未肯輕齊虜新從下土來。

未だ肯て齊虜を輕んぜず、新に下土より來る。

【字解】

【一】王郎歌莫哀。杜甫の短歌行送王郎直二に、王郎酒酣拔劍新地歌莫哀とあるを轉用す。【二】五門。禮記の注に「天子五門、卑維庫廡洛なり」とあり、白居易の詩に「條星宿五門西」とある。【三】齊虜。漢書陳平傳に「上怒り、劉敬を罵つて曰く、齊虜、口舌を以て官を得たり、今、乃ち妾言して吾が軍を沮む」とある。【四】下土。上國に對して地方を指す。

【題義】

王績は、名字隠居、とりに不詳。大都是、今の北市で元の都。袁桷の上都華嚴寺碑に「宗王殊邦、奉貢效奉、咸な開平に會同す、これに由つて定めて上都となし、大典を大都となす。兩京の制、古昔に協ふ」とある。この詩は、王績が大都に上るを送つたのである。なほ題下の原注に、至正庚子作とあるから、その二十年で、作者が青邱に居た頃である。

【詩意】王君よ、激越なる哀歌を唱ふることなく、しばらく、ここ姑蘇臺で酒を酌まれよ。君は、仲間もなき獨客であつて、自然、別を傷むのであらうが、これから、折角上京した處で、諸侯の中、誰か才を愛するものぞ。千里の關河をたどり行けば、やがて、五門の開いた皇城に到達するが、道中は、なかなか容易ではない。もとより、地方から來たものだといつて、直ちに之を輕んじて、齊虜といふのは、宜しくないもので、ここに、君の材器を認めて、一肌ぬいで呉れるものあらむことを切望する。

する。

送孫主簿之德清

孫主簿の德清に之くを送る

山水匝秋城君行思已清。

山水、秋城を匝り、君の行、思、すでに清し。

道逢迎吏拜田雜成人耕。

道に迎吏の拜するに逢ひ、田は成人を雜へて耕す。

地遠知邊信家貧稱縣名。

地は遠くして、邊信を知り、家貧にして、縣名に稱ふ。

應攜一琴去相和長官鳴。

應に一琴を攜へ去り、相和して長官をして鳴らさしむべし。

【字解】

【一】迎吏。出迎へに來た僚屬。【二】成人。征戍の兵士。【三】稱縣名。縣の名を德清といふと相稱ふ。【四】攜一琴。題下の原注に「孫、琴を善くす」とある。【五】長官鳴。例の密子儀が琴を彈じて單父治まりしことを暗用す。

【題義】

説明に及ばぬ。

【詩意】

山水、秋城を環つて、風景殊に清爽、君は德清に行くに就いて、思、すでに清く、定めて、愉快なことであらう。やがて、その地に近づくと、道にして、出迎への僚屬の拜を爲すに逢ふべく、その邊一帶の田畑は、征戍の兵士が居民に交つて開墾して居る。地、すでに僻遠なるに因つて、邊界の消息は、却つて知ることが出來、家は清貧であつて、縣の名を德清といへるに稱ひ、まことに、名

詮自稱である。君は、琴を弾ることが上手ださうだから、宜しく、これを攜へて行き、長官をして、相和して弾せしめ、かの宓子賤が琴を弾じて堂を下らず、そして、單父が善く治まつたといふ様にならしむべく、つまり、縣令を輔佐して、その職を全うされむことを切望する。

【餘論】後聯は、その時、その人に極めて適切なるものと見える。

留別李侯

李侯に留別す

梅發津亭北。春隨使節廻。

梅は發す津亭の北、春は使節に隨つて廻る。

線多游子服。酒滿故人杯。

線は多し游子の服、酒は滿つ故人の杯。

鐘送橫江雨。車盤出峽雷。

鐘は送る江を横ざるの雨、車は盤す峽を出づるの雷。

平生感知己。臨別更徘徊。

平生、知己に感ず、別に臨んで更に徘徊。

【字解】(一) 津亭、舟つきの處に在る亭館。(二) 線多、孟郊の詩に慈母手中線、游子身上衣とある。(三) 車盤、盤はめぐる。

【題義】李侯は、前に數ば見えた海昌の縣令李某。青邱は、吳越の游を爲せし時、大分、世話に成つたと見え、その地を去るに臨み、この詩を賦して、留別の意を表したのである。

【詩意】梅は津亭の北にも咲き、春は今が盛りらしく、使節として來りし君に隨つて、ここに立ち廻つて來たものと見える。游子の著て居る衣服には、母が心を籠めて縫つて呉れた絲の筋が顯はれ、それにつけても、さう何時までも、異郷に居る譯には行かず、ここ別筵に於て、故人の差された杯に酒の滿つるにつけても、その好意は、感謝に堪へぬ。これより行けば、鐘聲遠く響いて、江天を横ざる雨を送り、車は盤行して、その輪聲は、峽を出づる雷かと疑ふばかり。君に對しては、平生知己の感ありしが故に、ここに別を爲すに際し、去りがてにして、しばし、徘徊して居る始末である。

寄熹公

熹公に寄す

禪居紫閣陰。欲去問安心。

禪居紫閣の陰、去つて、安心を問はむと欲す。

野岸隨流曲。山門隱樹深。

野岸、流に隨つて曲り、山門、樹に隠れて深し。

千燈燃雨塔。一磬出風林。

千燈、雨塔に燃え、一磬、風林を出づ。

想見跣趺處。雲多不可尋。

想ひ見る、跣趺の處、雲、多くして尋ぬべからず。

【字解】(一) 紫閣、終南の一峰、杜甫の秋興の詩に昆吾御宿自遙遊、紫閣峰陰入三澗とある。金檀の注に、洛陽伽藍記の景明寺、觀殿重房、青蓮紫閣とあるのを引いて済ましたのは誤である。(二) 跣趺、兩足を組んで、坐して禪を爲すこと。

【題義】 嘉公の本名は不詳、詩で見ると、この僧は、古しへの長安附近の終南山寺に居るものと見える。

【詩意】 上人の禪を爲すところは、紫閣の峰陰であつて、予も其處まで往つて安心の法を問ひたいと思ふ。その近傍なる野岸は流に随つて幾たびか屈曲し、山門は木に隠れて、なほ其奥に在る。千燈は、雨中の塔に燃えて輝きわたり、一磬聲永く、風に搖れる林から響き出づる。上人の禪を試みて居る處は、定めて、雲多くして、尋ねても分かり兼ねることであらう。

【餘論】 この詩は、兩聯も精當巧警、結末も振つて居て、略ぼ完璧に近いものである。

送王才歸錢塘

王才の錢塘に歸るを送る

南歸猶落魄 北上已蹉跎

南歸、なほ落魄、北上、すでに蹉跎。

草草官亭酒 勞勞客路歌

草草たり官亭の酒、勞勞たり客路の歌。

親知今日少 山水故鄉多

親知、今日少く、山水、故郷に多し。

七首空留在 酬恩竟若何

七首空しく留めて在り、恩に酬ゆる竟に若何。

【字解】 (一) 落魄 落ちぶれる。(二) 蹉跎 事、志と違ふ。おもふ様にならぬ。(三) 草草 忽忽と同義。(四) 官亭 官設の亭館。(五) 勞勞 懇懇に慰める意。(六) 親知 親友。(七) 七首 短劍。

【題義】 説明に及ばぬ。但し、王才の字竝に閱歷等は不詳。

【詩意】 君は、今落ちぶれて、南、錢塘に歸らうとして居るが、それは、さきに、北、帝都に赴き、いろいろ運動したが不成功に畢つたからである。ここに、忽忽として、官亭の酒を酌んで別をなし、勞勞として、客路の歌を唱へ、懇懇に慰める次第。たとひ、今日、親友は少くとも、故郷は、山水の景色が善いから、歸省したならば、鬱懷を散することも出来やう。唯だ懐中の短劍は、むなしく留めて、今でも持つて居るが、恩に酬いるには、さて如何したものか。つまり、さういふ人だに無いのである。

送長洲周丞陞吳縣令

長洲周丞の吳縣令に陞るを送る

青山隔苑橋 改邑去非遙

青山、苑橋を隔て、邑を改めて、去る、遙なるに非ず。

官食新添俸 民傳舊布條

官は食ます新添俸、民は傳ふ舊布條。

稻花迎午放 荷葉待秋凋

稻花、午を迎へて放ち、荷葉、秋を待つて凋む。

寂寞長洲路。空聞五袴謠。寂寞たり、長洲の路、空しく聞く五袴の謠。

【字解】【一】苑橋。苑は長洲苑、前に數ば見ゆ。【二】新添律。今度増加した律歌。【三】舊布條。むかしの弊衣。【四】迎午。午は亭午。【五】五袴謠。後漢書廉范傳に「范、字は叔度、蜀郡の太守たり。成都の舊制、民の夜作を禁じ、以て火災を防ぐ。范、乃ち前令を毀削し、但だ殿に水を鑄へしむるのみ。百姓便となし、乃ち之を歌うて曰く、廉叔度、來何暮、不禁火、民安作、平生無繡。今五袴」とある。

【題義】この詩は、周某が長洲縣丞より吳縣令に陞つて、轉任したので送つたのである。

【詩意】青山は、長洲苑の橋を隔てるのみで、橋の此方が吳縣、君は今回轉任されたけれども、相去ること、格別遠くもない。官よりは、新に増加せる俸祿を給せられ、人民は、むかし弊衣を着て居たことを傳へて、その清儉を讚美して居る。今しも、稻の花は、眞晝に當つて咲き出で、蓮の葉は、秋を待つて落ちる。顧みれば、長洲への通路は、寂寞として、むなしく、君の徳を頌する五袴の謠を聞くのみである。

冬至夜、喜逢徐七

冬至の夜、徐七に逢ふを喜ぶ

君來同客館。把酒夜相看。君、來つて、客館を同じうす、酒を把つて、夜、相看る。

動是經年別。能辭盡夕歡。動もすれば是れ經年の別、能く盡夕の歡を辭せむや。

雪明窓促曙。陽復座銷寒。雪明かにして、窓、曙を促し、陽復して、座、寒を銷す。

世路今如此。懸知後會難。世路今かくの如し、懸に知る後會の難きを。

【字解】【一】夜相看。夜相逢ふ。【二】能辭盡夕歡。これは反語に讀まなければ、意義が通ぜぬが、かういふ語法は許されるものか。【三】陽復。冬至は、一陽來復の節なるが故に云ふ、杜甫の詩に冬至陽生春又廻とある。

【題義】説明に及ばぬ。徐七は、即ち例の徐賁である。

【詩意】君が此地に來られしに就いて、同じ旅宿に泊まりこみ、酒を把つて、夜、會晤をなした。動もすれば、一年以上も別れて居たので、いろいろ、積る話もあるから、いかで徹宵の歡を辭すべきか。雪は明かにして、どうやら、窓が白みかかき、一陽來復の爲め、座上に寒氣が無いやうになつた。しかし、刻下の爭亂に際し、世路の難きことは、現に見るが如くであるから、後日の再會は、どうやら六つかしい様に思はれ、それにつけても、ここに、心ゆくまで晤談をしなければならぬ。

送史丞之海門

史丞の海門に之くを送る

黃茅連霧雨。此地久荒涼。黃茅、霧雨に連り、この地、久しく荒涼。

日出岬夷邇江通渤澥長。日は出でて岬夷邇く、江は通じて、渤澥長し。
 改官非謫宦到邑是還鄉。官を改むるは、謫宦に非ず、邑に到らば、是れ郷に還る。
 海上遙聞說歸人已裹糧。海上遙に聞説、歸人、すでに糧を裹む。

【字解】(一) 黄茅 枯れて黄ばんだ茅。(二) 岬夷 昔經に「分つて嶺中に命じ、岬夷に宅し、岬谷といひ、黄んで出日を貫す」とある。(三) 渤澥 渤海に通じ、元來は遼東の渤海であるが、ここでは、東海の嶺に用ひてある。

【題義】題下の原注に「史は淮東の人」とあるが、その名字等は不詳。海門は縣の名、前に甘露寺の詩中にも見えて居たが、一統志に「通州に屬す、今、海に没す」とある。この詩は、史某の縣丞となつて、海門に赴任するのを送つたのである。

【詩意】海門では、今しも、黄色に枯れかかつた茅が、霧の如き雨に連り、天色陰晦、おもへば、この地方は、荒涼すでに久しいことである。日が出れば、岬夷も近く見え、江水の注ぐところ、東海は、際涯もない。君が海門に改められしは、もとより、貶謫の爲めではなく、そして、一たび、その地に至らば、故郷に接近して居るから、歸つたも同然である。はるかに聞くとともに據れば、海上の流民どもは、君の來任を待つて、一齊に歸つて來やうとし、すでに、糧食を裹んで支度をして居ること、君にして、任に蒞まば、その期待に孤負せぬ様に心がけて貰ひたい。

夜雨宿東齋

夜雨、東齋に宿す

砌冷一蛩急窓虛諸葉稀。砌は冷かにして一蛩急に、窓は虚しくして諸葉稀なり。
 蕭條風雨夜幽臥掩牀幃。蕭條たり風雨の夜、幽臥、牀幃を掩ふ。
 鄰杵聽初歇齋燈看尙微。鄰杵、聽いて初めて歇み、齋燈、看て尙ほ微なり。
 忽憂歲暮事聊食故山薇。忽ち歲暮の事を憂ふ、聊か故山の薇を食はむ。

【字解】(一) 砌冷 砌は庭階。(二) 諸葉 いろいろの木の葉。(三) 牀幃 寢臺の上に吊した帷帳。(四) 齋燈 書齋の燈火。

【題義】説明に及ばぬ。但し、東齋は、婁江の寓居にでも在ると思はれる。

【詩意】庭階冷かにして、一蛩啼くこと急、窓はがらりとして、木木の葉は、すでに稀である。風雨蕭條の夜に當り、幽臥して、牀上の幃を下した。鄰家で砧うつ聲は、聽いて居る内に止んで仕舞ひ、齋中の燈火は、看ると、まだ消え残つて居る。ここに、今年も將に暮れむとすることを思うて、感慨禁せず、遠からず、歸郷して、故山の薇を食ひたいものである。

【餘論】この詩は、第一第二の兩句が對偶をなして居るから、前聯は、わざと散體を以て之を行つたので、唐人が毎毎用ふるところの變體の定式である。

師山周君客濠上思歸未得因畫舊隱圖求予賦詩

師山の周君、濠上に客たり、歸を思うて未だ得ず、よつて、舊隱圖を畫きて、予に求めて詩を賦せしむ

幾年留客舍。千里念家山。

得向圖中見。猶勝夢裏還。

菊畦經雨廢。薜屋帶雲關。

楚奏無窮意。相忘賴此間。

【字解】(一) 菊畦、菊を種みた畦。(二) 薜屋、葛がづらの卷きついて居る山中の舊宅。(三) 楚奏、楚聲の歌、王樂の賦に體無韻而楚奏分、莊馮顯而鶴吟とある。

【題義】師山は、姑蘇志に「吳縣十都村の名」とある。周君は、一に周伯常につけてあるから、字を伯常といふのであらうが、本名は不詳。濠上は、一統志に「鳳陽府、隋唐宋には濠州といふ」とある。舊隱圖は、むかしの隱宅の圖。すると、この題の意味は——師山の周伯常は、久しく濠州に客となり、歸郷しやうとしても、その機會を得ず、そこで、むかしの隱宅の圖を畫き、予に乞うて、詩を題せしめた——といふのである。

【詩意】君は、幾年の久しき、濠州の客舍に留まり、そして、千里を隔てたる師山を思つて居る。しかし、故郷の風景を圖中に見ることが出来れば、夢裏に還るよりも、聊かましである。折角、菊を種ゑてあつた畦も、雨を経て荒廢して居るし、葛かづらの纏うた山中の家は、雲を帯びた儘、戸を鎖してある。本来ならば、郷音の楚聲を以て無窮の意を歌ひ出づべき處であるが、この畫の御蔭で、すっかり忘れて居るのは、まことに面白いことである。

微恙江館夜作

微恙、江館夜作

寒燈坐江館。愁逼歲闌珊。

苦恨應催老。微痾似忌閒。

難前星列屋。雁外月臨灣。

明日將求藥。身猶懶入關。

【字解】(一) 江館、婁江の寓居であらう。(二) 歲闌珊、歳の暮になること。(三) 苦恨、にがにがしき客恨。(四) 求藥、仙藥を求める。(五) 入關、關谷關に入り、それから長安に上るといふのが本義で、功名の爲にあせること。

【題義】この詩は、青邱が一寸とした病に罹り、婁江の寓居に籠つて居て、ある夜、作つたのである。

五言律詩

師山周君客濠上思歸未得因畫舊隱圖求予賦詩

微恙江館夜作

【詩意】寒燈の下に、この江館に坐し、歳、將に暮れむとして、愁の廻り來るを覺えた。にがにがしい様な客恨は、やがて、人の老を催すべく、軽い病氣は、わが清閑を思んで妨害する様なものである。雁が曉を報ずるに先ち、羣星肅として屋上に列し、雁の鳴く彼方には、残月が灣に臨んで落ちかかつて居る。明日は、仙藥を求めて、長生不死を學びたいと思ふので、この身は、疏懶にして、到底、功名に志す様には成れない。

【餘論】第一句は、稍や語を成さぬ嫌ひがある。但し、後聯は、寒曉の景を刻劃して、簡勁切當である。

逢李止氷道人

李止氷道人に逢ふ

吹簫月滿舟。何處昔頻游。
 簫を吹いて、月、舟に滿つ、何の處か、むかし頻に遊ぶ。
 后土瓊花觀。仙人黃鶴樓。
 后土の瓊花觀、仙人の黃鶴樓。
 別來應未老。道在復何求。
 別來、應に未だ老いざるべし、道在り、復た何をか求めむ。
 相見俄還去。江城楓葉秋。
 相見て、俄に還り去る、江城楓葉の秋。

【字解】〔一〕后土瓊花觀 后土廟の中の瓊花觀。春明退朝錄に「揚州后土廟の瓊花、或は云ふ、唐より植うるところ、即ち李衛公の謂はゆる玉蕊なり」とある。〔二〕黃鶴樓 武昌の西南に在る。寰宇記に「むかし、費律登仙、毎に黃鶴に乗じ、この樓に於て駕を憩ふ、故に名づく」とある。〔三〕還去 還の字には意味がなく、唯だ立ち去るといふ意。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】君が簫を吹き鳴らせば、江天月忽ち上つて、舟に滿ちた。風流絶世、もとより、人間を超越して居るが、往年一番頻繁に游んだのは、何處かといふと、珍らしい瓊花の咲き匂へる揚州の后土廟、次には、仙人が折折音づれるといふ武昌の黃鶴樓である。一別以來、また老い去つた様でもなく、道にして存すれば、外に何も求めるには及ばない。ここで、御目にかかると、間もなく立ち去られるが、今しも、江邊の城郭は、紅葉の秋で、いづれ、途すがら奇景を探られるのであらう。

冬至夜雨感懷

冬至夜雨感懷

節序關何事。徒令百感生。
 節序、何事にか關す、徒に百感をして生せしむ。
 升沈當世事。存歿故人情。
 升沈當世の事、存歿故人の情。
 寒在微陽氣。風疏緩漏聲。
 寒在つて陽氣微なり、風疏にして漏聲緩かなり。

他年說今夜。聽雨宿南城。他年、今夜を説く、雨を聽いて南城に宿す。

【字解】(一) 升沈 得意と失意、立身と落魄。【二】 存歿 即ち生死。【三】 南城 城南に同じ。

【題義】 説明に及ばぬ。

【詩意】 折節の移り變りは、何事に關係あつて徒に予をして百感を生ぜしめるか。立身と落魄とは、當世の事であつて、流石に、心を勞せぬ譯には行かぬし、故人の生死に就いては、一しほ、わが情を傷ましめる。つまり、節序、その物よりも、それに聯關して、一身の變や友人の事などを考へるから、自然、かくの如くなるのである。冬至といふものから、寒氣が猶ほ残つて居る爲に、陽氣は、甚だ微弱であるし、風は疏にして、漏刻の聲が緩やかに響いて聞こえる。今宵雨を聽いて、城南に宿したことは、思ひ出の種となつて、他年必ず之を言ひ出すであらう。

過戴居士宅

戴居士の宅を過ぐ

江邊戴顓宅。地好愜幽尋。江邊戴顓の宅、地は好くして幽尋に愜ふ。

高樹藏卑屋。新篁補舊林。高樹、卑屋を藏し、新篁、舊林を補ふ。

鳥成留客語。雲作護花陰。鳥は客を留むるの語を成し、雲は花を護るの陰を作す。

不負滄洲約。重來論夙心。滄洲の約に負かず、重ねて來つて夙心を論せむ。

【字解】(一) 戴顓宅 南史に「顓は安道の子、宅は嶽縣剡山下に在り、乃ち秘題が千尋を指て築くところ。又徙つて吳下に居るや、士人、ともに爲に室を築き、石を疊し、花を栽み、徑を辟き、琴尊造訪するもの、虛日なし」とある。(二) 滄洲約 滄洲は東海の仙境、ともに其地に滯ぶといふ約束。(三) 夙心 むかしから變ぜぬ心。

【題義】 説明に及ばぬ、但し、戴の名字は不詳。

【詩意】 古しへの戴顓に比すべき居士の住宅は、江邊であつて、まことに好い處であるから、探勝の遊には、特に適して居る。高い木の立ち列ぶ間に、低い茅屋は隠されて仕舞ひ、新に出た竹は、舊林を補つて、隙間なく立ちこめて居る。鳥の聲は、心あつて客を留むる言葉の如く、雲は、花を保護する爲の曇りの様である。君と一緒に滄洲に遊ぶといふ兼ねての約束に違ふことなく、再び尋ねて來たならば、胸中を打明けて、いろいろ御話を致しませう。

歸鴉

歸鴉

啞啞噪夕暉。爭宿不爭飛。啞啞として夕暉に噪ぐ、宿を争うて飛ぶを争はず。

未逐冥鴻去。長先野鶴歸。
 未だ冥鴻を逐うて去らず、長しへに、野鶴に先つて歸る。
 荒村流水遠。古戍淡煙微。
 荒村、流水遠く、古戍、淡煙微なり。
 借問寒林樹。何枝最可依。
 借問す、寒林の樹、何の枝か最も依るべき。

【字解】(一)夕暉、夕日。(二)冥鴻、空飛ぶ雁。(三)古戍、古くなつた兵器。(四)何枝最可依、曹操の短歌行に「月明星稀、鳥鳴南飛、繞樹三匝、何枝可依」とあるを轉用す。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】歸鴉は、啞啞といつて、夕日に噪ぎつつ、鳩は争ふも、飛ぶことの先後は争はない。未だ空飛ぶ雁を追うて、遠くには去らないが、毎毎、野鶴に先つて歸つて來る。その時しも、荒れたる村落に於ては、流水遠く去り、古りたる兵營には、薄い煙が柵引いて居る。試に問ふ、寒林の樹の中で、何の枝が依るに適して居るか、つまり、汝は、それを探して居るであらう。

晚坐南齋寫懷二首

晚に南齋に坐し、懷を寫す 二首

雁過南齋暮。魂消默坐中。
 雁は過ぐ南齋の暮、魂は消ゆ默坐の中。
 賤貧長作客。愁病欲成翁。
 賤貧、長く客と作り、愁病、翁と成らむと欲す。

窓灑侵燈雨。庭翻走葉風。

窓には灑ぐ燈を侵すの雨、庭には翻る葉を走らすの風。

山妻猶解事。未遣酒樽空。

山妻、猶ほ事を解し、未だ酒樽をして空しからしめず。

【字解】(一)南齋、南を向ける書齋。(二)解事、よく理解して居る。

【題義】この詩は、日暮、南齋に坐し、おもつて居ることを寫したので、矢張、婁江寓居中の作であらう。

【詩意】南齋、日將に暮れむとする時、雁は間近く啼いて過ぎ、默坐しつつある身も、覺えず、魂を銷した位。身は、貧賤に居つて、長く客となり、愁と病とに攻められて、老人に成りかかつて仕舞つた。燈火を侵す雨は、容捨なく窓に灑ぎかかり、葉を走らす風は、庭上に翻つて居る。ここに、感心なのは山妻で、よく物事を理解し、樽を空しからしめずして、いつでも、まんまんと酒を滿たして居る。

【餘論】前聯は、遺憾なく窮居の狀を盡し、人をして覺えず鳴鳴と呼ばしめる。

歲景看垂暮。羈踪嘆屢遷。
 歲景、看る、暮に垂んとし、羈踪、屢ば遷るを嘆す。
 有身能去俗。無術但論天。
 身あり、能く俗を去る、術なくして、但だ天を論す。

菊老江城酒。牀寒客舍甃。

菊は老ゆ江城の酒、牀は寒し客舎の甃。

愁中還一笑。兒女滿燈前。

愁中還た一笑、兒女、燈前に滿つ。

【字解】(一) 歳景、歳時の風物。(二) 霜餘、客舎に同じ。

【詩意】 見る見る、歳暮に近き景色となり、客蹤の数は遷るは、まことに嘆かばしいことである。この身は、どうやら、俗を超越して居るが、天命を向けかへる術はなく、唯だかういふものだといつて論ずるに過ぎぬ。江城の酒、將に盡きむとし、菊花すでに老い、客舎の甃は薄くして、吟牀も爲に冷かである。ただ、愁中、一寸笑ましげに覺えることは、兒女どもが燈前に滿ち、一家の眷屬が、残らず此に打集うて居ることである。

臘月廿四日雨中夜坐二首

臘月廿四日、雨中夜坐 二首

不興貧後歎。每動醉中吟。

貧後の歎を興さず、毎に酔中の吟を動かす。

涉難知天意。居閒長道心。

難を涉つて天意を知り、閒に居て道心を長す。

雁聲隨雨到。鬢色與年侵。

雁聲、雨に隨つて到り、鬢色、年と侵す。

獨想平生事。蕭然坐夜深。

ひとり、平生の事を想ひ、蕭然として夜深に坐す。

【字解】(一) 涉、難を経験する。(二) 道心、人心の對、道義より發する心、書經の大禹謨に「人心惟危、道心惟微なり」とある。

【題義】 臘月は、臘の祭をする月、即ち十二月、その二十四日、夜、雨に坐して作つたので、官を罷めて後のことと思はれる。

【詩意】 貧後の嘆息は起さないが、毎酔中に放歌するを例として居る。艱難な事を経験して、はじめて天意を知り、清閒に居て、道義の心を長じた。雁聲は、雨に隨つて聞こえ、白髪は、年と共に殖える。ひとり平生の事を追想し、深夜、蕭然として獨坐して居る。

身退惟宜靜。謀疏且任眞。

身退いて惟だ靜に宜し、謀疏にして、且つ眞に任かす。

樓空三日雨。書亂一牀塵。

樓は空し三日の雨、書は亂る一牀の塵。

邱隴多良友。江湖獨放臣。

邱隴、良友多く、江湖、ひとり放臣。

莫嗟年景暮。轉眼是新春。

嗟する莫れ、年景の暮るるを、眼を轉すれば、是れ新春。

【字解】(一) 任眞 性情の眞に任かせる。(二) 邱隱 墳墓。(三) 放臣 放ち歸らしめた臣下。青邱は、官を罷めて歸里したのである。

【詩意】身、すでに退いた上は、唯だ靜寂に居るが宜しく、生來、事を謀ることが迂疏であつて、しばらく、おのが性情の眞に任かせて居るのみである。樓は空しくして人なく、雨、三日に及び、書物は取り散らした儘で、塵は吟牀に滿ちて居る。顧みれば、良友の墳墓に歸せしもの、次第に多く、われは獨り放逐の臣として、江湖に漂泊して居る。しかし、年が暮れかかつたといつて嗟嘆せずとも善いので、眼を轉すれば、新玉の春が既に來かかつて居る。

【餘論】樓空の一聯は、あつさりして居るが、一寸面白い。

書曹谷才世訓詩後爲其子季常作

曹谷才の世訓詩の後に書す、其子季常の爲に作る

綠野高人第、清門舊相家。

綠野高人の第、清門舊相の家。

篇章存月露、翰墨走龍蛇。

篇章、月露を存し、翰墨、龍蛇を走らす。

作戒言惟切、詒謀歲已賒。

戒を作つて、言、惟だ切、謀を詒して、歲、すでに賒なり。

過庭雖有訓、得與共傳詩。

過庭、訓ありと雖も、ともに、共に傳詩するを得たり。

【字解】(一) 綠野 唐の裴度の別荘の名、舊唐書の本傳に「午橋に於て別墅を創し、花木萬株、中に涼齋書館を起し、名づけて綠野堂といふ」とある。(二) 舊相家 史記に「惠帝二年、曹參入つて相たり」とあつて、曹谷才は、その末裔と見える。(三) 月露 隋書李諤傳に「連露葉積、月露の形を出でず」とある。(四) 龍蛇 曹唐の游仙の詩に「大篆龍蛇隨筆札」とある。(五) 過庭 論語に、孔子の子たる鯉が趨りて庭を過ぎし時、孔子が呼びとめて、詩禮の學ぶべきことを説いたことを指す。

【題義】これは、曹谷才といふ人が子孫に遺した世訓詩といふものがあつた處が、その子の季常に頼まれて、その後に題したのである。

【詩意】君の屋敷は、綠野堂に住まへる彼の裴度と同じく、又現に清門で、舊と宰相を出した家筋である。今見せられた世訓詩の篇章は、月露の形を存して、隨分立派であるし、翰墨は、龍蛇を走らすが如く、大へん見事である。子孫に規戒を與へた言葉は、まことに適切であるし、その謀を貽されてより、大分年も過ぎた。これは、謂ゆる庭訓で、普通よその人は見ることが得ぬものであるが、ともに之を傳へて、他に誇ることの出來たのは、まことに結構なことである。

題山居圖爲僧賦

山居圖に題す、僧の爲に賦す

行負貝多書、青山別舊廬。

行く、貝多の書を負うて、青山、舊廬に別る。

亂尋安土避貧借破庵居。亂には、安土を尋ねて避け、貧には、破庵を借りて居る。
 吟苦非愁裏禪癩似病餘。吟の苦なるは愁裏に非ず、禪に癩せて病餘に似たり。
 思歸休看畫來去盡空虛。歸るを思つて畫を見るを休めよ、來去、盡く空虛。

【字解】(一) 貝多書 西歸經に「貝多樹、多く摩伽陀國に出づ、西土、以て經を寫すに用ふ」とある、即ち佛經。(二) 安土 安寧な處。

【題義】 山居圖は、ある僧の舊山住菴の圖と見える。

【詩意】 上人は、御經を背負ひ、青山の舊廬に別れて出て來られたが、そは爭亂に際し、安土を尋ねて難を避ける爲めであつて、もとより、貧乏である處から、住み古して無住に成つた小菴を借りて、そこに落ち付いた。平生苦吟して居て、必ずしも愁裏ではなく、又禪を試むる爲に瘦せ細つて、丁度病氣をした揚句の様である。ここに、舊廬に歸らうと思つても、この畫など、あまり見ない方が善いので、もとより、禪家の身、來去皆空虛、此處も、彼處も、格別大差ある譯ではない。

題華氏瑩芝檜圖

華氏瑩の芝檜の圖に題す

誰指牛眠處江山地最靈

誰か牛眠の處を指す、江山、地最も靈

氣鍾孤檜碧祥表五芝青

氣は孤檜の碧を鍾め、祥は五芝の青を表す。

影動春雲亂香敷曉露零

影は動いて春雲亂れ、香は敷いて曉露零つ。

知君家種德曾讀墓前銘

知る、君が家に德を種るたるを、かつて讀む墓前の銘。

【字解】(一) 牛眠處 晉書に「陶侃微なる時、眼に丁り、將に葬らむとす、家中忽ち牛を失ひ、在るところを知らず、一老父に遇ふ。謂つて曰く、前同に一牛の山阿中に眠るを見る、その地、もし葬らば、位、人臣を極めむ、と。言訖つて見えす。侃、牛を尋ねて之を得、因つて、その地に葬る」とある。(二) 祥表五芝青 神農經に「五色の神芝、皆聖王の休祥」とある。

【題義】 この詩は華氏の先瑩に生じたといふ靈芝と檜とを畫いた圖に題したのである。無論、風水の説に依つて、墓邊に、かういふものの生じたのは、極めて目出たい瑞祥だといふので、その家では、態態、畫がかせたのであらう。

【詩意】 さきに、牛の眠つて居る處を指して、墓地を選定せしめたのは、誰であつたか。何は兎もあれ、ここは、江山の勝地で、最も靈異なる處である。孤檜の碧なるは、瑞氣の鍾まつたものであるし、青色の靈芝は、佳祥を表して餘あることと思ふ。檜樹の影動く時、春雲自ら亂れ、靈芝の香敷いて、曉天の露が落ちて來る。かつて、墓前の銘を拜讀して、君の家では、德を種るること、すでに久しきを知り、芝檜の祥瑞を呈したのも、無理ならぬことと感じた。

賦得銅人贈醫士

銅人を賦し得て、醫士に贈る

舊鑄明堂像。新圖太史書。
體成金冶內。穴試石砭餘。
摩狄年空老。求仙事亦虛。
君懷濟人意。爲此竟何如。

舊と明堂像を鑄り、新に太史の書を圖す。
體は成る金冶の内、穴は試む石砭の餘。
狄を摩して年空しく老い、仙を求めて事亦た虚し。
君は懐く人を濟ふの意、これを爲す竟に何如。

【字解】(一) 明堂像 唐書刑法志に「太宗、かつて明堂針灸圖を覽、人の五臟皆背に近く、針灸所を失へば、死を致すを見、詔して、銅人には、背を覆つを得ることならしむ」とある。明堂は、天子が諸侯を會する處で、その内に、種種の圖を懸けてあつたと見える。(二) 太史書 元史費默傳に「默、字は子聲、廣平肥鄉の人。母死す、南走して河を渡り、母黨吳氏に依る。醫者王翁、妻は子に女を以てし、醫を業とせしむ。轉じて、蔡州に客たり。名醫李浩に遇ひ、授くるに銅人の針法を以てす。德安に走る、孝感の令謝憲の子、伊洛性理の書を以て之に授く。乃ち、北、大名に歸り、姚福、許衡と朝暮講習、廢食を忘るるに至る。世祖即位、召して翰林侍講學士に拜し、後、累りに太師を贈り、魏國公に封じ、文正と諡す」とある。(三) 金冶 左傳、形民之力の注に「言ふ、國の民を用ふるは、當に其力に隨つて任すべく、金冶の器、器に隨つて制するが如し」とある。(四) 穴試 穴は窮處。(五) 石砭 石の針、漢書藝文志に「周れく、燧石湯火の施すところを度る」とあつて、その注に「燧は病を刺す所以なり、石は砭石を謂ふ、即ち石砭なり。古しへ病を攻むるには、石あり、今その術絶ゆ」とある。(六) 摩狄 狄は銅狄、即ち銅人。後漢書荀子訓傳に「人、長安の東霸城に子て子訓を見る、一老翁と共に銅人を摩摩し、相謂つて曰く、適ま此を鑄るを見る、しかも、すでに五百歳に近し」とある。(七) 求仙 漢の武帝が承露盤を鑄造したことで、銅人が盤を手にして、雲表の露を承けるといふ仕掛になつて居る。その露は、即ち仙藥を調合する時に用ふるのである。その評は、前に卷一、長安道の詩中に述べて置いた。

【題義】これは銅人、即ち銅製の人の像を賦して、某醫士に贈つたのである。

【詩意】むかしは、明堂の針灸圖を本として、銅人を鑄つたが、近ごろは、翰林侍講費默の書中に論ずるところに従つて、これを造つた。その銅人は、金冶の内に成り、そして、石針を打つ窮處なども、これに因つて、確知することが出来る。荀子訓は、かつて銅人を摩摩して、その既に五百年を経て空しく老いたことを嗟嘆し、漢の武帝は、承露盤の銅人を造つて、仙藥を調和させる爲に、雲表の露を承けしめたといふことだが、それも、格別の効果がなかつた。しかし、君は、此等と異にして、專ら人を救濟せむと欲し、醫學研究の必要上から、銅人を傍に置かれるので、その本志を達するには、なかなか、骨の折れることであらう。

夏景園廬

夏景園廬

門掩一齋空。幽懷獨坐中。
本同趨府客。偶似灌園翁。
魚鬪萍溪雨。蟬嘶柳巷風。
未須論夙志。聊復去樊籠。

門は掩うて一齋空しく、幽懷獨坐の中。
本と趨府の客に同じく、偶ま灌園の翁に似たり。
魚は鬪す萍溪の雨、蟬は嘶く柳巷の風。
未だ須らく夙志を論すべからず、聊か復た樊籠を去る。

【字解】(一) 齊宮 書齋に人の居らぬこと。(二) 趨府客 漢の樂府、陌上桑に盈盈公府步、冉冉府中趨とある、役所に出勤する。(三) 潘園翁 高士傳に「陳仲子は齊人なり。楚王、その賢を聞き、以て相と爲さむと欲し、使を遣して仲子を聘せしむ、遂に逃れ去り、人の爲に園に潘ぐ」とある。(四) 樊籠 劉桢の詩に、阜禽爭青樊樊籠とある、世上の係縛をいふ。

【題義】 この題の書き方は、いささか變てこであるが、園中の小廬に於て見たところの夏景を敘したのである。

【詩意】 門は閉ぢた儘で、書齋の中には人なく、獨坐して居る間、幽懷に耽つて居る。役所に出勤する人と同じで、勤め先もあるが、ここに閑居すると、偶然にも、庭園の世話をして居る庭男の様である。流に雨の注ぐ時、魚は浮草の間に闖入し、狭い小路に風吹き度る折から、蟬は柳の木の上で鳴いてゐる。これだけでは、まだ本來の夙志に協つた譯でもないが、聊か世の係縛を脱したのは嬉しい。

【餘論】 第二句に本同「趨府客」とある處を見ると、これは、青邱が南京の鍾山里第に居て、翰林に奉職した時だらうと思はれる。後聯十字は、例の敘景の妙語である。

寄題崇明學宮天心水面軒

崇明學宮の天心水面軒に寄題す

夜氣虛明際、齋宮息衆喧。夜氣虛明の際、齋宮、衆喧を息む。

詠餘風度瑟、坐久月當軒。詠餘、風、瑟を度り、坐久しうして、月、軒に當る。

雲盡無留翳、池清有活源。

雲盡きて留翳なく、池清くして活源あり。

心知此時意、欲論竟何言。心に此時の意を知る、論せむと欲して竟に何をか言はむ。

【字解】 (一) 齊宮 學宮に同じ。(二) 詠餘 詩を朗誦したる後。(三) 留翳 残れる影。(四) 活源 朱子の詩に「渠那得清如許、爲有源頭活水來」とある、絶えず水の湧き出る泉源。

【題義】 原注に「崇明は蘇州に屬す、今太倉に屬す」とあつて、揚子江口に在る沖積層の沙洲であらう。この島は、だんだん大きくなつて、島上の住民も増加し、仍つて、學校も、この頃、すでに建設されたことと思ふ。軒の名の天心水面は、邵康節の詩に「月到天心處、風來水面時」とあるのを取つたものと見える。

【詩意】 夜の氣の清虛にして微明なる頃、學堂も至つて物靜かで、かしましき聲は、全く絶えて仕舞つた。詩を朗誦して畢りし頃、風は徐に來つて瑟を度り、坐すること良久しき折から、月は高くさし上つて、軒に當つて居る。天上には雲晴れて、残れる影だになく、池の清きは、絶えず水の湧く泉源があるからである。予が心には、此時の意を十分に知つて居るが、さて之を述べやうとすると、何と言つて善いか分らない。

【餘論】 雲盡、池清の一聯は、敘景の語たるのみならず、修養の結果、全然、虛靈不昧となつた心境を畫き出したもので、つまり、情景融合の妙を極めたものである。結末は、例の此中有真意、欲辨已

忘言と同義で、究極は、かういふより外、仕方が無いものと見える。

送柔上人得船字

柔上人を送る、船の字を得たり

叢林初結夏。東去又飄然。

叢林、初めて結夏、東に去つて又飄然。

罷說天台講。行參雪竇禪。

天台の講を説くを罷め、行く、參す雪竇の禪。

殘經松下几。遠磬月中船。

殘經、松下の几、遠磬、月中の船。

不用空悲別。師今絕妄緣。

用ひず、空しく別を悲むを、師今妄縁を絶つ。

【字解】

【一】叢林 寺をいふ。【二】結夏 夏ごもり、前に圓明佛舎の詩中に詳説して置いた。【三】天台講 一統志に「天台縣北の圓清寺、舊と天台と名づく、隋の煬帝、智顛禪師の爲に建つ。唐の一行禪師、ここに于て算を學ぶ。後に異僧寒山拾得あり」と見ゆ、つまり、天台宗の説法。【四】雪竇禪 景德傳燈錄に「明州雪竇山常通禪師は、邢州の人、出家して長沙の岑和尚に參し、後、洞山の石霜に住す、しかも、法に異味なし。光啓中、徒を領して四明に至る、郡守、請うて雪竇に居らしめ、巖然として臺に起る」とある。

【題義】

柔上人の本名は不詳。その行先は、書いて無いが、詩で見ると、四明かと思はれる。得船字は、何かの句を分けて、船の字を得、仍つて、それを韻にして、この詩を作つたのである。

【詩意】

上人は、巖に名だたる寺に於て、夏ごもりをしたが、今度は、飄然として東に向ひ、天台の

説法を罷めて、雪竇の下に禪する積りである。松下の几には、讀み残した御經が置いてあるし、月中の舟に居れば、磬聲が遠く聞こえる。今ここで、別離を悲むは、まことに無用の事であつて、上人は、すでに妄縁を絶ち、世の俗人と全く異なつて居るのである。

中秋琵琶洲宴集得紅字

中秋、琵琶洲の宴集、紅の字を得たり

香霧夕濛濛。孤高桂樹東。

香霧夕に濛濛たり、孤高、桂樹の東。

影疏林際月。涼近水邊風。

影は疏なり林際の月、涼は近し水邊の風。

重露流杯綠。繁星亂燭紅。

重露、杯に流れて綠に、繁星、燭を亂して紅なり。

明年江海上。高會與誰同。

明年江海の上、高會、誰と同じからむ。

【字解】

【一】香霧 下に桂樹とあるから、特に香といつたのであらう。【二】孤高 ひとり高く差し上る。【三】重露 重げに

【題義】 王賓の吳中古蹟詩の序に「琵琶洲あり、舊治通判の西に在り、水清冽、酒を釀すべし」とある。この詩は、中秋の夜、吳中の琵琶洲に於て宴を催し、席上何かの句を分つて紅の字を得、それを韻にして作つたのである。

【詩意】月は獨り高く桂樹の東に上り、香ばしい霧は、夕に濛濛として居た。その月が林際に至るときは、影極めて疏に、風、水邊に起れば、涼、頗る近きを覺えた。重げなる露は、杯に流れて、酒と同じく綠色を爲し、數かぎりなき星は、燭火を亂して、赤く見える。今夕の宴は、まことに盛であるが、ひろい世間で、明年は誰と共に高會を催すべきか、それを思ふと、まことに感慨に堪へぬ。

【餘論】前聯は、この詩の生命であつて、殊に其上二句、わざと月の字を隠し、第三句に至りて、初めて之を點出したのは、多少の工夫を費したものである。

悼女

女を悼む

保養常多闕、艱難愧我貧。
 保養、常に闕多く、艱難、わが貧を愧づ。

悽悽臨歿語、的的在生親。
 悽悽たり臨歿の語、的的たり在生の親。

遺佩寒江月、殘燈夜室塵。
 遺佩寒江の月、殘燈夜室の塵。

中郎他日藁、留付與何人。
 中郎他日の藁、留付、何人にか與へむ。

【字解】【一】保養、保護して養育する。【二】艱難、世事の六つかしいこと。【三】的的、分明の貌。【四】遺佩、かたみの佩玉。【五】中郎他日藁、中郎は蔡邕、後漢書の本傳に「初平元年、左中郎に拜せらる」とある。その女、名は琰、字は文姬、才學あり。

つて、善く父の遺書を讀んに居たといふこととて、後漢書の列女傳に見え、前に卷十一、贈三續文則一の詩中にも引いて置いた。

【題義】これは、至正二十七年、青邱が其長女の夭折を悼んで作つたのである。

【詩意】汝を保護養育するに就いて、兎角、十分に行かなかつたのは、世事の艱難に逢ひ、且つ貧乏であつたからで、まことに、慙愧の外はない。汝が臨終の際の言葉は、悽悽として、現在生き残つて居る親どもは、聞くも痛ましき程であつた。形身の佩玉は、寒江の月に映じ、燈火残れる部屋の中には、塵が積つて居る。われは汝を見ること、蔡家の文姬の如く、死後は、遺藁を託する積りであつたが、先に死なれては、全くあてが外れたので、その折は、何人に付與すべきかと、今から思ひ惑ふばかりである。

亂後、經婁江舊館

亂後、婁江の舊館を經

此地昔相依、重來事已非。
 この地、むかし相依る、重來、事、すでに非なり。

新年芳草遍、舊里熟人稀。
 新年、芳草遍ねく、舊里、熟人稀なり。

遠燕皆巢樹、閒花自落磯。
 遠燕、皆樹に巢ひ、閒花、自ら磯に落つ。

遺蹤竟難覓、愁步夕陽歸。
 遺蹤竟に覓め難し、愁へて夕陽に歩して歸る。